
クロス×ドミナンス

白銀シュウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クロス×ドミニанс

【NZコード】

N7919Y

【作者名】

白銀シュウ

【あらすじ】

自称・性格思考以外は普通の高校生である主人公、梅村啓介は、
始業式を翌日に控えた日の夜、“墮天使”を名乗る少女、アリエル
と出会う。啓介は世界の全ては神の決めたものだという事と自分
これから辿る悲惨な運命を聞かされ、神の運命通りに悲惨な人生を
進みたくないのなら、自分と契約して“超能力者”になれとアリエ
ルに迫られる。契約を断る啓介だったが、それを快く思わない存在
がいて

超能力モノで最終的には世界を救う王道系の物語っぽくなる予定。
世界の闇が渦巻く裏世界で血で血を塗るような争いに巻き込まれながらも生きしていくアンチヒーロー系SFストーリー。

1微妙にハーレム要素アリ 2主人公最強モノ

ではない

登場人物紹介（最新話終了時点）（前書き）

この物語は、ある程度の史実を織り交ぜながらも完全にこの現実世界とは完全に別の未来を歩んでいる別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家とかその他の固有名称で特定される全てのものとは、何の関係もありません。何も関係ありません。

つまり、この物語はフィクションです。

登場人物紹介（最新話終了時点）

主要登場人物のみの紹介です。
かつ、一回以上登場した場合に限る。

『**梅村 啓介**』
（ながむら けいすけ）

- 【性別】男性
- 【年齢】16歳（最新話時点）
- 【誕生日】2月22日
- 【身長】174cm
- 【体重】57kg
- 【種族】人間
- 【国籍】日本国
- 【職業】学生（高二）
- 【出身地】日本国 徳島県
- 【家族構成】父・母・兄・姉・妹
- 【武器】なし
- 【能力階級】最上位能力者（LEVEL7）の第二十四位
- 【超能力】『**現実逃避**』
（ファンタジースタ）
- 【禁書目録】暗黒種
（ダーツマタ）
- 【契約対象】アリエル
- 【初登場】1 1『華麗奔放な少女』

この物語の主人公で、自称・性格思考以外は普通の高校生。ダークブラウンの男性にしてはやや長めの髪形をした中肉中背の凡庸な体型。

両親は既に死去・兄姉は独立・妹は県外の学校で寮暮らしのため、自宅で一人暮らししている。生活費は兄や姉が振り込んでくれている。

【性別】女性	『アリエル』
【年齢】不明（最新話時点）	【年齢】不明（最新話時点）
【誕生日】不明	【誕生日】不明
【身長】152cm	【身長】152cm
【体重】44kg	【体重】44kg
【種族】神々の超越者	【種族】神々の超越者
【国籍】不明	【国籍】不明
【職業】不明	【職業】不明
【出身地】失樂園	【出身地】失樂園
【家族構成】不明	【家族構成】不明
【武器】なし	【武器】なし
【能力階級】なし	【能力階級】なし
【超能力】不明	【超能力】不明
【禁書目録】なし	【禁書目録】なし
【契約対象】なし	【契約対象】なし
【初登場】1 1『華麗奔放な少女』	【初登場】1 1『華麗奔放な少女』

在。

水色よりやや薄いアクアブルーのロングヘアに翡翠色の瞳を持つ美少女。

ちなみに胸は啓介曰く「Aに近いBくらい」。

啓介曰く「今世紀十本指は間違いないくらいの美少女」。

現在は梅村家にて居候として生活している。

【性別】女性	『梅村葵』
【年齢】13歳（最新話時点）	『梅村葵』

【誕生日】	9月3日
【身長】	155cm
【体重】	50kg
【種族】	人間
【国籍】	日本国
【職業】	学生(中二)
【出身地】	日本国 徳島県
【家族構成】	父・母・兄(二人)・姉
【武器】	なし
【能力階級】	なし
【超能力】	なし
【禁書目録】	なし
【契約対象】	なし
【初登場】	1-3『お互いの想い』

梅村啓介の実妹。

啓介と同じ髪色のショートヘアという髪型に読者モデルとしてちよつとした小遣い稼ぎが出来そうなくらいには整った顔とスタイルをしている。

ちなみに胸は啓介曰く「C」。
県外の文学園に在籍しており、寮暮らしをしている。
兄弟仲はなかなか良好。

『
梅
理奈』

【性別】女性

【年齢】16歳(最新話時点)

【誕生日】7月11日

【身長】170cm

【体重】54kg

【種族】人間

【国籍】	日本国
【職業】	学生（高一）
【出身地】	徳島県 兵庫県
【家族構成】	父・母・弟
【武器】	日本刀
【能力階級】	最上位能力者（LEVEL7）の第十七位
【超能力】	電光剎華 <small>（ディエイサーレ）</small>
【禁書目録】	雷電種 <small>（トルエノ）</small>
【契約対象】	ラミエル
【初登場】	2 2『天罰少女』

この物語のヒロインで、啓介の昔に別れた幼馴染。啓介曰く「世界一自分を理解している他人」。ゴスロリとパンクを混ぜた改造制服のようなものを着用しており、真剣を一本携えている。

ちなみに胸は啓介曰く「Eに限りなく近いD」。

五年前の自爆テロで家族を失っている。

啓介とは昔、結婚の誓いをするくらいには仲良しだつたらしい

『ふたかざ
双風瑞希』

【性別】	女性
【年齢】	17歳（最新話時点）
【誕生日】	4月21日
【身長】	167cm
【体重】	55kg
【種族】	人間
【国籍】	日本国
【職業】	学生（高一）
【出身地】	東京都
【家族構成】	不明

- 【武器】不明
- 【能力階級】最上位能力者（LEVEL7）の第十二位
- 【超能力】不明
- 【禁書目録】テレポートーション転送種
- 【契約対象】不明
- 【初登場】26『そして誰もいなくなるのか？』
- 啓介、理奈、アリエルの前に現われた武装兵士達を束ねていた女性。
- 人前に滅多に姿を見せたがらない。
- 常に長袖の服やロングスカートを着用している。
- 理奈を一方的に追い詰めるほどの強力なテレポート能力を有している。

『長門 水晶』

- 【性別】男性
- 【年齢】16歳（最新話時点）
- 【誕生日】11月12日
- 【身長】176cm
- 【体重】55kg
- 【種族】人間
- 【国籍】日本国
- 【職業】学生（高一）
- 【出身地】長崎県
- 【家族構成】不明
- 【武器】不明
- 【能力階級】小上位能力者（LEVEL5）
- 【超能力】不明
- 【禁書目録】不明
- 【契約対象】不明

【 初登場 】 3 1『サブタレイニアン』

啓介・理奈と組むように上層部に言われて一人と出会った青年。
執事服のような服を着ている。

能力はまだ不明。

不知火 紗音瑠
しらぬい しゃねる

【 性別 】 女性

【 年齢 】 16歳（最新話時点）

【 誕生日 】 9月15日

【 身長 】 169cm

【 体重 】 53kg

【 種族 】 人間

【 国籍 】 日本国

【 職業 】 学生（高一）

【 家族構成 】 不明

【 武器 】 不明

【 能力階級 】 小上位能力者（LEVEL5）

【 禁書目録 】 不明

【 契約対象 】 不明

【 初登場 】 3 2『U·N·Owenからの招待状』

啓介・理奈と組むように上層部に言われて一人と出会った少女。
理奈とは仲が悪い。
能力はまだ不明。

真鍋 凌
まなべ りょう

【 性別 】 男性

【年齢】16歳（最新話時点）

【誕生日】6月29日

【身長】169cm

【体重】71kg

【種族】人間

【国籍】日本国

【職業】学生（高一）

【出身地】神奈川県

【家族構成】不明

【武器】不明

【能力階級】大上位能力者（LEVEL6）

【超能力】不明（情報を質量化する能力）

【禁書目録】不明

【契約対象】不明

【初登場】3月2日U.N.Owenからの招待状

啓介・理奈と組むように上層部に言われて二人と出会った青年。典型的なアキバファッショニ身を包んでいる。

アリスという人工生命体を使役している。

【1-1】 華麗奔放な少女（前書き）

この物語は、ある程度の史実を織り交ぜながらも完全にこの現実世界とは完全に別の未来を歩んでいる別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家とかその他の固有名称で特定される全てのものとは、何の関係もありません。何も関係ありません。

つまり、この物語はフィクションです。

【1-1】 華麗奔放な少女

「運命つてモノ、アナタは信じてる?」

まるで新興宗教に勧誘する狂信者のような台詞だったが、口ぶりからはそんな雰囲気が微塵も受け取ることが出来なかつた。むしろ純粹に、真面目に、哲学を語り合う学者たちのような雰囲気が感じ取られた。

「ありとあらゆる生物が誕生した時から神的存在から与えられていく決められた巡り合わせというものがこの世界では“運命”と呼ばれている。つまり言い換えれば、『過去が定まっているならば未来も定められている』ということにもなる」

午後十一時を過ぎた今の時間帯、本来ならば誰一人としていないはずの児童公園で二人の人間が対面していた。

優しさを思わせる風によつて夜桜が舞い散るこの公園はブランコと滑り台、鉄棒くらいしかない貧相な公園であつたが、近隣の子供たちにとつては数少ない遊び場であり、太陽の昇つている時間帯ならば子供達の喧騒で随分と騒がしい。

しかし、現在は風の音と風によつて揺れる木々の音くらいしかしない。

「自分が自分で考えて行動したことや考えた思想が最初から神によつてそななるように仕組まれていた、ということになる。例えば、十一歳の誕生日に事故で亡くなる人間がいたと仮定しよう。事故といつても不慮の事故だつたり信号無視による事故だつたりと分かれうだろうが…それは置いておこづ。とにかく、死んでしまった人間の周りの人間は嘆き悲しむはずだ。『どうして死んでしまったの』とね」

チカチカと点滅を繰り返す古ぼけた街灯では一人の顔が見えない。空も雲に覆われて月の光も差し込まない。

「…普通ならば事故・不幸・不運だつたと考え、そこで思考は停止してしまう。だけど、これが仕組まれたものだつたり犯人が故意にした行為　　突き飛ばしか信号無視とかだつたりしたら遺された人間は不幸だつた、で済ませることなんてできないでしょ？もし、その人間が“十二歳の誕生日に死ぬ運命”を持つて生まれてきた人間だなんて神に定められていたとしたら許せないでしょ？」

国道沿いの丘を登つた地点にあるこの公園からだと街の街灯やネオンによる明かりが結構見えるのだが、二人はそんなものに見向きもしなかつた。

話している話題は恋人の会話なんてもには程遠く、雰囲気も真逆のベクトルを突つ走つている。

今まで黙つて話を聞いていた片方の人間　　ブランコの前で立つていた男性は溜息をつく。

「…ここまで黙つて聞いてやつてたけど、お前は俺になんて言つて欲しいワケ？」

「何でもいいよ。アナタの意見が聞きたいの。アナタは自分の全てが神に掌握されていることをどう思つてるの？」

ブランコを吊るす両鎖を掴み、ブランコの板の上に立つ少女相手は男に回答を求める。

男は考えているのか黙り、何も口に出さない。

「考えてみなよ、テストで百点を取る為にがんばつて勉強したとしても神によつて定められていなければその努力も無駄、むしろいよいよ弄ばれた結果だけしか残らない。株で大儲けを企んだとしてもそうなる運命がその人間になければ大損して失敗するだけ。自分の意志なんか最初から無いものじやない。…意識だけ備え付けられた子供に操られるお人形と同義じやない」

「…じゃ、俺がモテないってのも、勉強が出来ないってのも、妹に険悪にされてるつてのも、全部は最初からそうなるように仕組まれていた、つてことでいいのかよ？」

「そうなるね」

男は黙る。

「まあ、人間の矮小で浅ましいプライドなら『何でも他人のせいにするな』っていう一言で終わるんでしょうけど…アナタはどう思うの？」

「そりや、運命論が確かに殴りたいくらいにはムカつくさ」

「…そう。ふふつ、そういう考えの人は嫌いじゃないよ」

少女は微笑む。

少し強い風が雲を動かし、月明かりを下界へと当てる。

満月。古くから特別な存在として恐れられてきた満月の明かりが二人を照らす。

「…で、結局お前は俺に運命云々の話をして、何がしたかったんだ？」

男は月明かりでよつやく見えるよつになつた少女の顔を見て少しだけ視線をずらす。

「…アナタは、価値がある人間ね」

少女は左手の人差し指を口に含んで舐める。

「私は人間を観察するために下界へと降り立つた存在。人間がどういう手を使って、どのように運命に足搔くのかにとても興味があるの」

少女はブランコから降り立つと男のほうへと歩み寄る。

そしてブランコの前にある事故防止用の柵を挟んで二人は再び対面する。

顔を見せた状態で。

「だから、私と契約して超能力者になってくれない？」

だが、男 梅村啓介（めいむら けいすけ）は目の前の少女の台詞を理解する事が出来なかつた。

「…超能力者？」

梅村啓介は目の前の少女の口から放たれた言葉に怪訝な反応を返す。

「そう。超能力者。この世界の今の時代じゃサイキックカーとかって言つのかな？」

人間である以上、どんな染色体異常であろうとも存在しない色であり、普通ならば奇異の目で見られてしまいそうな水色よりもやや濃いアクアブルーとも言つべき色の髪の毛を見て啓介は「綺麗だな」と心で呟く。

マイナスイオンでも放ちそうな印象を抱かせるその髪は、腰まで届くとても長いツインテールであるにも関わらず重量感が全く感じられなかつた。

「…超能力なんて前時代的な迷信だな」

「迷信とは失礼な」

少女は少しだけ怒ったかのように頬を膨らませる。

暗闇の中でも翡翠を埋め込んだかのように透き通り輝くその瞳は、同じ様な緑色の瞳を持つ北欧の人々すら見惚れてしまうであろう程の神秘さを啓介に見せつけていた。

きっと、どんな著名な作家やどんなに語彙を暗記している学者であろうともその美貌を見れば、彼女を修飾する事のできる言葉など見つからないことを思い知らされてしまつだつゝ、と考える程に目の前の美少女は素晴らしかつた。

だが、話していることが残念すぎてどうも恋愛対象や性的対象として見れない。

「超能力だろ？冷戦期の米ソや第三次世界大戦期の中国じゃねえんだ。…超能力なんて宇宙人に並んで非科学的すぎる」

「ふーん。…人間君、キミつてもしかして“自分の見えている世界だけが全て”だなんて思つてない？」

「…思つてねえよ。俺は主觀で喋つてるんじゃなくてだな…」

「キミは超能力を信じてないみたいだけど…他の人間は信じてるかもよ？」

「四十年前にアメリカの国際研究機関が『超能力は存在しない』つて結論付けてんだよ。今じゃ懷疑派だのどうこういう以前に話題にすら上らないネタになつてんだよ」

啓介は溜息を押し殺して目の前の美少女に答えを突きつける。

少女は溜息をつく。

「…超能力を信じないなんてなあ」

「あのなあ：お前が電波系ゆるゆる不思議少女だつてことは十分に理解した。だから、精神科行け」

「失礼なッ！？」

「超能力があるつていう証拠も見せられないのに超能力を信じろなんて無理言うなよ。俺はそういう年齢をとっくに過ぎてんだ。厨二病（こうびょう）がしたいならもつと年下…じゃなくてお前の場合は…年上か？まあ、とにかく十四歳辺りの人間を誘えよ」

「むう…」

百五十前半くらいの身長にスラリと伸びた美脚、まだ少々肌寒い四月上旬の午後十一時だと言うにも関わらず、彼女は少しだけ背丈の合わない衣物のカツターシャツの様な肩出しシャツを着ている。普通は下にタンクトップやらキャミソールやらを着ると思うのだが、ボタンが外れている胸元を見る限りでは彼女は下には一切何も着けていないらしい。

啓介は「今世紀十本指に入るクラスの美少女なんじゃないだろうか」なんて考えて少女を見つめる。

少女は握り拳をつくった後に左手の人差し指で啓介を指差し、発言した。

「じゃ、今から超能力を見せてあげる…！」

「…はあ？」

啓介は聞き返す。

しかし少女は啓介を通り抜けると公園の真ん中へと歩いていく。

数分前まで小雨が降っていたこともあり、地面は泥でややぬかるんでいるというのに泥が全く付着していない裸足、赤と黒の短いチエックスカート、腰のベルトに纏わり着いている沢山のチーノン。

一度見たら一度と忘れることがない程のインパクトを啓介に見せつけてくれた少女の一言によるこの後の行動は、啓介にとつて不運だったのか幸運であつたのかは、恐らく永遠にわからないだろう。

「私の名前はアリエル。風を操る精霊から名前を取っていることもあつて、一応【風】の属性を持った堕天使として神々の超越者の中ではまあまあ名前が知れ渡つているけど」

「神々の超越者…？」

聞いたことも無い単語を耳にした啓介は少女 アリエルに尋ね返す。

「次元と次元の狭間に住み着いている神とも天使とも悪魔とも宇宙人とも何とも言い切れない不安定で曖昧な存在。人類に超能力を与えて、文明の発展を影から見守ってきた存在。それが私達」

思い切り厨二病設定を晒してくれた。

「…つまり、オーバーロード的存在ってことでいいのか？」

「まあそうなるね」

「だつたら目的は何だつたんだ？」

仕方ないので厨二病に付き合つてやることにする。

啓介自身、中学生時代は“厨二病なんてアホらしい”と考えていたこともあり、厨二病を発症しなかつたのでちょっとやつてみたい気分にもなつっていた。

「完全なる善意か？侵略的意図か？実験か？偶然か？それとも、お前達よりももつと上の存在からの命令か？」

啓介はたずねてみる。

「私達は全員が同じ考えをもつて行動しているわけじゃないの。だから善意で干渉した者もいれば、実験が理由で干渉した者もいる」

「お前はどうなんだ？」

「さあ？」

アリエルは啓介の問い合わせをサラッとかわす。
まるで言外に“聞くな”と言っているようだつた。

アリエルは深呼吸をすると啓介に忠告する。

「あ、そうそう。何か物にしがみついていた方がいいよ。下手すると飛行機とかが飛んでるレベルの高度まで打ち上げられちゃうから」

「……はいはい」

啓介は近くにあつたブランコの事故防止用の柵に右手を置く。
それを見たアリエルはもう一度だけ深呼吸をした。

「じゃ、久しぶりに行使しますか」

アリエルがパチンと指を鳴らした瞬間だった。

戦闘機から発せられるような爆音がほぼ同時に四方八方から発生したかのような音が啓介の耳に響く。

台風の風速よりも強烈な風が発生し、周辺にあつたありとあらゆるもののが風に巻き上げられて吹き飛ぶ。

公園の木々は全てが根元から圧し折れて桜や葉は一瞬で消え去り、アリエルのそばに立っていた電灯もガコンと変な音をたてながらひしゃげて捻じ切つたかのように折れてしまう。

近くの住宅街や建物の窓ガラスが粉々に砕け散り、住宅の壁に亀裂を刻み、駐車していた車を凹ませ、吹き飛ばす。

ほぼ一瞬。

パチンとアリエルが指を鳴らした瞬間だけでこの被害

「…………」

啓介は地面に座つた状態で目を見開いていた。

瞬間に柵を掴んだことにより、命は助かっていた。

アリエルがこちらに被害が及ばないように調節したのもあつたのだろうが……

「ね、どう? 信じる気になつた?」

アリエルは微笑みながら啓介の顔を覗き込む。

啓介は呆然とした顔をしていた。

目の前の光景に頭の処理が追いついていないのだろう。

しばらくアリエルが啓介の目の前で左手を振りながら「おーい？見えてる？」なんて話しかけること数十秒。

「……な、なん、だよ、今の」

やつとひり出した声は随分と小さかった。

心の奥底から恐怖心がわきあがつてくる。

目の前の存在は、ホンモノのバケモノだ。

啓介は今にでも逃げ出したかつたが、腰が抜けてしまっていたのか立てない。

「今のが私の超能力かな。まあ、まだまだ使えるんだけどね」

「……か、風？」

「うん。私は【風】の属性を持つからね。空気や風に関する超能力の行使は得意なほうかな。逆に地や火に関連したものは苦手かも」アリエルはスラスラと聞いてもいないのに答えてくれる。

啓介はその姿を見て“「コイツに敵意はない」と本能が判断したのが恐怖心が薄れていく。

「これで、超能力が存在するってコトと、私が普通じゃないってコトはわかつてくれたかな？」

「……ああ、嫌というほどわかつたよ」

啓介は立ち上がる。

するとアリエルは微笑む。

「それじゃ、私と契約して超能力者になつてくれない？」

アリエルは啓介に手を差し出す。

「……断る」

だが、啓介は拒絶の言葉を口にする。

アリエルは目を大きく開く。

「な、なんで！？今の所つて普通は契約するものじゃないの？雰囲気読んでよ！？」

「いや、だつて…超能力なんてモンを見たら逆に得体が知れなさ過ぎてちょっと怖くなつてきた」

「えええ！？ちょ、超能力が手に入つたら一気に変われるんだよ！」

? 昨日までの自分とおそればして新しい自分プロシクできるんだよ！？

「いや、俺別に今の自分のままでいいって思つてるし。何よりも、超能力者なんぞになつてもし政府みたいな国家機関にばれてみる。人体解剖とか怖いつての」

「ヒーローになれるかもしないんだよ！？」

「いや、拳銃とかナイフとか怖くてムリ。人を殺したり倒したりするのも抵抗あるし」

「えええええ！」

アリエルが不満の声をあげる。

それに遅れて遠くからサイレンの音と人の声が聞こえる。

「…警察かよ！？」

啓介はハツとして辺りを見回す。

さきほどの大暴風は間違いなく丘の下の町のほうからでも観測できたに違いない。

下手すれば被害が出ているかもしれない。

「やばい…」

この周辺の住宅に住む住人達の声も聞こえてきている。

先程の暴風による被害の確認だらう。

「（被害総額数百万は堅いぞ！？こんな所…見つかったら死ねるッ！…）」

啓介はアリエルの手を掴むと公園から飛び出す。

「え？え、ええええ！？」

アリエルはいきなり差し出していた方の手を掴まれる。

「も、もしかして契約する気に…？」

「なるかボケエエエッ！…」

啓介は人目のつかないルートを走る。

先程の暴風でこの一体の街灯は全てが機能停止しており、真っ暗になつてている。

「（真っ暗でよかつた）」

「ど、どこに連れて行くの！？」

アリエルの声を無視して啓介は走る。

そのまま、アリエルを放つて置けば間違いなく警察に捕まりペラペラと真相を喋ってしまうだろう。

名前を明かしていないものの、そこから啓介に繋がる可能性なんてゼロではない。

「（ヤバイヤバイ。どれくらいヤバイかつていつとマジヤバイ！）

啓介は公園から西のほうへと走っていく。
行き先は、自宅だ。

梅村啓介の自宅はこれといって特徴の無い一軒家だ。

ホームドラマとかでよく見ることがある一階建ての普通の家だ。

「ただいまー」

啓介は玄関の扉のカギを開錠すると真っ暗な自宅へと入っていく。

「お、おじゃましまーす」

それに続くようアリエルも遠慮がちに入っていく。

啓介がすぐそばの壁についているスイッチを押して玄関の灯りをつけ、黒色の運動靴を脱ぐ。

アリエルは裸足なのでそのまま上がる。

「（よくよく考えれば、裸足なのに汚れていないってのも不思議だよな）」

泥や砂が全くついていないアリエルの足をチラリと一瞥すると啓

介は廊下を歩いてリビングへと向かう。

扉を開けてリビングへ入った啓介は先程と同じように壁のスイッ

チで電気をつける。

「あー…お前はソファにでも座つてくれ」

後ろについてきたアリエルにソファの位置を指差しながら啓介は台所へと消える。

アリエルはキヨロキヨロとツビングを物珍しそうに見回しながらソファへと座り込む。

ちょこーんという効果音でもつきそつなくらいに縮こまっている。

「…何でそんなに緊張してるわけ？」

「いやー…男の人間に連れ込まれるなんて初めてなもので」

「連れ込まれる…」

何やら妙に犯罪臭のする言い方に啓介は凹みつつ、考えれば無理矢理自分が連れてきたんだったと今更気付いた。

「あー…連れ込んだって…何ていうか、その、お前をあそこに置いていたら俺の未来が真っ暗になりそうだつたもんだから…」

「この状況も他の人間に見つかればお先真っ暗になるんじゃないの？」

「……ソウデスネ」

啓介は色々と感情を込めた溜息を吐くと左手に持つていた林檎ジースをアリエルの前にあるガラスの埋め込まれた木製のテーブルの上に置く。

「とりあえず飲み物でも飲め」

啓介はそう言ってアリエルの座つているソファの斜め隣にある別のソファにドカッと座り込む。

「い、いただいきまーす……でいいのかな?」

アリエルは両手で缶を持ち上げる。

「…今更だけど、お前つて人間じやないくせに飲み物飲めるんだな」「飲めるよ」

「何だよ…そういうところは人間と同じなのかなよ」

「そうだねー。人間界の時間単位で言つ一年くらいは何も食べなくとも生きていくけど、私達の中には食事を娯楽の一種だと考えて

いるヤツもいるから同じといえど同じかもね

「…どんなモン食つてるんだ？」

これは単なる知的好奇心である。

人間界を覗くのが趣味だとアリエルは先程言つていたのでもしかしたら同じようなものを食べているかもしないと啓介は思ったのだ。

「地獄猫とか…地獄鴉とか調理して食つてるヤツは見たことあるよ。他は…氷結蛙とか血魚とか食つてるヤツもたまにいた」

「…お前は？」

なんというネーミングの動物なんだと啓介は吐き氣を催しながら思つた。

人間が食べたら死にそうな感じがする。

「私は…果物とかばかり食べてたかな？肉類は…600年前に食べたのが最後かもしれない」

果物だけで生きていける辺り、体内器官も人間と全く違うのかもしれない。

啓介は短い溜息をつく。

「あーその話はストップな…気分が悪くなる…とにかく持つたままじゃなくて早く飲めよ」

脱水症状なんてあるかどうか知らないけどなつたら困るし、と言葉を付け足す。

しかしアリエルは微動だにしなかつた。

不審に思つた啓介はアリエルに尋ねる。

「どうした、なんで飲まないんだ？」

まさか林檎が苦手なのか？そいやアダムとかイヴとかの創世記に出てきた知恵の果実つて林檎だつたような気が……いやでもあれは後から付け足されたイメージであつて……もしかして墮天使について林檎は毒なのか？と、そこまで啓介が考えた辺りでアリエルが口を開く。

「開け方わかんない」

空気が停止した、気がした。

「…はい？」

「開け方わかんない」

「いやいやいや、いくらなんでもそれはないわー」

人間界を観察していたのならそれくらいはわかるだろ、と啓介はツツコミたくなる。

しかし、アリエルの困った表情を見るとこれはボケではないとうことがよくわかる。

「…もしかして、本当にわかんないのかよ？」

「本当だよ。私に人間の物の使い方なんてわかるもんか」「マジかよ…」

啓介は自身の缶ジュースをアリエルに見せる。

「いいか？…缶ジュースの上面についている引き金みてーな…なんというか、アラビア数字の「8」みたいなモノがあるだろ？…あ、わからないとは言わせねーぞ。……その穴の部分……ああ、そっちじゃなくともう一つの穴のほう。…そう。…まあ、その穴に人差し指を入れて引つ張ればいい」

なんて面倒なんだろか、と啓介は感想を抱く。

ここまで常識を知らなさ過ぎると扱いに困ると啓介は思った。とんでもないド変態ならばこんな純情（？）少女にアレコレとトンデモない間違った知識を与えるとするかもしれないが、梅村啓介はそこまで腐り果てた人間ではないのでそんなことはしない…と思つ。

「おお、人間の考えるものは面倒だなあ」

見た目だけなら百点満点どころかオーバーして二百点くらいの美女なのになあ…と啓介は思う。

「バカヤロー、郷に入りては郷に従えだ。人間世界に来たのなら人間の常識に則つてもらうからな」

「りょーかいー」

アリエルは両手で缶ジュースを持って飲みだす。

啓介もジュースを少しだけ飲む。

「（綺麗な色した髪の毛だよな…。髪質も見ただけだからよくわからんが、サラサラそうだし）」

表現しにくい色をした髪だと啓介は思う。

無理矢理表現するなら夏の晴天の昼間かつ水蒸気や砂埃などのない綺麗な大気の状態である空の色を少し薄くしたような色だ。

「（自分で表現しておいてなんだが…よくわからないな）」

「ねえ、人間君」

アリエルは缶ジュースに注いでいた視線を啓介へと向けると口を開いた。

「俺の名前は、梅村啓介だ。人間って呼ぶな」

間違いではないがムカツく、と啓介は呟く。

「ああ、ゴメンゴメン。…じゃ、啓介」

「フランクだな」

「アレ、名字で呼んだ方がいい？」

「いや……好きしてくれ」

啓介は少し戸惑っていた。

自分を下の名前で呼んでくれる異性など今までの人生の中でも一人しかいなかつたので耐性が低かつたのだ。

現在では異性どころか同性からも名前（名字含）を呼ばれることはなくなっている。

「（そういうやアイツ元氣にしてるかねえ）」

数年前に引っ越してしまった自分を名前で呼んでくれた存在のことを啓介はチラリとだけ思い出す。

しかし懐古はすぐに目の前の少女に打ち切られる。

「どうして、啓介は私との契約を拒否するの？」

「んあ？…………契約？」

「公園で持ちかけたじゃん。契約して超能力者にならないかって」

「アレか…。マジだつたんだ」

「信じてなかつたの！？」

「酷い！とでも叫びそなアリエルを見ながら啓介は言葉を選んで話す。

「あのなあ…確かに超能力の存在は信じたし、お前が人間じやないつて言うのも十分に理解させてもらつた。だけどな、何で俺が超能力者にならないといけないんだ？」

「……」

「あと、お前らの真意が計り知れないから怖い」

確かに超能力は魅力的だ。

世界では既に否定された存在でありながら、目の前に存在しているソレ。

しかし、デメリットがメリットを上回つてしまふと啓介は考えていた。

「俺が、超能力を得てヒーローみたいに善人を助けて悪を挫く様な人間だつたのなら俺は受けたかもしれない。けどな、俺はそこまで周りのことを考えられないんだよ」

常に自分のことで一杯一杯であるのに他人を守るヒーローなんて存在が務まるとは思えないと啓介は思つてゐる。

「超能力を得たら間違ひなく待つのは世間の奇異の目。俺一人が奇異の目で見られるつていうのならまだ良いさ。でも、俺の家族も巻き込まれるのなら俺は契約を受けない」

人間は自分達と違うものを排除しようとする。

度が過ぎれば自分だけでなく無関係な家族にまで被害が及ぶこととなつてしまうのだ。

「啓介つて家族居るの？この家、私達以外に誰の気配もしないんだけど」

「この家には俺だけで住んでる。母さんは妹を産んだ時に力尽きて亡くなつた。父さんも同じ日に別の場所で事故死。…兄貴や姉さんは大学卒業後にどつかで働いて俺に仕送りしてくれてる。妹は隣の

県にある私立の中学校に通つてて寮暮らしからいない。祖父母は俺が生まれたときにはもう亡くなっていたらしいし、知らない

「ほぼ孤独じやん。関係ないとと思うんだけど」

「俺の名字は超レアなものなんだよ。わかるだろ？…これが佐藤や鈴木なら話は別だったかもな」

啓介はジュークを飲んで喉を湿らせる。

「それに、俺が超能力を得たら間違いなく私利私欲に使つと思うね」

「……」

「お前が俺に超能力を渡して何をさせたいのかは知らないけど」

「私は人間觀察が趣味って言ったでしょ？だから…くだらない運命通りに生きる普通の人間に超能力って言う特異なモノを『えたらどうなるのか、そしてどうやって運命を切り開くのかが見てみたい』

「お前のワガママの押し付けじゃねえか」

遠回しに啓介の定められた運命は“失敗続きの人生”であると云えられたようなものだ。

ちなみに啓介は自分のことを“性格・思考以外はきっと普通でありたい高校生”だと自称している。

「そうなるね。でも、人間だって超能力を得る事が出来れば、世界が変わるじゃない？」

「まあ…そうだな」

「でしょ？だつたら……」

「でもムリ」

「なんで！？」

「……俺には俺の考えがある。人間觀察したいのなら俺以外の人間に声をかければ良いじゃないか」

「……できないよ

「何でだよ」

急に落ち込むアリエルに啓介は言いすぎたかなと少しだけ反省した。

「…………言えない」

「なんで？」

アリエルは悲しそうな笑みを浮かべる。

「啓介、貴方つて優しい人だね」

「は？」

優しい、と異性に言われるのは初めてだった。

「だって、さつき自分なら超能力を私利私欲のために使うから要ら
ないって言つたでしょ？」

「まあな」

「……だつたら言えるわけ無いよ」

「……」

啓介は溜息をつくとソファから立ち上がる。

「アリエル、お前にどんな理由があつて俺に契約を持ちかけている
のかは…知らない。教えてくれないみたいだし。でもな、俺の考え
を変えて俺に契約させたいつて言つのなら全部話してくれないとム
リだと思うぞ」

「……」

「…とこりで、お前つてこれから何処かに行く宛あるの？」

「え…な、ないけど」

「あつそう。じゃ、好きにすれば」

啓介はいつの間にか飲み干した缶ジュースをゴミ箱に捨てるといつ
ビングから出て行こうとする。

「…啓介」

「あんだけよ」

「ありがとう」

「…まあ、お前の気が済むまで自由にすればいいんじゃないの？」

アリエルも立ち上がると啓介の元へと歩み寄り、共にリビングか
ら出て行つた。

リビングに残つたものは彼女の飲みかけの缶ジュースだけだった。

【1-1】 華麗奔放な少女（後書き）

華麗奔放な少女（後書き）

追記1（2012年1月5日）

一部の文章を修正したり追加したりしました。
物語の流れは変わっていないので絶対に読み返す必要は特にないと
思っています。

追記2（2012年1月8日）

誤字を修正。

見落としがあつたなんじうこのことなの…。

【1 2】 神々の超越者（前書き）

この物語は、ある程度の史実を織り交ぜながらも完全にこの現実世界とは完全に別の未来を歩んでいる別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家とかその他の固有名称で特定される全てのものとは、何の関係もありません。何も関係ありません。

つまり、この物語はフィクションです。

【1 2】 神々の超越者

四月八日。

俺の住む国、日本国では卯月とも呼ばれているらしく、新年度や新学期の時期なので全国の学校や会社などでは入学式や入社式が行われる事は有名だ。

その八番目の日、つまり世間で言う満仏会の日、俺はアニメにおける第一話の最初のカットにでも出てきそうな程によく晴れた空を見ながら今日から始まる学校へと歩みを進めていた。

これで桜でも舞つていれば文句ナシ百点満点の入学式日和なのだろうが、生憎な事にこの街の桜は昨晩の強風によつてほとんど散ってしまい、今はもう三分葉桜にしか見えない。

あと、俺は高校一年生なので入学式がどうなるとも関係ない。だから桜なんてどうでもいい。

「高校一年生ねえ。よくもまあ留年しませんでしたってな」

そう、俺は日本のとある地方都市に住む只のじがない高校一年生だ。

県内でも有数の進学校に在校しているが、俺の住む県は他県と比べて学力が低いので全国平均レベルとなつているのが実情だ。

つまり、大して勉強ができるわけでもなければ、運動神経が良い訳でもない。

絵心だとか音楽性だとかそういう芸術センスもない。

結論、只の高校生つてことだ。

大事な事だから一回言つておく。

「…眩しいな」

いつもより少々激しめの自己出張する太陽をチラリとだけ見ると俺は歩き出す。

学校なんて友達も居ないし、行つても意味が無い…のだが、将来のためにも行かなくてはならない。

時代がどれだけ進もうとも学歴社会だけは絶滅しなかつたこともあり、この二〇三〇年でも高卒の採用率なんていうまでもない。

だが…

「…はあ。学校に行くのも…帰るのも嫌だなあ」

昨日の夜の件について考える時間が欲しかったのも理由だった。

「啓介、啓介つてさ…なんで自分のことを普通の高校生つて言いつの？」

「…さあな」

啓介は手元の携帯電話をチラリと見る。

時間は午前八時ちょうど。

学校に着くには少々早すぎたので教室には誰一人いないかもしないが、彼としては一人で考える場所が欲しかったのでむしろラッキーだったかもしれない。

啓介は昇降口へ入ると自分の靴を履き替える。

「（よくよく考えれば、俺つてとんでもない体験をしてしまったん

じゃないのか？）」

昨日のあのアリエルと名乗った少女。

人間離れした容姿や奇抜な服装、世間知らずという観点から見ると間違いなく“人間外の何か”にカテゴライズされなくもない雰囲気を備えていた。

「（超能力。アイツがいうには“因果律に反する本来持つてはいけないモノ”らしいが…。なんでアイツはそれを俺なんかに与えようとしたんだ？）」

啓介は考える。

梅村啓介は、この一〇三〇年を生きる只の何処までも普通で普遍的で凡人なスキルしか持たない一般人であり、決して前世が大魔王だとか実は王族の隠された継承者だとか忍者の末裔だとかそんな特殊な設定は一切無い。

両親が物心つく前に他界してしまったこともあるが、自分や兄妹にそんな隠された設定は無いはずだと啓介は考えている。

だから、テロリストが学校に押し入ってきて粹がつた不良が見せしめに殺されたとしても、自分の片想いの女性（そんな人はいないが）が人質にされたとしても、親友が実は射撃能力抜群だとしても（親友なんていねいが）、啓介はテロリスト相手に覚醒して戦えるような器を持つた人間ではないのだ。

むしろ教室の隅でガタガタ震えているモブキャラの一人だろう。

「（アイツが言うには、俺の運命は“悲惨”らしいが…それに憐れみを感じて超能力を与えるとした、ってわけでもなさそうだしな）

「未来の自分がどんな悲惨な目にあっているのかはともかく、現在の自分はわりとマシな方だ。

学校には通えているし、食べ物に困ったことも無い。

「（同情で能力与えるなら今頃人類の半数近くが超能力者になつてゐるつづーの）」

恐らく同情だと憐れみだとそななものではないもつと別の“

何か”が、アリエルを引きつけたのかもしれない。
だが、その“何か”がわからない。

「（…わかんねえな）」

啓介は階段を昇り終えると自分の在籍する教室【1 7】に入る。始業式が終了した後、新しいクラスを教えられてその教室へと変わるのだ。

この教室も今日で最後だ。

「（考える。考えるんだ。アイツが何故俺に目をつけたのかを…）」

啓介は自分の席である窓際の最後尾に座ると手を顔の前で組んで考え始める。

「（アイツの思惑が理解できない限り、どうやって行動すればいいのか…）」

「啓介は何で普通でありたいの？ 奇異の目で見られる」とこれは慣れていこうとして言つてたのにどうして異端を拒絶するの？
「言つただろ？ 家族のためだつて」

啓介は教室に飾られた時計をチラリと見る。

時刻は午前八時三十分。

クラスメイトも全員がそろい、仲良く喋っている。

「（…アホくさいな）」

啓介からしてみれば、友達の何処がいいのかわからないのだ。
一人でも出来ることをどうして複数名でやるうとするのか、何故群れるのかが。

昔、小学校低学年のときに啓介の担任は「人という漢字は一人の人間が互いに支えあつていてるのである、人間は一人では生きていけない」なんて言つていたが、啓介からすれば「人つていう漢字は一人の人間が足を広げても作れる」なんて言つてやりたい気分であった。

「（別に“無口キャラ”気取つていたわけでも“厨二病キャラ”気取つていたわけでもないんだけどな）」

とにかく人間はよく群れていた。

群れた人間は孤独な人間を見て哀れんだり、蔑むようになる。
そのルールは啓介に対しても適用されていた。

だから修学旅行にも文化祭にも体育祭にも啓介は全く参加しなかつた。

「（まあ、そんなアホなことはどうでもいい。今はアイツのことだ）

「啓介にとって現在最も重要な議題は昨日出会つてしまつた少女のことである。

あの後、変な成り行きで自宅に泊めてしまつたこともあるが、アリエルは今頃啓介の部屋で惰眠を貪つてているだろう。

本人曰く「行くアテも帰るアテも無い」らしいのでしばらくなめてやるつもりだが…

一つだけ恐ろしいことがある。

「（兄貴か姉さんか…妹か）」

兄妹の存在だ。

啓介の兄なんて連絡は一ヶ月に一度はよこしてくれるもののは何処

にいるかなんて全くわからない。

仕送りをしてくれているところを見る限りでは働いているみたいだが。

「（兄貴は問題ない）」「

啓介の姉もどこで何をしているのかわからないが連絡は取り合つてているし、たまに帰つてくる。

三月に帰つてきた際に「半年アメリカに行つて来る」なんてことを言つていたので多分大丈夫なはずだ。

「（姉さんも大丈夫）」

最後に妹だが、一番厄介である。

今年から中学一年生になつた彼の妹は隣の県にある女子限定の学園に在籍しており、去年から近くの寮で生活している。

だが週末には必ず戻つてきて土日は自宅で過ごしている。

本人曰く「寮じや後輩や同級生が五月蠅い」らしいが、照れ隠しか本心かは啓介にはわからない。

「（問題は妹だアアーッ！…）」「

今日は四月八日。

月曜日ではあるが、妹の在籍する学園での始業式は四月十一日である。

啓介の妹は一昨日の電話で「部活の合宿からやつと帰つてきた」なんて言つていたので間違いなく帰つてくると啓介は予想している。

「（鉢合わせになつて修羅場とかマジ勘弁願いたい…）」

啓介の妹は何故か自分と友好的な女性を嫌う傾向にある。

昔は「もしかしてお兄ちゃんを奪われるかもしれない」という嫉妬じやね？」なんて考えて自分で気持ち悪すぎで鬱になつた記憶があるが、本当の理由はわからないままである。

「（まあ、女性の友達なんて後にも先にもアイツ一人なんだらうけれどな）」

啓介は数年前に別れた（恋愛関係的な意味ではない）幼馴染のことチラッただけ思い出した。

辺りを見回すと既に教室に担任が入ってきて何やら連絡を話していたが、啓介は聞いていなかつた。

「（ああああー…胃が痛い）」

妹がアリエルにどんな反応を示すのかが不安で仕方なかつた。

「…嘘だよ。それはただの言い訳にしか過ぎない。…啓介は異端になりたいんじゃないの？」

「何でそういう考え方になる？」

啓介は教室に目もくれない。

自分の世界に閉じこもつて考えた。

「（俺が実は超能力の素質があるとかってか？…あり得ない。自分で言つのもアレだが、あり得ない）」

啓介が普通の高校生だから、とかいう訳ではない。

「（超能力は神の運命に反して得るモノ。その素質があるとすれば、全人類にある事になる）」

啓介は超能力やアリエルについて考えるが、世界中の学者が集まつても解決できないようなこの問題を啓介が解けるわけも無く、時間は無常に過ぎていった。

「普通を自称することは逆に異端に憧れていっているということだよ。自分は異端になりたい。だけど異端になれない。それは啓介を傷つけた。だから啓介は一度とそんな思いをしたくないためにも普通を自称して異端から遠ざかろうとしたんじゃないのか？」

「…とんだ暴論だ」

「当たつてるんじゃないの？」

「知るか」

始業式が終わり、クラス替えを済ませた啓介は新しい教室の新しい座席に座っていた。

一年四組へと配属され、四十人の生徒で埋め尽くされた教室の廊下側の席の最後尾で啓介は溜息をつく。

男二十人、女二十人とぴたり半分で分けられたクラスであり、席は男女混合の出席番号順となっている。

頭文字が「ン」から始まるというとてつもなくレアな名字を持つ啓介よりも後ろの名字を持つものなど当然の如く存在しないので彼が出席番号四十番だ。

去年…というか小学校のときからずっと最後尾であつた啓介からすれば今更なのでなんの感情もそこには見出せないのだが。

「というわけで、今日から一年間よろしくな

教卓の前に立つて挨拶をしている男性教師の挨拶を啓介は真面目に聞かなかつた。

社会教師だつたような気もするがそんなこともどうでもいい。

啓介は新しいクラスメイト眺める。

七人くらい前回のクラスメイトだつた人間がいるが、どうせ交友関係もなかつたのだし話しかけてくることも無いだろう。

担任の教師も挨拶を終えると次に明日の連絡などについて話し始める。

「（…明日からまた憂鬱な日々の始まりか）」

帰宅してから待つてゐるであろう修羅場のことも考えると更に憂鬱になる。

H.Rも終了し、終業となる。

クラスメイト達は早くも友人を作り出したり、担任に話しかけたりしている。

啓介は田もくれずに教室を出る。

廊下で「何処のクラスー?」なんて騒ぐ同級生たちの間を通り抜けて昇降口へと向かう。

行き先は言つまでも無く血モ。

「…やれやれ」

啓介にとって友達は必要ないのだ。

啓介にとって日常を重んじる気は無いのだ。
自己のことで精一杯なのだから。

「第一、なんで俺を選んだんだよ」

「違うよ。…私が啓介を選んだんじゃなくて、啓介が私を呼んだんだよ」

「…………はあ？」

「私達が人間界へと降臨することは簡単なことじゃないんだよ?…」

啓介は自分の運命を呪つたんじゃないの?心の底から本氣で

「…心の底から本氣で神を憎んだヤツの前にお前らのうちの誰かが現われるって寸法か?」

「…………そうなるね」

「おかえりーっ」

「…なんでお前は人の家で堂々とくつろいでんだよ」

「いやあ一人間の常識なんて知らないよ。私、人間じゃないし」
アリエルは居間でテレビを見ていた。

壁に貼り付けられているスクリーンテレビだ。

「それにも、人間ってのは不思議な生物だね。どうして同じ形をした生き物同士で殺しあうんだか」

アリエルが見ているのは国営放送のニュースだった。

二十四時間ありとあらゆるカテゴリーのニュースを放送しているチャンネルであるが、啓介は大抵の情報をネットで仕入れるので滅多に見る機会がなかつた。

「…お前達は、神々の超越者は同族で殺しあつたりしないのか？」

「うーん…支配者が同じ場合 私の場合はサタン様つていうお方なんだけど、まあ支配者が同じお方だった場合は殺し合いなんてしないねえ」

「支配者が違えば、殺しあうのか？」

「私は平和主義者だし、殺し合いなんて数万年生きてきたけど…ほとんどしなかつたよ。まあ、好戦的なヤツもいるみたいだし、そういう面じや人間と同じかもしれないね」

答えになつていないような気がするが、啓介は深追いしなかつた。はぐらかされたのならどうせ追求しても無駄なのだ。

啓介は制服のブレザーを脱ぐとソファに放り、ネクタイも緩める

と台所へと向かう。

テレビをチラリと見ると、そこには桜が満開というニュースが映つていた。

アリエルは桜よりも花見をしている人達の食べ物に注目している
…気がする。

「お前、そういうイベントとか経験ないの？」

「私達にイベントなんていう風習はあまりなかつたからね。…人間界のイベントのほとんどって神様関係じゃん？」

「…なるほど」

「それに、私達の住む失楽園は環境の変化なんてないし」

「失乐园…」

初めて聞いたアリエルの本来の住処。

啓介は興味深そうな声を出した。

「次元と次元の狭間にある世界…とでも思つてくれたらいいよ。人間の言語じゃ説明がつかないような場所にある世界だから」

アリエルは故郷の話をする。

「説明がつかない…ねえ」

「当てはまる言葉が人間の言語に存在しないの…全く、人間の言葉つて不便だね」

「普通に使つてるじゃねえか」

啓介は突っ込む。

アリエルは日本人の自分と普通に会話できているではないか、と。「言つとくけど、私達の使つ言語はこの世界じゃ使えないの。なんていふのかな…使おうとしてもこの世界とは別の存在から成り立つ言語だから発音できない…って感じ?」

「…ふーん」

「私が人間の言語を話す事ができるのは能力のお陰だよ」

「…アレ、能力つて普通は一人一つじゃないの?」

アリエルは出会いの時、風の能力を使つていたはずだと啓介は思い出す。

「人間はね…私達は一人辺り数万や数百万、数億の超能力を身体に宿しているの」

「……………スケールがデカいなあ」

「その中の一つに言語を自動翻訳するような力があるというわけ」

「漫画風に言つなら」都合主義展開だな

「?」

「いや、何でもない」

啓介は冷蔵庫からお茶の缶を一つ取り出すと居間へと戻る。

「ほい。…お前、朝から何も飲み食いして無いだろ?だから飲んで

る

啓介はアリエルに缶を手渡す。

啓介はアリエルの隣（といつても間隔は開いているが）に座り、テレビを見ながら飲みだす。

アリエルは両手で缶ジュースを持つて飲みだす。

「（… そういうや、俺がマトモに他人に接するなんて久々だな）」妹のような兄妹を除けば啓介が今までにマトモにコミコニケーションを取ってきた人間はアリエルを含めて一人になる（アリエルを『人』として数えていいのかはともかくとして）。

「（… そういうや、昨日の件だってそうだよな。普段の俺なら知的障碍者に認定して大人しく去ってたはずだ）」「何が、自身を惹きつけたのだろうか。

啓介は横目でアリエルを眺めた。

「（… なんだつてんだ？ アイツが俺に惹きつけられた理由も、俺がアイツに惹きつけられた理由も）」

運命だの愛だの言うつもりはない。

運命なんて馬鹿げているとアリエル自身が公言していたし、何よりも啓介はアリエルに対して恋愛感情なんか抱いていないのだ。

翡翠色の瞳、やや濃いアクアブルーの髪は彼女を“異端”だと見せつけるようなものであると同時に美しさを表現するものになっている。

発育し始めの少女が纏うような色氣とともにかく日本人と白人の良い部分のみを抽出して作ったような端正な顔立ちはあらゆる男を惹きつけるに違いない。

「（枯れ果てたジジイですら視線を奪われるような美少女… だもんな）」

外見年齢だけで見れば、十一～十三歳くらいなので世のロリコン共に狙われても仕方ない気がする（中学生をババアと言つてのけるロリコンはともかくとして）。

「ねー、啓介」

「んー？ なんだ？」

「私と契約して超能力者になつてよ」

「だが断る」

朝から五回ほど既に繰り返している会話だ。

最早、惰性でしか返答をしない啓介である。

確かに超能力は魅力的かもしれないが、デメリットの方が圧倒的過ぎる。

今更他者から奇異の目で見られることなんて氣にも留めないが、自分の家族までもが奇異の目で見られてしまうのは嫌なのだ。

それに、超能力を得たところで自分は平和を守るようなヒーローでもなんでもない。

むしろ私利私欲のために超能力を使うことを考えるような人間だ。だから、超能力なんて要らない。

それが昨晩のアリエルへの返答だった。

しかし、アリエルは納得せず昨晩から何度も契約を持ちかけているのであった。

「…俺は、超能力が必要なほどに人生に疲れてないんだよ。運命がどうであろうと俺は惰性的に生きていくだけだよ」

アリエルは啓介の方を見る。

「人間は与えられた時間、有限を目的なく生きる存在でしかないんだよ？たとえ目的があるともそれを達成することの出来る人間はほんの一握りだけ。理不尽だとは思わないの？生まれもつた才能、その1つだけで普遍的な人間は異常なる存在、即ち偉人と呼ばれる存在へと昇華するんだよ？」

啓介はアリエルの瞳を見る。

汚れを知らない真っ直ぐな瞳に見えるが、実態はわからない。下手をすれば吸い込まれそうな感じもある。

「才能とは先天的なものと後天的なものに分かれる。なんておバカな人間は言っているけど、後天的に得られる才能も、最初から内に秘めていただけであつて何も無いところから発生するものではないんだよ。つまり、才能とは神から与えられたものであり、才能を行

使する人間は神に愛された人間というわけなんだよ」

「…まあ、その理論は贊否両論が飛び交いそうだな」「世界はね、運命に決定付けられているんだよ？所詮、神の掌で遊ばされているに過ぎないというわけ。啓介に運動神経がないことも、モテないことも、勉強が出来ないことも、友達がいないこと、童貞なことも全てが神によって定められている。アナタがどれだけ努力して生まれ変わろうとも所詮それは神が定めた範囲内での変化でしかないんだよ？」

余計なお世話だ、とアリエルに会う前の啓介なら言っていたかもしない。

「今この瞬間に何処かで人が死んでいたとしてもそれは神に決定されたことであり、神の決定を超えて延命できるなんてことは絶対にあり得ない。その人は、今この瞬間に死ぬ為に生まれて育ってきたんだから。…神の創作した物語における出番が終了した役に立たない人間は“死”を以つて退場するわけ」

哲学者達が喜んで議論を始めそうな話題をアリエルは話し続ける。外見年齢には何をどう捉えても似合わないであろう話題であるはずだが、アリエルだけは例外であるかのように似合っていた。

「悔しいとは思わないの？アナタがいくら努力しても意味はないんだよ？童貞を卒業したいからといってモテようとして努力しようとも童貞のまま死に行く人間もいる。そう決められているから。…啓介もその例に漏れず、神によって人間界の底辺に位置づけられるんだろうよ？」

運命論、神は絶対である、才能こそすべて、絶対正義。

啓介にとつては哲学などどうでもいい議題であり、そんな禅問答をするためにアリエルと会話しているわけでもない。

「…お前が現世に降りてきた理由を知らない限り、俺はお前の誘いに答えを出せないんだよ」

「…」

「…答えてくれ」

アリエルは悲しそうな瞳で啓介を見る。

「…私達はね、人間の強い願望によって現世に引きずり下ろされるの。勿論、現状に満足しているような人間が願望を持つても意味がない。だけどね、この世の全てに絶望した人間…すなわち、神を信仰しない人間が強い願望を持つたときに私達は現世に現われる」

「…まるで俺が強い願望を持つてるみたいじゃないか。確かに俺は神なんぞ信仰してない。だけど、俺は願望を抱いたことなんて…」

啓介の台詞をアリエルは遮る様に話す。

「“新しい自分”」

「…」

「アナタはいつも世界を客観的に観測するような人間だった。主觀を否定して、客觀を大事にしていた。人間が遊んでいてもアナタはその輪に入れないし入るつもりも無かった。…だけど、それでもアナタは心のどこかで望んでいた。それだけじゃない。アナタは異端に憧れ続けていた。普通とか違う存在…才能を持つた天才に憧れ続けていた」

「…まあ、否定できなくはないかもしないな。人間の深層意識なんてわからねえし」

啓介は呟く。

「だから、私は現世に召喚されたの。…アナタが神の運命を呪い、“新しい自分”を望んだから私はあなたの前に現われた」

啓介は黙る。

アリエルは言葉にしていないだけで、恐らく無理矢理現世に召喚させられているのだ。

それはアリエルの言動からして恐らく間違いない、と啓介は推測する。

「勿論、私は君の願いを叶える為にこの世界に降りてきたんだよ？人間が出来るであろう範囲で努力しても目立てないであろう君を死ぬ氣で努力すれば物語の主人公になれるようにするわけ」

「…主人公なんて御免だね。あんな熱血的で疲れる役は俺にはムリ

「なれるよ」

「だよ」

「…」

「とはいっても私が魔法でちょっといのちよい、という感じに啓介を変えるわけでもない。アナタに、生まれ変わる為に必要なチカラを与えるだけ」

「結局は俺が努力しないといけないって意味じゃねえか
「そりやアナタが努力しなければ意味がないよ」

アリエルは啓介の右手を握る。

「勿論、無料というわけにはいかない。これは神に定められた法則、因果律、森羅万象の掟を破るわけだもの」

「そりやあ…カミサマの運命とかいう枷を外すんだからな。それ相応の代償は必要ってか？」

何を代償とするのかは知らない。

魂か？感情か？金か？記憶か？家族か？友人か？社会的地位か？
恋人か？

中世のヨーロッパで魔女狩りが発生した際の記録では『悪魔と身体を交える』とあつたらしいが、そんなものではないだろう。

女性からしたら苦痛かもしれないが、男からしたら性欲発散につた上に力まで得てラツキーの一乗状態である。

まあ、相手が同性だった場合は苦痛かもしれないが。

「（…契約の代償か。確かに名前を変えるつてのも契約にあつた気がするな）」

神を否定し、悪魔を神と称える。

悪魔に生贊をさげる、なんて事もあつた筈だ。

「…それで、代償つてのは？」

「…」

啓介としても代償の部分には興味がある。

契約するわけではないが、ここまで話を聞いておいて聞かないわけにもいかないだろう。

「…」

だがアリエルは答えなかつた。
ちょっぴり悲しげな笑みを浮かべるだけだつた。
啓介は何も言えなかつた。

【1 2】 神々の超越者（後書き）

追記（2012年1月5日）

一部の文章を修正したり追加したりしました。
物語の流れは変わっていないので絶対に読み返す必要は特にないと
思います。

【1 3】 お手ごの想い（前書き）

この物語は、ある程度の史実を織り交ぜながらも完全にこの現実世界とは完全に別の未来を歩んでいる別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家とかその他の固有名称で特定される全てのものとは、何の関係もありません。何も関係ありません。

つまり、この物語はフィクションです。

【1 3】 お夕ごの想い

午後五時七分。

啓介はアリエルと顔を合わせ、「らかった事もあり、あのあと外出して、プラプラと街を歩いていた。

「（…俺が本気じゃなかつたから代償を教えなかつたつて事なのか？）」

そしてアリエルに申し訳ないことをしたな、と考えた啓介はアリエルに何かお詫びをしようとしてスーパーから帰っている途中だった。

「（上手つてわけじゃないけどまあ…人間の食べ物を食べてもらひの悪くないかもな）」

おかげで普段の夕食代の三倍近くもお金が消費されてしまった。
「（アリエルが滞在している間はともかく…アリエルが帰つたらしばらくカツプラー門生活だな）」

アリエルが失楽園に帰る日が何時になるのかはわからないが、それまでは呼び寄せてしまつた責任もあるし面倒を見てやるべきだと啓介は考えていたのだ。

啓介は自宅への坂道を上つていると向かいからやつてきた学生の集団を見つける。

丘の上有る中学校の生徒だ。

「（こんな時間まで部活」「苦労様だな）」

持つてゐる用具からしてテニス部なのは間違いないだろう。女子中学生たちが楽しそうに会話している。

「（…俺も、あんな光景に憧れていたって言つのか？）」
すれ違うと啓介は息を吐く。

「どうなんだろうか…」

契約しないことは決めてしまつていてる。

アリエルを悲しませる結果になつてしまつだらうが、それは仕方

ない。

家族のためにもこんな博打は割に合わない……

「ん？」

啓介はそこまで考えて思考停止する。

「（あ、あつるれえ——？何か、忘れてる、と思つて、たう……）」「妹。

「あああああああああああ——！」

啓介は全速力で走り出した。

「（ヤバイヤバイ。マジヤバイ！…どれくらこヤバイかっていうヒヤ
ジヤバイイ！）」「

「た、ただいまああーーッ！！」

啓介はバタンと音を立てて帰宅する。
下を直ぐに見る。
妹の靴があつた。

間違いない。

「（人生オワタ……）」

アリエルに事情を説明してすらいなかつたので彼女が機転よく立ち回つてくれているとは考えられない。

啓介は居間へと急ぎ、扉を蹴つて開ける。

「あっ、お帰りー

ソファに寝転がりながらお菓子を食べている少女

梅村葵は兄ながむらあおい

である啓介に挨拶する。

ネクタイを緩めたカツターシャツを着ており、ミニスカートを穿

いた恐らく帰つてきてから何一つ着替えていないままの姿である。啓介と同じダークブラウンの髪色を持つており、ショートヘアの髪型だ。

顔の形を考えてもバランスが良く、一見軽そうに見える中に重みを感じるような髪形をしている。

スタイルも運動しているだけあって腰周りは細い。

女子校だけあってかやはりお洒落や身なりには気を使つのか、ニキビなどは一切見当たらない。

化粧も全くしていないにも関わらず、中々の可愛さを誇る妹である。

大人気の読者モデル程ではないが、中堅モデルくらいに並べそうな感じがする美貌だ。

「何処行つてたの？」

葵は気の抜けた声でたずねるが、啓介の両手にある袋を見ると驚いて立ち上がる。

「うわっ！？どうしたの？今日は珍しくじ馳走？」

葵は啓介の元まで近寄ると袋を奪い取り、台所へと持つていく。啓介は呆然としていた。

「…」

葵は不思議そうに啓介を見る。

「どうしたの？疲れてんの？」

「い、いや…」

啓介はフルフルと震えた手を使って何も無い所を指差す。部屋の隅っこ

「？」

「み、見えて、ない… の？」

「はあ？」

葵はポカンとする。

啓介の指差した方向には何も見えない。

別にゴキブリがいたとかそんな訳でもないようだ見える。

「…疲れてんのか知らないけどさ、ちょっとぐらりと休んだら？」

葵は笑って台所へと消えていく。

買った品物を冷蔵庫に入れてくれているのだ。ひつ。

「…マジ、かよ」

啓介は頬をひくつかせる。

「（マジで葵にはアリエルが見えてないのかよ…！？）」「け、啓介ー…」

啓介は部屋の隅っこで借りてきた猫のように正座して座っているアリエルを見る。

啓介は手招きでアリエルを呼び寄せるとき下へと出る。

「な、なんでお前が妹には見えてないんだよー…？」

勿論、小声である。

アリエルも察してくれたのか小声で回答してくれる。

「え、えっとね…いきなり知らない人が帰ってきたなーと思つたから

「もつと的確に答えてくれ！」

「え、えーっとね…啓介以外には私の存在が認知されていないの。能力を使つていてるとかそういう訳じゃないの。自動的に一般人の意識外に置かれるようになつてるの」

つまり、普通の人間はアリエルを見ることが出来ないという訳らしい。

だつたら小声にすること無いだろ、と啓介は思った。

「…つまり、俺みたいな“召喚者”か超能力者にしかお前の姿は観測できないというわけか？」

「そういうこと」

「じゃ、じゃあ…どうするんだよ。いや、結果的には助かったが」

啓介は頭を抱える。

葵は全くアリエルの存在を認知できていないのだ。

アリエルの分の料理を作る口実が無くなってしまう。

「…仕方ない。葵は手伝わせずして俺が一人で作るか。元からその

つもりだったが

啓介は息を吐く。

アリエルは丸い目でポカんと啓介を見ていたが、啓介が何をしようとしてくれていたのかを理解すると微笑む。

「啓介」

「あんだよ」

「ありがと」

アリエルはそれだけ言つと階段を昇つて二階の啓介の部屋へと入つていく。

後で持つて来い、という意味かと理解した啓介は溜息をつく。

そして居間へと戻ると台所に立つていた葵に話しかけた。

「おおうー、葵。今晩は俺が作るからお前は居間でテレビ見るなりゲームするなりしてろ」

「当たり前じやんか。私は料理できないんだから」

「…お前、まだ料理習得してなかつたのか」

「い、いいから…ってなんで、お兄ちゃん顔真っ赤なの」

「ぶつ…し、霜焼けだよ」

「すっげー嘘臭いんですけど」

「い、いいから詮索するんじやねえよー欲しかったフイギュアが手に入つてウハウハなんだよー！」

「キモイ…」

「なにをーー？お前の腐つた趣味の薄い本を捨てるぞー！？」

下から聞こえるワーワーギャーギャーと騒ぐ兄妹の声を盗み聞きしながらアリエルは啓介の部屋のベットで笑う。

「…」のままでもいいかも

夕食を済ませた啓介は葵が風呂場へと向かうのを見届けると台所へと向かう。

皿を取り出したりして夕食の準備を終えた啓介は食事を持って自室へと向かう。

勿論、夜食ではなく自室で大人しく待つていいであらうアリエルのためだ。

「（顔を合わせづらいなあ…）」

他人から感謝されたことなんてほとんどないのでアリエルのあの言葉はかなり強烈だった。

啓介は溜息をつくと自分の部屋の扉をノンノンと叩く。

「（自分の部屋だって言つのに…）アリエル、いいか？」「どーぞー」

扉を開けた啓介は部屋の隅っこにまじょじんと座るアリエルを見て呟く。

「借りてきたネコかお前は」

「どういう意味？」

「そのまんまの意味だよ」

決してお前がネコのように愛らしことという意味ではない、と心中で言い放つ（ネコは嫌いだが）啓介は部屋の真ん中に設置されているガラスのテーブルに食事を置く。

「ここまでしておいてアレだけどよ、食べ方わかるか？」

よくよく考えたら箸を使つた料理をアリエルに提供するのは初めてだつた。

昨晩は部屋にあつたお菓子、今朝は食パンだつたので問題は無かつたのだが…。

「ふむ…この棒は何？」

アリエルが箸を持ち上げて色んな角度から見ながら尋ねる。

「箸つていうんだ。それを使って食べ物掴んで口に入れるんだ」「ふむう…。どうやって使えばいいの？」

啓介はやつぱり、と思つ。

フォークかスプーンを使った料理にすればよかつた、なんて凹みつつ啓介はアリエルから箸を受け取つて教えることにする。

「手前の一本　えつと静箸だったかな？ま、まあソレは親指の付け根と、小さなボール　ピンポン玉を握るようにして…曲げた薬指に渡した箸のほぼ中間を親指で押さえて固定して持つ」

啓介が自身の右手で今の講釈どおりに動きを再現する。

そして、アリエルに箸を渡して持たせる。

「こ、こんな感じ？」

「そうそう（覚えるの速いな。流石は人間と違うだけあるのか？）」

アリエルの右手を見た啓介は説明を続ける。

「もう一本　動箸は親指と人差し指と中指の3指でつまむようにして持てばいい。そして食べ物を摘めばいいんだ」

アリエルは啓介の言つたとおりに指を動かす。

人間業とは思えない上達振りだ。

「（何をやらせてもそつなくこなすタイプかね…）まあ結局、箸の持ち方なんて千差万別だし…アリエルの使いたいように使いなさい」

さ

「うん。それじゃ、食べるね」

「おう」

夕食は料亭で並ぶ日本料理の劣化版…のような品揃えだ。アリエルは魚の煮付けに箸を伸ばして食べ始める。

失楽園に魚があつたのかは知らないが、骨はちゃんと取り除いている。

「（…まあ、食つてくれるなら問題は無いな）」

啓介は壁にもたれてアリエルの食事風景を眺める。

ハムスターのような可愛らしさがなんとなく感じられる。しかし、黙り込む空気は啓介にとつて毒に感じてしまう（アリエ

ル限定期間)。

「… なあ、アリエル」

「なに?」

「… ちょっと、聞きたいことがあるんだけどいいか?」

「何も話さないといつのも『ワープ』ーションには悪いらしいので、啓介は口を開く。

「アリエルってさ、失楽園から来たんだり?」

「うん。まあ、やつなるね」

「昨日と今日の説明を聞いてて疑問に思つたんだが」

「?」

「アリエルって何時、失楽園に戻れるんだ?」

アリエルの箸の動きが止まる。

啓介は気づかずに尋ねる。

「いや、別に出て行つて欲しいわけじゃない。よくわからねーけど、俺が呼び寄せちまつた責任もあるみたいだし…。ただ、気になるんだよ」

「…」

「過去にお前達^{ワープ・スター}が契約を迫つた人間は全員が超能力者になつてんのか?」

「… その辺はわからない。私だつて全知全能つて訳じゃないし、他の人達のことなんかねえ…」

アリエルは何事も無かつたかのように質問に答える。

「… なんか引っ掛かるんだ。仮に全員が契約してたのなら、世界にはもっと超能力について色々な伝承が伝わつてもおかしくない筈だろ? なんで超能力者の存在が一人も露見しないんだ?… まあ、俺の推測だと全員が契約してるなんてことは絶対にないはずだけどな」

「?」

「… だつたら何で俺が拒絶しているんだ、つてことになる。俺は世

界にとつて普遍で普通で何のとりえも無い一般人だ。契約をせがま

れる対象が一般人である以上、俺みたいなやつだつているだろ?」

「まあ、そうだね。啓介は普通の人間だし」

「……だから思つたんだよ。コツド・イーター契約しなかつたら神々の超越者がどうな

るのか。何故超能力や神々の超越者の存在が世間に漏れないのか。

……答えを聞かせて欲しい」

「啓介ってさ、食事のときに空氣をぶち壊す発言するようなお馬鹿さんなんだね」

「え、い、いや……確かに俺はコツドミユ障だけど今聞きたいのはそういうことじやなくてだな……」

「不安にならなくとも啓介の思つてているような事態は無いから

「いや、だから」

「ないから」

「……………そつか」

啓介としては空氣をぶち壊すためにこんな質問を仕掛けたわけではなかつたのだ。

妹がいない時にしか聞けないことだったので今、聞きたかったのだ。

「（はぐらかされた）。そんなに触れて欲しくない話題だったのか

……？」

啓介はテレビを見ながら食事するアリエルを見ると一言だけ謝つて部屋から出て行つた。

翌日、学生達が食堂や教室で昼食を楽しく済ませる中、啓介は一人で屋上に佇んでいた。

右手には飲みかけの冷たいコーヒー缶が握られている。

物心ついた頃から両親が居なかつたことと兄や姉は数年前から家を出ていることから最低限の家事をこなせる啓介だったが、弁当を作るようにことは滅多にしない。

なのでいつもは食堂で済ませたり昼食を抜いたりする。

本日は啓介は昼食を抜いていた。

「ふわあ……」

欠伸をかみ殺す啓介は落下防止用のフェンスにもたれながら考え事をする。

「（アリエル…か）」

人外の姿をした人間そつくりの“バケモノ”。

彼女（外見と性別が一致するかは不明だが啓介は女だと捉えている）のことについて啓介は頭を悩ませる。

自分でもおかしいとは思つている。

他人に全く干渉しない、興味を持たない自分がなぜここまで一人の少女について考え込んでしまうのかが。

「（恋愛感情つていうよりは…妹？娘？）」

自分の深層心理など全く理解できないが、あの日あの時アリエルに惹かれたのは事実だ。

春期休暇限定の短期アルバイトの最終日を済ませ、貰った給料で何を買おうかと思案していた帰り道に啓介は近道で使うあの公園でアリエルと出会つた。

「（まあ、アリエルに対する感情の件については保留だ）」

啓介は唇をコーヒーで湿らせて考えに一区切りを入れる。

「（とにかく、契約しなかつた神々の超越者がどうなるのか。これが最大の疑問だ）」

アリエルに昨晚尋ねてみたがはぐらかされるだけで終わってしまつた問題を啓介は考える。

気になるのだ。

むしろ、そこが紐解けない限りアリエルに対しても接すればいいのかがわからない。

「（なんでアイツはばぐらかしたがるんだ？）」「明言しない、ということはまさか“帰れない”のかと啓介は考えてしまう。

「（俺みたいに神を信仰せずに今の自分と世界に絶望する人間なんざ恐らく大量に存在している。一人が願うたびに失楽園から神々の超越者^{イタ}が引きずり降ろされるのなら神々の超越者は人類の何倍も存在することになる）」

あんなバケモノが人類の数倍も存在しているなんてバカなことがあってたまるか、と啓介は思う。

「（いくら何でも…帰れないってのは無い筈。帰れないのなら失楽園の人口はどんどん減ることになるだろうし…アリエルがいつた上司とやらがそれを許すはずがないだろ）」

上司とやらがどんなバケモノかは啓介は知らないし、知るつもりも無い。

だが、自分の種族が減るのを黙つて見過ごすようなバカではないと思っている。

「（一定期間に内に契約が成立しないのなら帰還するとかそういうモノなのか？だつたらアリエルが俺との契約に積極的になる理由なんて無い筈。スルーして期間を待てばいいだけだし）」

しかしこここまで考えて啓介はハツとする。
まさか、本当に？

「（アリエルのヤツ…俺が契約をしなかつたら帰れないのか？）」「その考え方しか啓介の中には残っていない。

「（だとしたら、アリエルは…）」

啓介に契約の意志がない現在、アリエルは一度と失楽園に帰ることができないということになる。

しばらく考え込んだ啓介は唾を飲み込む。

「（なんつう押し売り商法だよ。しかも俺限定つてところが罪悪感をムダに抱かせやがる）」

アリエルが他の一般人にも見えているのなら他の人間に契約させて終了、という考えを実行できる。

しかしアリエルは啓介以外の一般人には全く感知できない存在であり、それは啓介しか契約対象がないことを示していることにもなっている。

「（…どうすべきなんだろうか）」

結婚なんて墓場に入るようなもんだと考えている啓介からすれば、アリエルは別に居ても実害がない存在だ。

啓介個人の感情では、このまま一緒に居ても問題ないと思つている。

同棲なんて恋人らしい言葉が似合う関係ではないが、人間の常識を正しく教えてやれば立派な人間（？）として育つてくれるだろう。人に存在が感知できなくとも物には触れることが出来るみたいなので家事とかやってくれると助かるし、なんて啓介は考える。

しかし、アリエルはどう思つているのかわからない。

「（帰りたい、つて思つてるかもな）」

誰だつていきなり異世界に飛ばされて一度と戻れませんなんていわれたら絶望する、と考えた啓介はポケットから携帯電話を取り出す。

「（聞いてみるか）」

タッチパネル式の携帯電話で電話番号を打ち込む。

電話先は自宅。

電話の使い方は教えていないが、何となく理解してくれるだらうと啓介は願つてアリエルが出てくれることを祈る。

しばらく間が開いた後にブツリと音がなる。

「（繋がった！）アリエル、俺だ。啓介だ。…聞こえてるか？」

『え…え…え…あ…う…』

何か言つているように聞こえるが遠すぎて聞こえない。

「受話器を持つて喋れ。耳に押し当てるんだ」

自分の声が聞こえているかは知らないが使い方を教えてみる。

『…あー、あー聞こえる?』

「ああ、聞こえる」

『…じ、これ何なのさ。いきなり音が鳴ったと思つたら…』

「いや…スマン。使い方を教えておくべきだつたな」

『恐る恐る触つたらいきなり啓介の声が聞こえるからびっくりしたよ』

アリエルの口調から少しだけ怒っているのが感じ取れる。

「あー…スマンスマン。…本題いいか?」

『謝つても……………本題?何か用?』

啓介の真面目な声にアリエルも真面目になつたのか尋ね返す。

啓介は意を決すると疑問をぶつける。

出会いつてたつたの数日しか経っていないが、中々良い関係を築けた二人にとってこの議題は関係を白紙にするものかもしれない。だが、啓介は聞いてみたかった。

自分のために、彼女のために。

「…なあ、アリエルつて失楽園には帰れないのか?」

『…昨日も同じ質問したじゃん』

「もしかして、俺が契約しない限り失楽園に帰れないのかよ?」

『どうしてそう思うの?』

啓介は自身の推理を全てアリエルに話す。

全てを聞き終えたアリエルは息をフウと吐く。

『……その通り、だよ。とは言つても契約してすぐに失楽園に帰れるわけじゃない』

「どうじつじじじだよ」

推理どおりだつたか、と心中で呟いた啓介だったが、アリエルの言葉に耳を傾けなおす。

『契約後、超能力者となつた契約者の最期を見届ける必要があるの。それを見届けて無事に私は失樂園へと帰ることになる』

仮に今契約したとしても啓介はまだ十六歳だ。

特に難病を患つているわけでもなければ、命に関わる怪我をしているわけでもない。

現在の日本人平均寿命は男性は八十八歳。

アリエルが元の場所に帰るまで軽く六十年近くはかかることになる。

「…なんで、黙つてたんだよ」

『…啓介は言つたでしょ？自分が特別になつて家族まで奇異の目で見られたくないから契約しないつて』

「推測だけどよ、お前達は無理矢理契約を結ぶこともできるんだろう？」

『できるよ。呼び出したのに契約しないつて頑なに拒絶されたときの最後の手段でね…。無理矢理契約してその場で殺して失樂園に帰るの』

「何で俺にその手段を使わなかつたんだよ」

『…最初は使おうと思つてた。だけど、啓介が私を邪見にせずに扱つてくれたのが嬉しかつたの。…啓介が私の存在を拒絶しない限り、啓介の意志を尊重しようつて思つたの』

「…おもいつきり邪見にしてるじゃねえか」

『私を悲しませたつて思つたらご馳走作つてご機嫌伺つてくれたし、寝る場所が無かつた私に自分の寝床を貸し与えてくれた。私が不由してないかつてずっと気にかけてくれてた。…今までこんな風に接してくれた人間はいなかつたし、内輪にもそんな存在は居なかつたから…すつごい嬉しかつた』

啓介は言葉を出せなかつた。

アリエルは恐らく一度人間界へと召喚された事があつたのだろう。電話の使い方やテレビ、缶ジュースを知らない所を見る限りでは数百年以上前のことだと思うが。

『……啓介がね、私をずっと傍においても良いつて思ってくれてるならこのまま契約しなくても良いかなって思つたりもした』

「……もし、俺がお前と契約せずに死んだらどうなるんだ」

啓介の疑問はそこだつた。

『…………多分、未来永劫の時間を彷徨い続けると思ひ』

『………言いたくなかったのかアリエルはポソリと呟くように啓介に教える。

「…俺」

『こんなお涙頂戴劇や啓介の感情を搔さぶつて契約するのはイヤだからね。啓介が、自分のために契約したいと思つたときしか私は契約しない…から』

俺は何を言うつもりだったんだろうか、と啓介は考える。
考えなく咄嗟に出そうとした言葉は何だったのか…

「（アリエルに対し恋愛感情を抱いているわけじゃない。それは完全にわかる。間違いない。…だけど、どうしてアリエルを守つてやりたいと思うんだろうか）」

友人のような関係、家族のような関係をアリエルに求めているのか？と推論を立ててみる。

しかしやつぱり啓介の考えは纏まらなかつた。

『……出会つてホントに数十時間だけ、啓介は優しいと思うよ？友達居ないとか性格悪いとか自分で言つてるけど、優しいと思う。だから私の話を聞いてアナタはすつゝく悩んだと思う。でも、自分の道を行つてほしいの』

「…そう、だな。…ありがと、何かムダに元氣でた」

啓介は少しだけ赤面しながら微笑む。

電話の向こうのよくわからない関係の存在に。

「…アリエル、葵にバレないように過ごしていくれよな

『大丈夫。あの人なら今は外に出かけてるから』

「…そうか。…なんか悪かつたな」

『大丈夫だよ。…私こそごめんなさい。黙つてて』

「…俺のためだつたんだろ？いいわ」

「どんな種族でも女は強いな、と思つた啓介はフェンスに預けていた身体の重心を前に押し出し「よつ」と声を出して地球の重量に再び逆らいはじめる。

「あと…今日も早めに帰るけどよ、今日は買い物手伝つてもうつからな」

『私つて他の人に見えないんだけじ』

「隣で何食いたいか言つてくれ。俺が買つ

『…ありがとう』

「ああ…じゃ、そろそろ授業だし切るわ」

アリエルと少しばかり話して電話を切る。

時間は午後一時十五分。

あと五分ほどで五时限目の授業が始まらう。

『…次は政経か』

啓介は憑き物が落ちたようなスッキリとした顔で屋上から出て行つた。

「（ま、考える時間はまだあるた。…今超能力について考えなくても、な）」

【1-3】お手ごとに想い（後書き）

追記（2012年1月5日）

一部の文章を修正したり追加したりしました。
物語の流れは変わっていないので絶対に読み返す必要は特にないと
思います。

【1 4】 委ねられた決断（前書き）

この物語は、ある程度の史実を織り交ぜながらも完全にこの現実世界とは完全に別の未来を歩んでいる別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家とかその他の固有名称で特定される全てのものとは、何の関係もありません。何も関係ありません。

つまり、この物語はフィクションです。

【1-4】委ねられた決断

アリエルは受話器を同じ場所に降ろすと啓介の部屋へと戻るために階段を昇る。

「（今日の）『飯か…。テレビでやつてた白いカレーみたいなモノがいいかも』」

啓介の部屋に戻ったアリエルは啓介の部屋を見渡す。
昨晩も啓介はアリエルにベットを貸して自身は一階の居間のソファで眠っていた。

妹の葵に「自分の部屋でなんで寝ないの？」と問い合わせられ、「深夜アニメ見てたら寝オチした」とわけのわからない言い訳をしていた啓介を思い出してアリエルは少しだけ笑う。

「（私が昔来た時とはすっごく様変わりしてるんだよね…。）」

啓介に曰く現在は西暦二〇三〇年らしい、ここは日本と呼ばれる地球の最東端部分に位置する島国らしい。

アリエルは机の上に出されたままの世界地図を見る。

「（私がいた場所は曖昧だつたんだけど…。契約者はなんて言つてたつけな）」

特に特徴の無い男だつたとアリエルは記憶を懐古する。

力だけを求めていた男は自分に全く見向きもしなかつた。

面白くない人間だつたのでよく街をぶらついて人間の会話を盗み聞きしていたのを思い出す。

それ以外にやることがないと退屈な世界だつた。

どつかの島に流されて死んだので失樂園に帰ることが早くできて

ラッキーだつた点だけは評価するが。

「（多分、二百年位前だと思うけどなあ。まあいいや）」

アリエルは棚に飾られているフィギュアを眺める。

水着姿とかメイド姿とかそんなフィギュアはないが、幅広い種類のフィギュアが見られる。

「（学校つて…楽しいのかな）」

アリエルはふと考へる。

自分のような存在は生まれた時点で最低限の知能のようなものを宿しているので、勉強なんてものは必要ないのだが…啓介を見ていると学校とやらがどんなものか気になるのだ。

「（…迎えに、行つてあげようかな）」

アリエルはベットで惰眠を貪りながらそんなことを考へていた。

啓介は田を覚ます。

終業のチャイムにより教師が出て行つたようだ。

「（六時限目の古典は実に面倒だつたな…）」

教室の前に置かれてるスクリーンパネルをぼんやりとした顔で眺める。

黒板なんていう物が日本の教育から消えて早くも一十年、現代の日本ではノートも鉛筆も使わない教育方式がとらわれている。床に固定された机は少しだけこちら側に斜めに傾いており、机の表面にはタッチスクリーンが二つ設置されている。

机の右隅つこにあるUSBの二つの挿入口に自分専用のUSBを挿入し、タッチスクリーンに【アプリケーション・ノート】【アプリケーション・テキスト】を表示させて授業で重要なところを書き写したり、教科書を読んだりするのだ。

ノートと教科書を電子化したものであり、上のスクリーンに

教科書のデータを、下のスクリーンにノートのデータを表示する。

「（大人たちは技術の躍進だの言つてるけど…俺からすれば小学校

からずつとこりうだつたしなあ）」

啓介も周りの生徒と同じようにノートパソコンを取り出してデータを読み取らせる。

途中から爆睡していたのでほとんど書き込んでいないが。

「（今日の授業も「コイツでお終いだし、とつとと帰るかねえ）」

鞄に入れているUSBケースに古典専用のノートデータが入っているUSBを片付けると全部がそろつてることを確認して帰りのHRが始まるの待つ。

クラスメイトたちはワイヤレスと担任が戻つてくるまでの時間に友人同士でお喋りを楽しんでいるが関係の無いことだと啓介は心の中でぼやく。

三分ほどして担任が教室へ戻つてくる。

「えー、明日の連絡だが」

「（どうせいつもと同じ平和な日常だよ。別に明日も今日と変わりっこない）」

担任が明日の連絡を言つている間に啓介は廊下を覗く。

空は快晴。

夕焼けが綺麗だ。

「あと、最近話題になつてている通り魔事件についてだが」

啓介は通り魔、という言葉に耳を立て初めて担任の言葉に注目する。

「（通り魔？）」

テレビのニュースを中々見ないのでどうも「当地限定の事件や物事に関しては疎い啓介だったが、流石に地元で通り魔ともなると知らないはずが無い…」のだが。

「先日、我が校の近くで不審者らしき人物が目撃されている。怪しい人物を見かけたら逃げるようにしろよ」

「（不審人物ねえ…）」

「通り魔の目撃情報と不審者の容姿が似ているらしいからな。通り魔はテレビでも言つていたようにナイフと拳銃を持している。犠

牲になつた一般市民も五人。全員が高校一年生だ

「（変質者…じゃないよな）」

「男子が四人、女子が一人犠牲になつてゐることもあるし、なるべく集団で下校するように。警察も警備を強化して見回りしてくれているが、安心はするなよ」

啓介は溜息をつく。

友達がいない上に近所に同じ学校の生徒は全くいない彼には死ねといつているようなものだ。

終礼が終わるとクラスメイトたちもぞろぞろと教室を出て行く。通り魔のことについて話しているのだろうか。

「（とにかく、とつと帰つてアリエルと一緒に買い物についてやらないとな）」

啓介も立ち上がりつとするが、「梅村」と担任に呼び止められる。啓介は心の中で舌打ちすると教卓へと向かう。

「なんですか？」

「今日、六時限目の授業寝てたらしくな」

「寝てないです。睡眠を取ると同時に学習するという効率良いスタイルで勉強していただけです」

「それを世間一般では睡眠学習というんだ」

「…」

「とにかく、居眠りした罰として社会科室の資料整理を頼んだぞ」

「いや、罰が割に合わないんですけど」

社会科室は向かいの校舎の三階にある。

あんな人気の無い不気味な場所で資料整理なんて拒絕したい。

「（アリエルに早く帰るつて言つちやつたしなあ）…用事があるんで全部はムリですけど、一部なら」

「全部だ全部」

「一部」

「全部だ！」

結局、全部の整理を啓介は任されたこととなってしまった。

午後四時三十分 市内のある喫茶店にて。

『我々としても困るのだよ。あまり騒ぎは起こさないでいただきたい』

「申し訳ございません」

カフェの外に配置されているテーブルの上にノートパソコンが置かれている。

ノートパソコンには「SOUND ONLY」と表示されている。
『情報不足な事についてはすまないとと思うが、こうも無関係の人間を巻きこみすぎるのはな…』

暗い赤色のオフィススーツを着た女性が座っていた。

周りは人の通行もまあまあ多い場所だというのに何者かと密談していた。

「私というよりは相方が騒ぎは大きくしているのですがね」

『林真一か…。あの暴れん坊を選んだのは間違いだったかもしけんな』

銀座や歌舞伎町辺りで見かけそうなオシャレに気を使つた女性はサングラスを外す。

「まあ、大体絞っていますのでそろそろ決着はつくはずです」

『ほう?』

『第零次接近遭遇があつたのは間違いない四月七日の深夜です。丘の上の公園を中心とした謎の暴風が発生した事件です』

『…』

「人間界では力の九割を封じられているにも関わらず、あの暴風を

巻き起こしたということとは降臨した存在は間違いなく【風】の属性を秘めた存在でしょう』

『【風】か…』

「残留思念の濃さからもかなり力の強い天使です」

通信相手の初老の男性はしばらく考えていた。

『……風に関連する存在で尚且つそれまで現世に存在しなかつた墮天使』

『“獄炎に座す者”と考えられます』

『だろうな。あの女狐なら超能力を見せつけて契約を迫るだろう。かつて数百年前にとある“革命騒ぎの宝くじ”を最後に引き当てる男に力を与えたのもヤツだ。…恐らく、今回の契約相手も契約すればどんでもない未来を引き当てるかもしれんぞ』

何を言つているのか一般人に全く理解できない会話だった。

『…八坂美鈴』

「はい」

『失敗は許されない。必ず、契約相手を見つけ出せ』

「はい」

『契約済みの場合は仲間に引き入れるのだ。知恵のリンクゴの予言では“二十四番目”になる未来が見えるらしい』

『…二十四番目！？』

『…そうだ。だから他の組織に渡つてしまえば、必ず障害となる。…仲間に引き入れる事が出来なかつた場合は』

『わかつています』

八坂は初老の男性の声を遮つて返事すると通信を切る。

『（…わかつているわよ）』

八坂はノートパソコンを閉じると傍に置いていたコーヒーカップを持ち上げてコーヒーを飲む。

「…冷たいわね」

午後四時四十一分。

「いつてきまーす…」

アリエルはこつそりと扉を開けて外へと出る。

家に帰ってきた葵にバレないようこつそりと家を出でてきたのだ。

「（たまには啓介を労って迎えにいってみようか）」

アリエルは歩き出す。

空を飛ぶ能力を使つたり、テレポートすれば簡単なのがアリエルは歩いて迎えに行く事に決めていた。

「（まあ、人間臭く生活してみたいつてのもあるんだけど）」

どうせアリエルの姿は一般人には見えないのだが、アリエルはこうして歩いている。

「（学校の位置なんて簡単簡単）」

自分には思念を辿る能力がある。

啓介から来た電話の発信源に向かえばいいだけのことである。

「さあーて…帰つたら今日は何して遊ぼうかな」

午後四時五十八分。

「なんで居眠りしただけで罰ゲームなんだか…」

相変わらずな世間の自分に対する冷たさに啓介は少しだけ凹みつ

つ、本棚に本を仕舞つていいく。

「二十世紀と二十一世紀に起きた歴史的大事件について記された本を片付けていく。」

「…歴史は苦手科目だ」

啓介は本棚の一番上に本を仕舞い終えると「ふう」と息を吐いて、背筋を伸ばす。

「さあーて、独り言いっても空しいだけだし…とつとと帰るか」

啓介は部屋を出ると渡されていた鍵を使って教室の扉を閉める。

「（さて…職員室に鍵を渡して…）」

啓介は橙色に染まつた廊下を小走りで駆け抜けて職員室を田指そうとする。

角を曲がつて渡り廊下を通過して職員室のある校舎へと入る。そして階段を下りて一階へと向かう。

「ちょっとといいかな」

啓介は職員室の前に佇んでいた黒服の男に話しかけられた。見ない人物だ、と思つた啓介は眉をひそめる。

「なんですか？」

「いやいや…ちょっと探し物をしていてね。手伝ってくれないかな」

「…何ですか？」

今日は厄日だと心の中で呟きながら啓介は尋ねる。目の前にいる男はとても普通には見えない。

銀色のボタンや銀色のラインが入つた真っ黒なコート。

身長は啓介より十数センチほど高そうなので百八十後半くらいだろうか。

ロングブーツを着用しているようだが、膝よりも長いコートなのでよくわからない。

「とある人を探してゐるんだ」

「…生徒の保護者ですか？だったら職員室で聞いたほうがいいと思うんですが…」

「いや、保護者ではないね」

「だったら客人ですか？」

「どう見ても校長や教頭に会う人の服装とは思えないのだが、一応聞いてみる。」

「いや…教師に用があるわけでもない」

「…何ですか？俺も忙しいんですけど」

「ちょっとだけ苛立ちを見せた啓介だったが、男のほうは気付いていない」というよりも気付いていて無視しているような顔をしていた。

「そうだね…とある人物が持っているモノが欲しいんだ」

「つまり、その人物を探してると？」

「そういうことになるね」

啓介は溜息をつく。

回りくどい会話は苦手なので单刀直入にしてほしい。

「…それで、誰をお探しなんですか？」

「墮天使」

啓介の動きが止まる。

男のほうはニヤリと笑みを浮かべる。

柔軟な笑みではなく、相手を自分の罠に陥れたときのような笑みだった。

「知っているはずだ。君は…いや、お前は“墮天使”と名乗った生物を」

「…」

啓介は目を見開いた。

「（どうして、知ってるんだよ…！？）」

「どうして知ってる、って顔してやがんな。ハハッ！もしかしてオメエ、墮天使なんてぶつとんだ存在がこの次元に存在するってことと知ってるのが自分だけだとでも思つてたのかアー！？」

男は本性を表す。

荒々しい口調で目の前で動搖している啓介に言い放つ。

「な、なん…」

「墮天使共は哀れな運命を嘆き、神を憎んだ人間を見つけては契約を迫る。なぜかつて？理由は簡単だ。墮天使共は“自分達の手駒”が欲しいんだよ！運命の日に備えて神の軍勢と戦う為の手駒が欲しいから、神の玩具ニンゲンに手を出してんだよ」

啓介は後ずさる。

男は下品な笑いを発しながら啓介を見つめる。

「墮天使はオーバーロードとして人間の世界に今まで干渉してきた。あいつ等は神の一一番のお気に入りである玩具ニンゲンを自分達のいい様に弄繰り回して一泡吹かせてやると同時にアイツの喉元を食いちぎつてやるっていう理由のためだけにあいつ等は地球を、人類を好きなよう弄繰り回してやがる」

「…」

「あいつらの身勝手な計画のせいで俺はこんなクズみたいな世界に叩き込まれてんだ…ツ…！」

男は今にも歯を碎きそつなぐらいの歯軋り音を立てる。

「お、お前、何者だよ！？」

啓介は怯えながら男に向かつて尋ねる。

「ああん？…ここまでいえば、わかるだろ？」

「超能力者だよ」

啓介は踵を返して走り出す。

荷物なんか一瞬で捨てた。

目の前の男は危険すぎる。

「逃げちゃダメよ」

左から聞きなれない新しい声が聞こえたと同時に啓介が大きく吹き飛んで壁に激突する。

肩を蹴られたと認識するには数秒かかった。

啓介は地面上に転がる。

痛い。

肩の骨にヒビが入つたような痛みを感じる。

「いつたあつ……！」

啓介は肩を抑えて座り込む。

座り込む啓介を見下すように黒服が口を開く。

「ごめんねえ～。痛いでしょ？まあ、骨折れるくらいの勢いで膝蹴りを入れたんだから痛いわよね」

「遅いぞ」

男と同じ服を着た女性。
どう見ても仲間だろ？。

となると、

「（超…能力…者か！？）」

男は道端に倒れている酔っ払いを見るように哀れみをこめて啓介を見る。

「なんで自分が超能力者に襲われてんのかがわかつてねえみたいだな」

「う…ぐう…！」

肩の痛みで声が上手く出ない。

啓介は涙が溢れそうな痛みを必死に堪える。

女は啓介を見ると溜息をついて男に提案を持ちかける。

「…ねえ、林…説明してあげてもいいんじゃないかい？」

林と呼ばれた男は舌打ちをする。

「時間が無いんだよ。わかってんのか？」

「回答無用で殺しちゃうと目覚めが悪いわ。…大丈夫よ。情が移つたわけじゃないから」

「…ならいいがよ。じゃ、八坂が説明しろ」

「はいはい」

林は啓介の前髪を掴むと引っ張りあげる。

「アナタ、墮天使アリエルをこの世界に呼び寄せたでしょ？」

「…」

啓介は涙目で二人を睨みつける。

「聞いたこと無いかしら？ユダヤ教やキリスト教の天使の名前で“アリエル”という名前を」

啓介は神話に詳しくないので聞いたことが無かつた。

林はそれを何となく察したようで、八坂の代わりに続きを喋る。
「…知ってるかどうか知らないが補足だけはしておいてやる。神々の超越者^{ド・イタ}ってのは元々は神に使えていた天使だつた奴らだ。奴らは落書帳通りにルシファーと共に神に反旗を翻して墮天使を名乗るようになつたんだよ。…まあ、話を戻すが、墮天使アリエルは天使どもを束ねる天使長であつたと同時に風や空気に精通した天使だつたわけだ。それはあいつ等が墮天した後も変わつていない」

「…！」

つまり、アリエルは神々の超越者の中でも上位に位置する存在だということになる。

啓介は驚きを隠せなかつた。

威厳も何も感じられない少女のように見えていたのだが、外見や雰囲気だけで彼女を見るのは大きな間違いであつたらしい。

八坂は愕然とした啓介の顔を見ると笑う。

「そんな怪物の怪物と契約されてしまつと、アナタも契約主の強さに沿うように世界を掌握するだけの力を得るに違ひないわ。それはとっても私達超能力者にとつて困ることなのよ」

「超能力者ってのは世界に約二千五百万人も存在している。勿論、全員が世界を掌握するような力を持っているわけじゃねえが、大国

を一人で滅ぼせるような力を持つ奴は何万人も存在する」

超能力者の世界は常に絶妙なパワー・バランスで成り立っているらしい。

つまり、啓介とアリエルの存在はそのパワー・バランスを崩壊させるような危険因子として世界中から認識されているということになる。

「世界中にいる超能力者の九十九パーセントは何らかの組織に配属しているの。…国家の特殊部隊やテロ組織のような“一般人が住む世界”とは遠くかけ離れた“血で血を塗る世界”で超能力者たちは自分の保身のために日夜隣国の特殊部隊と激突したり、テロリストを排除したり、破壊工作を仕掛けたりしているの」

「お前ら…血も涙も、ねえな」

啓介は憎しみを込めて言い放つ。

「そうねえ…。私達は自分の環境を壊されたくないのよ。バランスが崩れてしまえば一気に世界は第四次世界大戦へと傾く。そんなことになれば今度こそ地球上から文明というモノは姿を消すわ。それは私達としても避けたいことなの」

「俺達が喜んでこんな世界にいるとでも思つてんのならとんだ勘違いだな」

林も八坂も啓介に反論する。

「俺達はな、自分の大切な人や環境を守る為に、国家にそいつらを保護してもらう為に國家や組織の手足になつて働いてんだよ！自分の大切なもののためなら他人の命ぐらいいぢうつてことねえー！…それが人間つてヤツだ！」

林は啓介に唾を飛ばす勢いで怒鳴る。

「それに、パワーバランスが崩壊して自分の大切なものがある環境をつぶされるなんてイヤなのよ」

「…矛盾、してやがるじゃ、ねーか」

「？」

啓介は目の前の大二人に言い放つ。

「バランスが崩壊して欲しくねえ、のに…破壊工作する、なんて、
よお」

「…そうね。普通に考えたらそつなるわ。説明が足りなかつたわね
八坂が説教をするように説明する。
「裏世界にはとある予言ができる超能力者がいるの。的中率百パー
セントの絶対に未来が見える存在。その人がね、“堕天使アリエル
と人間の契約を絶対に阻止せよ”って言ったのよ。“もし、契約が
成立すれば、二十四番目がこの世界に誕生することになる”とも言
つてたわ」

「二十四番目…？」

聞き覚えの無い数字だ。

アリエルからも聞いたことの無い超能力者に関する情報。

「これから死んでいくお前に関係はねえよ。…とにかく、テメエが
世界にとつての害になるとだけ覚えておけばいい」

「まあ、あなたの言つていた矛盾についての回答だけど…私達のよ
うな下つ端が何千回と破壊工作しても一つの組織が不利になつたり
潰れたりするだけで全世界に強大な影響を与えるわけではないの。
だけど、貴方を除いた二十三人のような存在が一人でも生まれるだ
けで影響は全世界の組織に及ぶ。つまり、パワー・バランスが滅茶苦
茶になるのよ」

「…………」

啓介は何も言えなかつた。

「ま、あいつらは俺達の意志に關係なく俺達の深層心理が望んだか
らだとか抜かした理由で契約迫つて俺達を世界の闇に陥れる迷惑な
存在だしな。…テメエも運が悪かつたな。普通レベルの堕天使と契
約していたら闇に墮ちるだけで助かつたつてのに、上位レベルの墮
天使を呼んじまって…」

話は終わりだ、という林は呟く。

どんな超能力を使うヤツらのかはわからないが、普通の人間で
は敵わないような雰囲気が放出されている。

幾多の戦場を潜り抜けてきた傭兵の様な雰囲気を啓介には感じさせた。

「説明はこれくらいかしらね。……さて、遺言は？」

女は引き金に触れる。

「…」

啓介は声が出なかつた。

恐怖で声が出ない。

「…ぶるぶる震えやがつて。見るとムカツク。…とひとつ殺して

帰ろうぜ」

男は面白くない芸人を見るよつた冷めた目で啓介を見る。

啓介は絶望する。

「（畜生…。なんで、俺が…こんな奴等に…）」

なんというクソッタレな人生だつたのか。

啓介は悔しくて涙しか出なかつた。

押し付けられた銃から、ガチッといつ音が聞こえる。
ハンマーを押し上げた音だ。

「（畜生…。誰でもいいから…助けてくれ、よ…）」
弱弱しくなる悲鳴は、心の中でしか叫べなかつた。

「ま、来世で幸せな人生を過ごしなさい」

啓介は全てを諦め、目を瞑つた。

「啓介？」

しかし、悪魔は彼を救つた。

啓介の危機を救つたのは聞き慣れた声だつた。
汚れを知らない純粹さを感じさせる声だつた。

「アリ… エル…？」

啓介が咳く。

目の前の光景が彼には信じられなかつた。

どうしてアリエルがここに？

何故？

「…ほう、まさかお目当てのものが自分から来るとはな

林がニヤリと笑う。

「貴方達、啓介に何してやるの？」

アリエルは八坂の持つ拳銃を見て少しだけ驚く。

「殺すのよ」

「なんで…？」

「邪魔だから」

アリエルの顔から表情が消え失せる。

啓介はぞつとした。

少しだけ、墮天使としての顔を見たような気がした。

「…超能力者？」

「ええ、そうね」
LEVEL

「強度は？」

「律儀に教える必要は無いわ」

「…この時代になつても、まだ存在してたんだ」

アリエルは咳く。

啓介は苦しそうな表情でアリエルを見る。

「（…アリエル）」

「忠告しとくが、お前は助からねえぞ」

「！？」

啓介は自分の思惑を見透かされて目を見開く。

林は侮蔑の表情で啓介を見る説明する。

「神々の超越者は人間界に滞在する間は人間に対して戦闘目的で超能力を行使することを許されていない。詳しくは知らねえが、捷らしいぜ」

「そうね。仮にあの墮天使が防御系超能力を使おうとしてもムダよ。人間と戦闘目的で対峙しているのだから捷の効力で超能力は使えない

い。まあ、逃亡するためなら使えるかもしれないけど

啓介は絶望した。

「（アリエルは、身を守れないってことかよ…）」

自分を助けるどころかアリエルの命が危機にさらされている。

「つ…！」

啓介は歯軋りする。

自分の弱さに對して苛立つた。

「…それで、墮天使は私達に何をして欲しいのかしら？」

「解放して。いや解放しろ」

「聞けないお願ひね」

アリエルは左手を前に出す。

「あら、超能力は使えないんじょ」

「使つ」

「撃はどうしたのかしら？」

「知るか」

「撃を破つたらどうなるかはアナタがよく知ってるんじゃないかしら」

「どうでもいい」

「…随分と入れ込んでるのね」

「お前には関係ない」

アリエルの左手の人差し指から赤色の光が現われる。

何らかの能力の発動準備のようなものだろうか。

啓介はアリエルが自分のために撃を破るうとしているのを理解してしまった。

啓介は力を振り絞つて叫ぶ。

「アリエルッ！…もうやめてくれ！」

「…」

「…逃げてくれ」

啓介は頭でわかついてもそれしか言えなかつた。

この場で啓介を捨ててアリエルは逃げたとしても契約する相手を

失つたことでアリエルは永遠に人間界をも迷うこととなる。

しかしアリエルをこの場に置いていては、殺されるか撃の罰で死

よりも恐ろしい罰を受けることとなるだろう。

「（他の超能力者に、アリエルが見えるなら…見えるなら、誰か親切そうなやつを見つけて…暮らしてくれたほうが、まだ、マシだ）」

八坂は溜息をついて啓介を見る。

「素晴らしいくらいにピュアな愛ね」

啓介は八坂をギロリと睨む。

「愛、なんかじや、ねえよ…クソッタレが」

「……まあ、あっちの方は発動しようとしても撃で潰れるから放つておくとして」

八坂は拳銃を啓介の胸に押し当てる。

「残念ね」

「やめろ…！」

アリエルは叫ぶ。

超能力を今にも行使しようとしているが、撃の効力により上手く発動できていないようだ。

無理矢理発動すれば暴発して啓介を助けるどころか殺してしまうことになるので踏み切れないのだ。

「啓介ッ、逃げて！」

「（…俺だつて死にたくないさ）」

「啓介ッ！」

アリエルは走り出す。

超能力を発動できない状態で飛び込むなんて我を忘れてしまつている、と八坂は思った。

「蜂の巣になりたいなら殺してやんよ…」

林が自分の持っていた銃をアリエルのほうに向ける。

「！」

啓介はその姿を見て感情が高ぶる。

自分の命を犠牲にしてでも拳銃を奪い取つてやると思った。

「やめッ…！」

パン！と音を立てて銃弾はアリエルの方へと飛んだ。

銃弾はアリエルの肉に捻りこまれ肉を千切つて進む。

「ぐつ！」

左肩を打ち抜かれたアリエルは膝をつく。

「やめろおおおッ！！」

啓介は今まで生きてきた中で一番だったと言える程に力を發揮して暴れる。

諦めたと思って油断していた八坂にタックルをして床に叩きつける。

打ち付けられた衝撃で落とした拳銃を啓介は大きく蹴り飛ばす。

「うわああーー！」

「チツ」

林は啓介に向かつて舌打ちをすると同時に銃弾を放つ。

銃弾は啓介の右肘を貫通したが啓介は林にむかって飛び掛った。

「うおつ！？」

ひるむと考えていた林は完全に意表を突かれる形となり、啓介に飛び掛られる。

啓介は殺意を持つて林の首に噛み付く。

「ぐああああーー！」

歯が折れるくらいに力を入れて林の肉に歯を食い込ませた。

ブチブチと肉が切れる音がした。

啓介は噛み付いた後に右手を伸ばして林の両耳に指を突き刺した。

「ぐうおおおおーー？」

啓介は林が痛みで倒れるのと共に床へと転がるがすぐに体勢を立て直して逃げ出す。

「待ちなさいッ！」

八坂が体勢を立て直して懐から武器を取り出す。

十五㍍ほどのナイフ クナイだ。

八坂は変わった色をしているクナイを三本取り出して啓介に投げつける。

啓介は背中を向けて逃げていたので三本とも背中に突き刺さる。「ぐうッ！」

啓介の口から苦痛に苦しむ声が漏れる。

一瞬だけよろけたが啓介は走り出す。

「アリエル！」

啓介はアリエルの右手を掴むと引っ張つて角を曲がつて逃げていく。

「チッ！」

八坂は舌打ちをする。

「（逃げられた）」

林が目を押さえて床を転がっているが八坂は見向きもしなかった。（早急に見つけて殺すか？いや、学校 자체を爆破しても…。しかし一般人に手を出すのはルール違反。仕方が無い被害だったということにするか？）

八坂は床についた啓介の血を見る。

「（これを追いかけていけばアイツは殺せる。それに、あのクナイには毒が仕込まれている。…そう長くは持たない）林、意識はあるかしら？」

「ぐッ…あるひ」

「…一旦体制を立て直すわよ」

「……どうするんだ？」

田を押さえながら立ち上がる林に八坂は答えた。

「学校を爆破するわよ」

【1-4】委ねられた決断（後書き）

追記（2012年1月5日）

一部の文章を修正したり追加したりしました。
物語の流れは変わっていないので絶対に読み返す必要は特にないと
思います。

【1 5】 地獄への招待状（前書き）

この物語は、ある程度の史実を織り交ぜながらも完全にこの現実世界とは完全に別の未来を歩んでいる別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家とかその他の固有名称で特定される全てのものとは、何の関係もありません。何も関係ありません。

つまり、この物語はフィクションです。

【1 5】 地獄への招待状

啓介とアリエルは戦場となつた校舎の隣に位置する校舎の四階にある美術室へと退避していた。

学校外へと逃げようとした啓介だったが、門には黒ずくめの人間が数人ほど立っていたので校舎内へと戻るしかなかつたのだ。

「ぐッ…ううう！」

啓介は背中に刺さつたクナイを引き抜く。

血がドロリと流れて床に落ちる。

こういうときは抜かないほうがいいと聞いた事があつたような気もしたが、啓介は刺さつているのが痛くて仕方なかつた。

身体の底から何かが出てくるような気分に啓介は口から何かを吐き出す。

赤色の液体だ。

血が塊で啓介の口から出でてくる。

「だ、大丈夫！？」

アリエルが泣きそうな目で口から血を吐く啓介を見る。

「（し、死ぬ…）」

毒でも塗られていたのか啓介の身体は思つように動かない。

啓介はアリエルの左肩を見る。

弾痕はどこにも見られない。

「（超再生か）」

アリエルの身体は見た目こそ人の人間だが、実際は人外の存在だ。銃弾を撃ち込まれたくらいじゃ死にやしないのだろう。

「し、しつかりして！」

アリエルは啓介の首後ろに手を添えて啓介に話しかける。

「（携帯電話も壊れた。助けは呼べない。…どうする）」

死にそうだというのに冷静だな、と啓介は頭の片隅で思った。どのみち自分は長くは無い。

良くて數十分、悪ければ數十秒後には死ぬ。

「（…最期の悪あがきでもして、戦うか？）」

アリエルの声を聞き流しながらぼんやりとした意識で啓介は考える。

「（でも、今の俺じゃあいつらの超能力で殺される。やつさは運が良かつただけ…）」

「しつかりして！死んじやうよお……」

アリエルの瞳から涙が零れ落ちる。

「（今の状態で、最善の、選択…）」

「け、啓介え…」

「（…………これ、しか…ないか）」

啓介は覚悟を決める。

最善の選択で、アリエルを助けてることができる家族にも迷惑をかけないかもしない最高の手段。

「し、死なないでお…」

「ア、リエル…」

啓介は顔を上げてアリエルの顔を見る。

アリエルは泣いていた。

啓介は震える右手でアリエルの右手を掴んだ。

「契約、してくれ」

『つまり、逃がしたと？』

「申し訳ありません。しかし、仕留めないとほもう出来ます」

『ふむ…』

「下部組織の人間を使って校舎内にいた一般生徒・教職員は全員催眠術で昏倒させていますので事件の露見も問題ありません」

『ならよい。…傷の修復が終了次第、すぐに死体を回収しに行け』

「はい」

ノートパソコンが閉じられる。

八坂は息を吐く。

「……」

「どうすんだよ」

「死体を確認するわよ」

「わかつてることだよ…腑に落ちないんだよ」

「…あら、昔のことでも思い出した?」

「違え。…………あのジジイは何もわかつてねえんだよ」

「そうね…。死んでるわけがないわよね…」

二人は知っている。

追い詰められた草食獣は時に信じられない行動をするといふことを。

アリエルは啓介の言葉を疑った。

今、目の前の男はなんと言った?

「…お前を、家族を、俺の世界を守るために…力を貸してくれ」

「…啓介」

啓介はアリエルの右手を掴む。

「俺は、このまま、後悔して、死にたくないんだ。だから…」

「ダメ！」

アリエルは知らないうちに叫んでいた。

「啓介…死ぬ気なの？」

「…」

「私、前にも言つたよ…超能力は代償を必要とするって」

「…」

「代償つて簡単なものじゃないんだよ…死よりも苦しい苦痛なんだよ！？」

「…」

アリエルは啓介を説得しようとした。

確かに、超能力を得ることが出来たのならばあの一人組みにも勝てるかもしれない。

だが、超能力は完全にランダムであり、啓介に何の力が宿るのかなんてアリエルにすらわからない。

契約が無事に完了したとしても攻撃系でなかつたらどうじるというのだ。

「…」

「啓介…」

アリエルは頭の片隅で考えていた。

「（確かに超能力者へとシフトアップすれば啓介は人間の身体を捨てて生き長らえる事が出来るかもしない。でも、こんな状態じゃ…。いや、何よりも啓介が特攻を覚悟しているっていうことが問題…）」

超能力を得るための代償を乗り越えるには「自分が生きたい」という意志が必要だ。

「啓介、私やアナタの家族の為に戦つて死ぬつもりなんですよ？そんなのダメ！」

「俺が契約して死ねば、アリエルは戻れるだろ…？」
「何を言って…」

確かに契約後に契約者が死ねばアリエルは無事に失楽園へと戻る

」とが出来る。

それが啓介の言つ守れる手段だと言つのだろうか。

「…ダメ。啓介が自分の為に契約するんじゃないのなら私は契約で
きない」

「頼む」

「ダメ」

「頼む」

「ダメ」

「…後悔したくないんだ」

「…」

啓介はアリエルを抱きしめる。

アリエルは啓介の契約への意志の強さを感じ取ってしまった。

「（ダメ…だよ）」

「頼む」

「…約束して、くれる？」

アリエルは啓介を抱きしめ返す。

「生きて帰つてきて…！」

「…」

啓介は黙り込む。

自分の今の姿はどう見てもただの死に掛けだ。

災害医療の現場ならトリアージで即刻赤色か黒色を押されても仕
方が無いだろう。

「…」

「私どすつと一緒に居て…！」

それでも、啓介は目の前の少女を見ていると急速に生への欲望が
戻っていくような気がした。

まだ生きていきたい、と。

「…わかった」

啓介はアリエルを離す。

「俺は、絶対に帰つてくる」

啓介はアリエルに宣言した。

「……本当に？」

「ああ」

「……嘘じやないよね」

「本当だ。だから…」

啓介は時間が惜しかった。
だからアリエルを急かした。

「契約する、んだね…」

「ああ」

アリエルは目を開けていたが、啓介には何かを考えているように
見えた。

「啓介」

アリエルは目を開くと覚悟を決めた。

「生きて帰つてきてね」

アリエルは啓介の頬に両手で触れる。

「絶対に、意識を保つて」

アリエルは顔を啓介に近づけた。

啓介はこんな状況だというのにドキッとする。

むしろこんな状況だからこそ目の前の異性に種を残そうとする本
能が蠢いているのか。

アリエルは目を閉じた。

雲が風で動いたことにより、夕日の光が美術室に差し込む。

光は美術室の床を照らす。

しかし、美術室に映る影は一つだけだった。

客観的時間にして僅か十秒、啓介の主観的時間にして一時間にも
感じ取れたその行為はアリエルが離れたことによって終わりを告げ
た。

「（アリ、エル…）」

啓介は目を見開いていた。

身体中がガンガンに痛いといつにでものの痛みすらもの瞬間だけは忘れていた。

アリエルは顔を少しだけ紅く染めていたが俯いていて表情が良くなえなかつた。

啓介はアリエルに手を伸ばそつとした。

「耐えて」

アリエルが何かを呴いた気がした。

啓介はアリエルの咳きを理解しようとした瞬間に身体の奥底の異変を感じ取つた。

「（なん、だよ…！？）」

浮かんでくる気持の悪さに啓介は口を押さえる。

「（はき、そづ）」

啓介の口と手の隙間から赤色の液体がドロリと零れ落ちる。

「（血…？）」

何故、と考える前に啓介を頭痛が襲つた。

「ぐつ…うううううつづづ…」

四十度を超える高熱と頭痛に啓介は苦しむ。

苦痛で口が少しだけ開く。

喀血にしてはあり得ない量の血が零れ落ちた。

「うぐつ…」

もう一つの手で口を押さえよつとした啓介は気付いた。

「（鼻からも…血が出てる？）」

鼻の穴からも血が零れていた。

啓介は驚いた。

「ぐつ…うううううつづづ…」

口から手を離して頭を押さえて啓介は倒れこむ。

頭痛で意識が飛びそうになる。

高熱で意識が朦朧とする。

「（やば…い）」

口から大量の血を零す。

すると身体の至る所で痛みが発生した。

「ぐうっ……わああああ！」

啓介は痛みに床を転げまわる。

全身の神経が鋏でブツリと切られたような痛みを感じて啓介は涙を流す。

全身の感覚が麻痺していく。

苦痛しか感じない。

「（イタイイタイイタイイタイイタイ！…）」

啓介は気がついていなかつたが、耳からも血が流れていた。

爪と皮膚の間からも血が流れ落ちる。

啓介は目の前の景色がぼんやりとするのを感じた。

「（意識を、持て）」

実際には意識が朦朧としているのではなく、目から大量の血が流れていることと頭の毛穴から大量の血が流れていることによる視覚遮断なのだが、啓介は感覚が麻痺して気付けなかつた。

啓介は全身の細胞が好き放題に暴れ回るような感覚に襲われていた。

細胞が意志を持つて動いている感じだ。

身体が引きちぎられそうな苦痛に耐えながら啓介は目を閉じる。

血涙が目を閉じても大量に流れれる。

「（死ぬッ！…）」

血管の中を虫が蠢いている様な感覚に襲われた啓介はもがき苦しむ。

全身の穴という穴から血を噴出しているその姿はこの世のものとは思えなかつた。

苦痛に指が震える。

というよりも制御が出来なくなつていた。

「（痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い！…）」

感覚が完全に麻痺してしまつてもおかしくないのに痛みだけは延

々と啓介を刺激する。

聴覚も視覚も完全に破壊されてしまい、啓介は自身の状況と田の前の景色を見ることが出来なくなつた。

真っ赤なのか真っ黒なのが良くなからない色に田の前が染まる。頭をハンマーで殴られているような痛みを放つ頭痛に耐えながら啓介は考えた。

「（耐えろ！）」

身体が溶けていくような痛みに身体が燃えるような痛み。

この世のありとあらゆる苦痛を混ぜ込んだような苦痛が彼を襲つ。

「（イ……イタ……イタイ）」

思考能力が奪われていく。

自分が今何をしているのかすら考えられなくなる。

自分が何者なのか、自分が何処にいるのか、何故こんなことをしているか。

「（耐……え……り）」

血管が破裂した気がした。

骨が全て溶けていくような気がした。

田玉が萎むような気もした。

完全に自分の身体の意志を奪われる。

幽体離脱したような感覚で、身体がなくなつた気がした。

身体がなくなつてもこの苦痛はまだ続くのか。

「（……………）」

言葉にならない苦しみが口から放たれる。

いや、叫んでいるのか、口を開いているだけなのかすらわからない。

そもそも口を開いているのかすらわからなくなつてきた。

「（……………）」

啓介は左右から往復ビンタのように顔を蹴られていくような苦痛に耐えながら意識を持つとする。

しかし、苦痛は啓介の意識を奪おうと更なる苦痛を『えてくる。

自分が罵られる苦痛だつた。

姉に罵られている気がしたような気がしなくも無かつた。

人生滅茶苦茶だとか。

アリエルにも罵られているような気がした。

私を失樂園へ戻してだとか、どうして私を苦しめるのだとか。

弟前のせいで生活が大変だとか、弟前のせいで

妹に罵られているような気がした。

学校のクラスメイトに罵られているような気がした。

街で見かけたことのある人間に罵られた。

幼馴染に罵られた気がした。

世界中の人間に非難されている気がした。

（ ）

卷五

精神的苦痛と肉体的苦痛に晒されながらも啓介は必死に耐えた。

何故耐えているのかすら忘れたが、必死に耐えた。

理性が薄れて身必死に耐えた。

卷之二

耐えた。

耐えた。

耐えた。

耐えた。

耐えた。

耐え
た。

14

耐えた。

苦

1

耐えた。
耐えた。
耐えた。
耐えた。
耐えた。
耐えた。

痛

耐えた。
耐えた。
耐えた。
耐えた。
耐えた。
耐えた。
耐えた。

『お前は何故、力を求める』

「俺を大丈夫だよ。」

方に思つてくれた人を守りたい

『悪魔と契約するといつことがどれだけ愚かな事か貴様は理解しているのか』

耐えた。
耐えた。
耐えた。
耐えた。
耐えた。
耐えた。

「俺が誰も守ることが出来ないっていうのが、神様の決めた運命だつていうなら…俺は悪魔と契約してでも守つてみせる」

耐えた。耐えた。耐えた。

『その心意氣、良しとしよつ。…では、我が名を言つてみろ。さす
れば力を貸し与えてやるつ。貴様の知つているはずだ。我が名を』

「惡と闇の征服者」
サタン

耐えた。

耐えた。
耐えた。

『契約成立だ。我が娘を悲しませるでないぞ』

耐えた。

耐えた。

耐えた。

耐えた。

意識が強制的にブツリと切られていく中、啓介は変なことを思つた。

「（…誰と、会話して、なんだ？）」

「八坂」

「何かしら」

「日本政府とギルドの連中が水面下で動き始めているって報告が下部組織から来た」

「そう。…そろそろ行くべきかしら」

ちょうど爆弾の設置を終えた後だったのか八坂は立ち上がる。

「お礼参りと行こうじゃねえか」

林の身体からは先程の怪我が無くなっていた。

「あの一人が何処に逃げたかは知らないけど、校舎内にいるのは間違いない。とつとと消すわよ」

「わあーつてる。…ギルドや日本政府と衝突するのは出来る限り避けたいな。…両方とも強大な組織だし」

二人は校舎内へに入る。

「油断は禁止よ」

「わあーつてる」

「いつでも能力を使えるようにしておきなさいよ」

「わかつてる」

「い…え…」

真っ暗な世界で何かが聞こえた。

「い…え…」

誰かの声だ。

啓介の意識は急浮上していった。

「啓介…」

啓介は目を開ける。

夕日の光が差し込んだので目を少しだけ細める。

「啓介、大丈夫！？」

耳から頭にキンキンと音が響く。

「アリエル…か」

啓介は頭痛の残る頭を右手で押さえながら立ち上がる。

「た、立つても大丈夫なの？」

「大丈夫。…うん、眩暈がするけどすぐに慣れる」

啓介は嬉しそうなアリエルを見ると質問をする。

「…あれから、どれくらい経った？」

「啓介が血を出し始めてから… 十分くらいかな」

「…そろそろ見つかるだろうな」

啓介は床を見て絶句する。

「うわあ…」れつて全部俺の血?」

「うん」

「よく死なかつたなあ…」

啓介は自分のしぶとさに初めて感心した。
しかしアリエルは啓介に真実を話しかける。

「違うよ」

「えつ?」

「啓介は一度死んだといつても過言じゃないもの」

「どういうことだよ?」

「長くなるけどいいの?」

「気になるから話せ」

アリエルは傍に置いてあつた机の上に座ると啓介に説明を始める。

「啓介は私との契約によつて全身から血を噴出し、地獄以上の苦しみを味わつた。それは覚えているよね?」

「あれを忘れられるつて言うヤツは相当凶太いな」

「…啓介は私とキ、キ、キスをして契約したけどね、あれには意味があるの。あ、勿論キス以外の契約方法もあるんだけどね。…私はね、キスをして啓介の魂を食べたの」

「はい?」

超能力だの天使だの神様だの聞いてきた啓介からすれば今更魂が出てきたところで驚きなど無いのだが、“食べた”という表現には驚いた。

「勿論、魂を失つたら肉体は滅ぶんだけど…私達は魂を食べる代わりに偽魂レブリカを肉体に埋め込む。…魂についての説明は長いから省くけど心臓のようなものだと思つてくれても構わない」

「…つまり、心臓が入れ替わつたってコトか?」

「そういうことになるね」

飲み込みの早い啓介にアリエルは感心しながらも説明を続ける。

「心臓が入れ替わつたことにより、啓介の“人間の血液”は身体から追い出されることとなる」

「それがあの喀血やら血痰か？」

「そういうことになるね」

「うへえ… 血液って普通は百二十日くらいかけて入れ替わるんだけどなあ」

啓介がげんなりしたような声を出す。

「… その百二十日という時間を十分に短縮したからあの苦痛が発生したの。 “人間の身体” はそんな超人的な現象に耐えるわけがないし」

啓介はアリエルの向かい側にある机に座る。

自分の転げまわっていた床には血がべつとりとくつついでいる。

出血多量死の死体以上の血量だ。

「偽魂は“超能力者の血液”を生成して身体の各器官に送り出す。勿論、人間の身体じや超能力者の血液は薬過ぎて苦痛に襲われるんだけど」

「それも苦痛の原因か」

「そうだね。… まあ、十分間の苦痛を乗り越えたら身体中に超能力者の血液が行き渡るからそれで苦痛も止まるんだけどね。… ああ、そうそう。床についてる血も制服についてる血もしばらくしたら気化して消えるから大丈夫」

アリエルの言つた瞬間に床や制服から水が蒸発するような音が発生する。

赤黒の血は徐々に透けていつて見えなくなる。

「うつへー…」

「……それにしても、啓介… よく生き延びたね」

「そうだな…」

「病弱な人や高齢者、子供だったらあの過程で九割がショック死しちゃうんだけど…」

「えつ」

「病気を患つていたりする大人でも死ぬ確率は高いから怖かつた…」

「えつ」

「十代が一番死亡率低いのもやっぱり健康な世代だからかな…」「えつ」

生命の危機に飛び込んでいたことを改めて思い知った啓介は背筋
が今になって冷たくなってきた。

アリエルは机から降りると啓介に抱きつく。

「生きてて良かつた」

「え、あ…ああ」

啓介は顔を少しだけ赤くする。

しかし今現在の状況をすぐに思い出して真剣な顔つきへとなる。

「アリエル」

「…………わかつてる」

アリエルは名残惜しそうに啓介から離れる。

「アリエル、俺の身体に宿った超能力を教えてくれ。契約前にはわ
からなくても契約後だったらわかるんじゃないのか?」

「…うん。わかるよ」

「だったら教えてくれ」

啓介も机から降りる。

両者は夕方の教室で向かい合つ。

「梅村啓介、アナタに宿つた超能力は

「…………」

啓介は唾を飲み込む。

攻撃型能力であつてくれれば、ヤツらに対抗する」との出来る可
能性が見えてくる。

でも他の能力だつたら

啓介は不安を覚える。

アリエルは啓介の不安そうな顔を見て少しだけ悲しそうな顔をし
て申告した。

「【ファンタジスタ】現実逃避】です」

【1 5】 地獄への招待状（後書き）

追記（2012年1月5日）

一部の文章を修正したり追加したりしました。
物語の流れは変わっていないので絶対に読み返す必要は特にないと
思います。

【1-6】夢（ゆめ）を右へ、現（せんじやう）を左へ（前書き）

この物語は、ある程度の史実を織り交ぜながらも完全にこの現実世界とは完全に別の未来を歩んでいる別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家とかその他の固有名称で特定される全てのものとは、何の関係もありません。何も関係ありません。

つまり、この物語はフィクションです。

【1 6】 夢（げんやう）を右に、現（せつめい）を左に

四月九日 午後四時五十七分。

徳島県徳島市 私立創生高等学校に二人組みの男女が侵入。

同日 午後五時一分。

同高校の生徒である梅村啓介が一人組みの男女に強襲される。

同日 午後五時七分。

梅村啓介、ラッキーにより二人組みの男女からの逃亡に成功する。

同日 午後五時十三分。

梅村啓介、墮天使アリエルと契約を交わす。

同日 午後五時二十九分。

二人組みの男女は再侵攻を開始する。

同日 午後五時三十四分。

「…わざわざテメエから来てくれるとはな。苦しまずに楽に死にたいってか？」

「違えよ。テメエらをぶちのめしに来たんだよ」

梅村啓介、二人組みの男女と交戦を開始。

「オイオイ……」

林は自分の額に左手を当ててやれやれとでも言いつた顔をして溜息を吐いた。

「オイオイオイオイ…まさかマジで言つてんのかよ…」

林は自分の目の前の階段の踊り場に立つ啓介を見て大声を出して怒鳴る。

「さつきのラツキー・パンチが何度もあると思つてんじゃねえぞ…！」
「そりゃ… そうだろうな。基本的に俺つてラツキーとは縁がないし
「ふざけてんじゃねえ！！」

林は目の前が真っ赤になつた気がした。

元々怒りっぽいのは自覚していたが、年下のクソガキにこうも簡単にあしらわれるところがどうがなかつた。

林は啓介を睨みつける。

小動物くらいなら射殺せそうな殺氣が啓介を襲うが啓介は気にも留めなかつた。

「……成程な。テメエ、あの墮天使と交わつたか！？」

「…」

「超能力の秘密を全部知つて、尚且つ契約するなんざとんだイカレ野郎だなあオイ！」

「…」

「超能力を得たばかりの素人であるテメエが歴戦の俺達に勝てるとも思つてんのか！？」

「思つてる」

怒鳴り散らす林の隣で八坂は口を開く。

「…墮天使の協力は得られないとわかっていて私達に挑戦するというのね」

「そうだな。俺は本気でお前達を潰す」

「…体から血の後や傷が綺麗さっぱり消えていくこと、私達が辿つ

ていた血痕の消失。これらからすると貴方は間違いなく契約を交わしていることになる。… そうじゃないと私の毒が回つてとっくに死んでいるもの」

「毒が回つて死んでいると思ったからこそ一人は啓介をあの場で追いかけなかつたのだ。

契約すると怪我が完治するという特性を知らなかつたが、相応の代償を払うということを知つていた啓介なら死に掛けの身体に鞭を打つて死を超える苦痛を与えるなんて行為を行うとは思わなかつたからだつた。

「（それに…あんな重傷で契約の儀を行うなんて普通はあり得ないし…）」

八坂は啓介を見つめると懐から拳銃を取り出す。

啓介は黒く光る拳銃を見ても黙つたままだつた。

「アナタ、これを見ても怖くないのかしら？」

「そんなちゃちな物で俺を殺せるとでも？」

「まあ、思つていないけど。… アナタが超能力者になつたというのなら銃弾なんか効かないだろ（し）」

能力強度がいくつなのかは知らないが、最底辺の超能力者であつても銃弾程度では死にやしないだろ（う）と八坂は考えていた。

超能力者が人間と区別される理由のひとつに『再生能力』が挙げられるからだ。

「（銃弾が身体を貫通したとしても傷は直ぐに塞がる。肢体を切断や脳天や心臓を数発撃たれない限り、超能力者は簡単には死ねない）

「例え車に轢かれようとも一日すれば複雑骨折だろ（う）と完治させることが出来てしまつ。」

「酷い火傷でも二日で完治する。

しかしこの特性にも例外が存在する。

「銃弾や刀で斬られたくらいの傷じやアナタは殺せない。自身の傷の修復を見たアナタ自身が一番理解してゐんじやないかしら？でも

ね…欠点も存在するのよ

「…」

「一つ、怪我を負つても痛覚だけは残つてゐるから殺せなくとも動きを鈍くさせたりは出来る。一つ、超能力を用いた攻撃によつて負つた怪我は通常攻撃による怪我よりも治療が遅い」

「…」

「それに超能力者とはいゝ、撃たれたら傷の修復までに数分はかかる。その間にアナタを殺せば良いだけよ」

八坂は弾を装填して銃口を啓介へと向ける。

「大人が一人がかりで子供一人を殺そうとするなんてねえ」

「三十年前なら色々言われたでしょうけど、今の時代じゃそういう考えは古いのよ」

ダーン!と銃弾が銃口から飛び出す。

その銃弾は正確に啓介の顔へと向かつて飛んできた。

が、銃弾は啓介に当たることなく後ろの壁に撃ち込まれた。

「遅エ!」

啓介は首を動かしただけで銃弾を回避すると階段を蹴つて林へと飛び掛る。

「(早い!)」

八坂は啓介のスピードに一瞬だけ目を見開いて驚いたがすぐに対応する。

「甘いぞガキがあ!!」

林が啓介の身体を掴もうとするが啓介は身体を捻つてそれをかわす。

「うおおおおお!」

啓介は壁に設置されていた消火器を力ずくで取り出すと林の顔へと投げつける。

「させないわッ!」

しかし消火器は林に当たる直前で何故か破裂し、中身を辺り一面に弾けさせた。

舞い散る粉を吸い込んだのか咳き込みながら八坂は考える。

「（粉末式の消火器！…煙幕のつもり！？）」

「甘えぞおおー！」

しかし煙幕代わりの粉末は一瞬で吹き飛んで視界を元に戻した。啓介は右手で顔を防いでバックステップで距離をとる。

二人は逃げた啓介を追いかけて廊下へと向かう。

「こんなもんで俺達を倒したつもりかよ！？」

林は啓介に向かつて怒鳴り散らす。

「…」

「状況はテメエが圧倒的に不利だぜ！？」

「…」

「何か喋れよおおー！」

「…」

「それがお前の能力なんだな」

「…」

「…」

啓介の放った言葉に林と八坂は固まる。

「そつちのデカブツが消火器の粉末を吹き飛ばせる程の能力…まあ俺の見立てじゃ“風を操る能力”か？その能力を持つている。そして、こつちはまだ詳細がよくわからねえが、女のほうはデカブツに投げた消火器を破裂させるほどの能力…。“物を斬る能力”か“物を破裂させる能力”か？よくわからねえけど」

「…一瞬でそれを見抜くなんてアナタ本当に平凡な高校生かしら？」

「さあーてね。平凡を嫌つた平凡な高校生なのには変わりないかもしないけど」

啓介は左手を開いたり閉じたりしながら喋る。

「まあ、能力を披露してくれたんだし…俺も能力を披露してあげないと割りにあわねーよな」

啓介は左脇を締めて右手を横へと翳して目線を前へと向ける。そして、右足を後ろへと下げる。

「俺の能力は……」

啓介は左足に力を入れて前へと飛び出すと右掌を廊下の窓ガラスに当てて前へ押し出すように力を入れる。

「コイツだよッ！！」

啓介の右掌に弾かれた窓ガラスはバキンと音を立てて割れた。それに習うように啓介と二人の間にあつた全ての窓ガラスが音を立てて割れると同時にジェットエンジンのような音を立てた暴風によって一人の元へと飛んでいった。

「！！」

「【現実逃避】…？」

啓介はアリエルの言葉を反復するように咳く。

「人類の使っている用語で説明するならば…この能力は暗黒種ダークマターと呼ばれるカテゴリーに属する超能力であり、人類と私達が邂逅して以来の歴史上一度もこの世に発見しなかつた“未知の超能力”と呼ばれるものに該当するの」

「未知の超能力…」

アリエルは両手の指で遊びながら啓介に説明を始める。

「簡潔に言つてしまふならば“相手の超能力をコピーする能力”。コピーした超能力は同属性…この場合は暗黒種にカテゴライズされている能力を除いてどんな超能力でもコピーすることができます。例えそれが地球上を氷河期へと変えるほどの冷機操る能力だったと

しても相手の記憶や感情を改変する能力だつたとしても相手と喋らずに交信する能力だつたとしても… 同属性でない限り、どんなに強大な力であろうとどんなにしようとしない力であるうと完全に「コピー」することができるの」

「…完全「コピー」か」

よくマンガやアニメに登場する「コピー」系能力は“不完全「コピー」”ばかりだ。

それは勿論、強さのインフレを抑えるための措置であるとわかっているのだが… 啓介には気になる点があつた。

「完全「コピー」って… 強すぎる気がするんだが」

こういう強大な力には制約がつくものである。

先程の暗黒種は「コピー」できないといつ点以外での欠点は無いのだろうか？

「勿論、制約も欠点も数多く存在しているよ。私達の身で扱うならそんな制約は存在しないんだけど、元となるハードが人間である以上… 制約を設けないと人間の脳に能力が收まりきらないの」

「つまり、脳の容量や人間というハードでは本来扱いきれない力つて「コトか」

「そうなるね」

アリエルは溜息をつく。

「まあ、啓介の手にしたこの力… 【現実逃避】^{ファンタジスタ}は制約が多い方だね。同属性を「コピー」できないだけではなく、左手で能力に触れないと「コピー」できない、触れた回数しか「コピー」できないといつていう制約が存在しているし」

「左手限定？」

「正確に言えば左手の指先から左肩までかな。… 「コピー」した能力自体は右手でも使えるけど、「コピー」する時は絶対に左手だけでしかムリ。あと、別の能力発動中でも左手自体には「コピー」できる能力が残つていてるから防御としても使えなくもないかもね」

「どういう意味だ？」

アリエルからのアドバイスに素直に耳を傾ける啓介だったが、このアドバイスだけは気になつたので深く説明してもらつことにした。
「さつき触れた能力をコピーするって言つたけど… それは“能力者”本体に触れてもコピーできるし、“能力者が放つた超能力”に触れてもコピーできるの。だから… 例えだけど、能力者が放つた火球に触れてもその能力をコピーすることが出来るの」

「熱いじゃねえか」

「大丈夫。左手に当たつた超能力攻撃は無効化されるから触れても熱くないし冷たくないよ」

「そういう問題じゃねえだろ…」

「ぐうおつー?」

林は風でガラスの破片を纏つた暴風を跳ね返そうとするが相手側のほうが威力が高いこともあってか跳ね返せずガラスの破片をモロに受けける。

「くつ…！」

八坂は顔を背けて背中でガラスの破片を受け止める。

暴風はガラスの破片を一人の肉へと押し込む。

二人の身体のあちこちに切り傷が生み出され、肉が裂ける。

一人を通り抜けた暴風は奥の壁へと激突し、消え去る。

「くつ…………つおおおおおおおお…！」

林が激昂する。

激昂したせいで顔中の傷口から血の流れる量が増えたが、彼は気にしなかつた。

「俺の…俺の目がアアアアアアアアアアアアアア…！」

林は左目と右目を押される。

ガラスの破片で切れたようだ。

林は激痛に耐え切れずには床を転がりまわる。床を転がる度に床に散らばったガラスの破片が林の身体に突き刺さる。

「いくら超能力者といえども…切断された肢体の再生や脳の再生、臓器の再生は難しい。それは目玉にも適応されると踏んでいたが…見事に正解だつたみてえだな」

啓介は目を押されて痛がる林を見下すように言葉を放つ。

「どれだけ力が強くても盲目になつた以上、ソイツは使い物にならないハズだ。…あとはお前一人だな」

啓介は八坂を指差して宣言する。

八坂は苛立ち混じりに啓介に向かって言葉を吐く。

「…確かにこの男はもう使い物にならないかもしねれない。敗因は慢心ね。だからこそ、次は本氣でいくわ

「…本気出すなんて大人気ないな」

「四五の言つてる場合じやないのよ」

八坂は懐から鎖で繋がれた棒を取り出す。

「ヌンチャクか…」

「只のヌンチャクじゃないわ。ダイナマイトを埋め込んだヌンチャクとでも言うべきかしらね」

「…マジかよ」

啓介は後ずさる。

どれくらいの威力かは知らないが、ダイナマイト直撃なんていくら超能力者でも死ぬに違いない。

「さて、今から本気よ」

「ツ…！」

八坂のファイティングポーズに啓介は身構える。

「【現実逃避】は“触れた回数しか能力を使えないと”いう欠点以外に大きな欠点がもう一つ存在するの」

アリエルは窓ガラスの淵を指でなぞりながら啓介に説明する。

「それは“相手の能力を知覚していなければならない”という点。相手の持つ能力を実際に『見て』『触れて』『覚えて』『感じて』おかなければ、能力を使えないと。勿論、相手の能力を知覚していない状態でも触れればコピーはできる。だけど、使うことは出来ないの」

「厄介だな。他人から聞いた程度じゃ能力を知覚したって言うことにはならないのか?」

「ならない。アナタ自身が“相手の能力がどういう能力なのか”を知つておかなければならないの」

「つまり、実際に体験して初めて使えると?」

「そうなるね。だから、偶然触れた相手が雷操る能力者だったとするけど、その場合啓介はその人が実際に能力を使っているシンを見なければいくら“雷操る能力”だと理解していても使えないの」

いくら数学の公式を理解していても実際に問題を見てみなければ公式を活用できるかどうかわからないようなものか、と啓介は納得する。

「俺はあいつらの能力をコピーして戦うにしてもあいつらの能力がどんな能力かを見破らないとダメってことか?」

啓介は困ったように呟く。

あの一人が超能力者だというのは何となく感じ取れるし、あの身

体能力も人間のものではないと推測できる。

だが、実際に能力を見た事が無いのだ。

悩む啓介を見ていたアリエルは啓介に最後の説明を投げかける。

「正直な話、今回の戦いは本当に不利な戦いになると思う

「…どうしてだ？」

【現実逃避】^{ファンタジースタ}が『最強』にも『最弱』にもなれる理由だけね、

“手数の多さ”^{ファンタジースタ}が挙げられるの

「どういうことだ？」

アリエルは胸元で両手の指を絡めながら不安そうな顔で説明をする。

「【現実逃避】^{ファンタジースタ}は相手の能力をそのまま写し取る能力。逆に言えば、相手と同じ能力で戦うことになる。炎の能力者に炎で挑むようなものだもの」

「！」

「啓介は今回が初めての戦闘。敵は一人。…黒服の女相手に黒服の女の能力で戦っちゃダメだよ」

相手と同じ土俵で勝負すればどう見ても自分が負けるのは目に見えている。

「相手が知らない能力で相手に戦いを挑めるから【現実逃避】^{ファンタジースタ}は『最強』^{ファンタジースタ}と呼ばれているの」

複数の能力で相手を追い詰めることが出来る（＝手数が他の能力者に比べて多い）からこそ、【現実逃避】^{ファンタジースタ}は最強と呼び名高い能力の一つとして君臨しているのだ。

逆に何も「ペーしていない」ということは相手の能力を写し取つて戦うしか道がないという訳であり、相手と同じ土俵で戦うこととなる。

そうなれば、敗北は必然となる。

だから【現実逃避】^{ファンタジースタ}は『最弱』とも呼ばれている。

「…あの二人組みの能力を解析して二つの能力を上手く使い分けて戦うことが唯一の勝利に繋がる手段…ってことか」

啓介は自分の不利さを実感し、不安になる。

「^{ゴッド・イーター}私達の身体に触れても啓介は能力をコピーすることができないの。^{ゴッド・イーター}私達は一人が数百万もの能力を有しているから…」

つまり、複数の能力を持つ相手に触れても能力は何もコピーできないというわけになる。

アリエルの加護は受けられない。

「（本当に背水の陣だな）」

啓介は息を吐くとアリエルの頭を右手で撫でた。

「（超能力者としての梅村啓介が生きている左手じゃなくて人間としての梅村啓介が生きている右手で撫でることがコイツに対する信頼の証か…）」

アリエルは少し赤い顔で啓介にされるがままになっていた。

「…アリエル、お前はもつと上層の階に移動するか隣の校舎へと移動してくれ。不可能な場合は俺が時間を稼いで移動ルートを確保する」

「…その方が、啓介の邪魔にならないっていうのなら」

啓介は頷く。

「…じゃ、頼んだぞ」

「（あの女の攻撃を回避して倒した男に触れる…これで相手を叩きのめすしかない！）」

啓介は八坂のヌンチャク攻撃を回避すると林に向かつて走り出す。八坂はヌンチャクを左手で持ち直すともう片方の手で拳銃を取り出して啓介に向かつて撃つ。

啓介はまだ馴染まない身体を限界まで動かして銃弾を回避する。

「甘いわ」

八坂が右手で空気をなぎ払うような動作を行う。

啓介は嫌な予感がして頭を屈める。

すると啓介の頭上の天井の蛍光灯が粉々に砕け散った。

「（爆発させる能力！？いや…）」

「考える暇じゃないわよ！」

啓介が能力の解析に頭を奪われた瞬間だった。

八坂が右手に持っていた拳銃で啓介の背中を撃ちぬいた。熱を持った鉛が肉をブチブチと裂いていく感覺に啓介の余裕が失われ、恐怖が心の底から上がってくる。

「（痛…ツ！）」

啓介は一瞬だけ目の前が真っ白になるがそれでも構わずに走り、うずくまって倒れている林の頭に左手で触れる。

「死になさい！」

八坂はもう一度啓介の背中を撃とうと引き金を引いたが銃弾は出なかつた。

「（弾切れ！？）」

「テメエが死ねツ！」

啓介はくるりと身を翻して右手で拳を作ると田の前の壁を殴るような動きで空気を殴つた。

殴られた空気は巻きのよくな暴風の矢を生み出し、八坂へと放たれる。

「（まざいツ！）」

八坂は両腕で前を防御したが叩かれたことによつて生み出された空気は八坂の腕の骨を碎いて八坂の身体に直撃する。

「がつ…あ…ああああ！」

骨が碎ける音が廊下に響いたような気がするくらいに痛そうな骨の折れ方をした八坂は廊下の奥へと弾き飛ばされる。

「まだまだアツ！！」

啓介は左手で林を五回殴つて氣絶させる。

そして八坂の元へと走り出す。

「（間違いない！あの女の能力は“爆発する能力”でも“破裂する能力”でもない！）」

啓介は右足で床を力強く踏み碎く。

すると足の裏で強力な風が発生し、啓介を一気に吹き飛ばす。

「（恐らくは“指定したものを膨張させる能力”！威力は人を殺せない程度に弱い。しかも指定には時間がかかる上に精度は甘い！）」

凝縮が出来ない辺り、相当不便な能力だと啓介は考えた。

凝縮も操ることが出来るのなら相当使い勝手が良くなるだろう。「（空気や風は膨張させても逆に威力を強くさせたりとデメリットしか存在しない！だからアイツは攻撃を能力で受け止めることが出来ないんだ）」

啓介は立ち上がる八坂の顔に向かつて右足で蹴りを繰り出す。

鼻の骨がぐしゃりと鳴る音がした。

八坂が壁に叩きつけられ、ズルズルと力なく床に落ちていく。

啓介は風の発動を止めて着地する。

「……う……う……」

八坂は呻き声を上げながら折れた腕を使って立ち上がるうとする。啓介はそばに転がっていたダイナマイト入りヌンチャクを持ち上げる。

「（これをどうにか処分してこいつらをビリにかすれば終了…かもしないけど）」「どうするべきか。

「（殺したらコイツらと同じ穴のムジナだ。それだけは絶対に避けたいし、家族にも顔向けできなくなる）」

色々と一般人から爪弾きにされる啓介だが、それくらいの倫理觀は備えているし、殺されかけたからといって殺し返すというのも憎しみを憎しみで塗るようで啓介的に好きではない。

「（本当に大事なものを守るためになら人殺しだってできる、なんて

「 い う け ど … … 」

啓介は警戒を解かず、スンチャクを床に落とすとハ坂から距離をとる。

ハ坂は口から血の塊を吐き出す。

フードは既に外れており、顔があらわになっている。

二十代後半くらいの…歌舞伎町辺りにいそうなキャバ嬢のような中々美しい顔立ちをしていたが、血まみれで髪の毛もボサボサ、その美貌は見る影もない。

「 は は … … 」

ハ坂は力なく笑う。

啓介は眉を顰めるとハ坂に一歩だけ近づく。

「 何 笑 つ て ん だ よ 」

「 は は … … 」

「 答えろよ 」

「 … … 」

「 … … アンタの、勝ちね 」

ハ坂の顔は見えない。

ガラスの無くなつた窓から夕日が差し込む。

左から刺さる夕日の光に目を細めながら啓介はハ坂の顔を見る。

「 このゲーム、アンタの勝ちよ。 … … おめでとう 」

「 ゲームだあ？ こちとらお前らのせいで超能力者になつちまうわ身体中ズタズタにされるわで大迷惑だ 」

「 … … 超能力者になつてしまつた以上、アンタはこのまま生き続ければ間違ひなく“二十四番目”へとシフトアップされる 」

「 二四番目… ねえ。いい加減何を示してゐるのか知りたいもんだが 」

「 … … これからわかることよ 」

的を射ない回答だ、と啓介は思つ。

「 … … 私達はアンタに敗北した。既に下部組織から上層部や通信を傍受している他組織、スパイを通じて世界中の超能力者や裏世界

の組織にアンタの存在は知れ渡るでしょうね

「それがどうしたってんだ」

たかが一人の能力者が増えたくらいでビリーハンサムの問題ではないはずだ、と啓介は思う。

「…アンタのその能力、“『コピーする能力”で間違いないわね

「さてね」

「…そんな能力がカテゴライズされるカテゴリーなんて一つしか存在しないわ。」

「…」

「明確な線引きがされない不明確な能力のカテゴライズされるものなんて暗黒種ダークマスターしかないわ」

暗黒種ダークマスター。

アリエルも言っていたが、どうやら他のカテゴリーよりも注目されやすいらしい。

「…アナタって本当に運の悪い男ね」

「…」

“獄炎に座す者”に気に入られ、“一二十四番田”と予言され、手にした能力は世界でまだ十三種類しか確認されていない超希少種の暗黒種ダークマスター。

「…そうかい」

「まあ、これから始まる絶望の日々に苦しんで死ねばいいわ」

八坂は血を口から吐きだす。

「世界中の組織はアナタをどうするか議論するためにしばらくは刺客をよこされることも無いでしょうね…」

「つまり、しばらくは安全つて訳か？」

「そうなるわ……」

ゼエゼエと苦しそうに息をする八坂だが、啓介は同情しなかつた。

「……でも、こうやって刺客を撃退し続けていくつもりかしら?」

「うるせえ。撃退するに決まってるんだろ」

「うるせえ。撃退するに決まってるんだろ」

「…………その無謀さ、キライじゃないわ」

八坂は折れた腕を動かして胸を押される。

「…………私達はそのうち下部組織によって回収されるから心配は要らないわ。……まあ、処分はどうなるか知らないけど」

「……」

「安心してもいいわ。……さつきまで敵だったヤツの言葉なんて、つて思うかもしれないでしょ。けど……裏組織は証拠隠滅だけは一流だから……明日から何事も無かつたように生活が戻るでしょうね」

「……」

「…………もう行きなさい」

「……」

夕日の光が一人をさびしそうに照らしていた。

「……」

啓介は踵を返して廊下を歩いて去っていく。
勝負は、終わつたようだつた。

午後五時四十八分。

「……そう。私達はまだ生かしてもらえるのね」

『『そういうことになります』』

「……ということは、組織にとつて私達はまだ死んでもらいたくない
つて訳ね」

『『…………』』

「…………まあ、薄々感じていはいたけど……私達はあの少年を覚醒させるための餌だつた訳ね」

『やつでしょうね』

「あの少年を“一十四番田”にして組織にでも加盟させる気だったのかしり…上は」

『恩りべ』

「…まあ、そんな考えは安易過ぎるがさ」

『?』

「感じたわ。…今日、あの少年と戦って感じた」

『何を…ですか?』

「…“悪魔”って実在するのね」

『?』

「上に報告しておいてくれないかしり」

『はい』

「…“梅村啓介を子供だと思つて甘く見るな”ってね」

その日、四月九日。

世界中の多くの人間にひとつでは何の変哲も無い一日だったかもしれない。

しかし、世界の真実を少なからず知る者たちにひとつでは大きな衝撃を受けた一日であり、この世界に新たな不安定要素が生れ落ちた一日でもあった。

『遂に“一十四番田”となる因子がこの世に生れ落ちた』

『“一十四番田”は東アジアに住んでいる』

『“一十四番田”は男子高校生』

『“一十四番目”は日本の四国に住んでいる』

インターネットのある巨大掲示板の片隅の片隅。
一般人が見向きもしないようなインターネットの辺境の地おとぎのリンクにソレ
はいた。

『“一十四番目”は世界のパワーバランスを大きく乱す存在へとい
ずれ昇華するであろう』

『“一十四番目”は“獄炎に座す者”との契約により、“新世代の
能力”を手中に収めた』

『五十年間空席であった“〇”へと居座る可能性を持つ存在で
ある』

『有史以来の記録に全く記されていない未知の能力』

『現在の序列は第二十四位』

何が書かれているのかは普通の人間なら理解は出来ない。
だが、普通ではない人間には理解できた。

「…ふうーん、哀れな新入りさんが落ちてきたんだ」

青色の長髪を持つ美しい女性は大都会を歩きながら呟いた。

「新世代の能力…。これまた厄介な」

金髪であり、海沿いのカフェで休暇を楽しんでいた男性は呟いた。

「獄炎に座す者…。これまた面倒な堕天使が降りてきたものだ」
赤と黒が混ざった髪を持ち、玉座に座っていた男性は呆れたよう
に呟いた。

「…日本人？四国？」

茶色の短髪を持つ真剣を一本携えた少女は呟いた。

「空白の座席がドンドン埋まつていいなあ」

黒色の髪を持つたジャージ姿の少年は楽しそうに呟いた。

「…どんなヤツが現われようとも興味なんざねえよ」

黒色の髪を持つた軍服の少年は舌打ちと共に呟いた。

「日本人かあ…。やつぱり信仰の関係かな」

薄紫色のツインテールを持つた少女は半裸でベットに寝転びながら呟いた。

「二十四位かあ…。格下には興味ないね」

死体の上に座りながら黒髪の少年は呟く。

「……やつ」

光の差さない建物の奥で黒い長髪の少女は悲しそうに呟いた。

「悪魔と契約しちゃう辺り、相当のイカレ野郎つて」とか
檻の中で緑色の髪を持った男性は呟いた。

「コイツは遊んでくれるのかな？」

金髪の少女は誰もいらない公園で呟いた。

「…私にとつて有益となつてくれるのなら使つてやう」
「…」

高層ビルの最上階から街を眺めていた初老の男性は咳した。

『一十四番田は世界を真っ白に変える存在へとなるだひつ』
『ありとあらゆる概念を打破し、ありとあらゆる存在を変えの
『新世代の能力を用いて国を滅ぼすであらひつ』

「国? 滅ぼす? どんなバカだよ. . .」

雲を眺めていた男は咳く。

「中々楽しませてくれそうな玩具じゃないの」
玉座に座る少女は呟いた。

卷之三

銃を組み立てていた少女は咳く。

「波瀾萬丈の物語か?」いやでもゼロ?

誰もいない樂屋で男性は呟く。

「日本人…。なら殺すしか道はないな」

暗闇の中、息絶えた女性の傍らで男性が呟く。

「男子高校生。さぞかし精神が歪むでしょうね。こんな世界だと」
台所で料理を作っていた女性は呟く。

「悪の破壊者なのか正義の破壊者なのか…。気になりますね」
誰もいない職員室で女性はボソリと呟いた。

「……日本人か」

男性は満員のバスの中で呟いた。

「食べると美味しいのかしらね…」

高級レストランで大量の料理を前に並べた女性は呟いた。

「…いい男かもしれないわね」

地下室で女性はうつとりとした声で呟いた。

「ようこそ、このクソッタレな世界へ」

教室で大勢の学生が喋っている中、女性は楽しそうに呟いた。

「この日、世界は大きく指針を変えた。」

それが絶望へと繋がっている道なのか希望へと繋がっている道な

のかはまだ誰も知らない。

【1-6】夢（ゆめ）を現（あらわす）する（ひらく）現（あらわす）（後書き）

追記（2012年1月5日）

一部の文章を修正したり追加したりしました。
物語の流れは変わっていないので絶対に読み返す必要は特にないと
思います。

【1-7】 愚者（前書き）

この物語は、ある程度の史実を織り交ぜながらも完全にこの現実世界とは完全に別の未来を歩んでいる別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家とかその他の固有名称で特定される全てのものとは、何の関係もありません。何も関係ありません。

つまり、この物語はフィクションです。

【1 7】 暗者

日本のある平凡な町に住むちょっと変な高校一年生である梅村啓介は、あの日に起きた事件で大切な人達を守る為に天使の様な姿を持った悪魔と契約を交わし、魂を売り飛ばして超能力なんていうこの世のあらゆる物理法則を無視したとんでもない物を自分の身体に宿した。

その結果、謎の襲撃者を撃退し、どうにか危機は去った訳だがその代償はとんでもなく大きかった。

「啓介、言い忘れていた事があつたんだけど…」
「何だ？今更な気がするが聞いておこうじゃないか」「啓介の魂つてどうなつたと思う？」「え？…能力と交換して………どうなつたんだ？」
「…契約つてどういう意味かわかる？」「意志の合致による法律行為だったか？」
「つまり、私と啓介の間にはルールがあるって訳になるの」「ルール？」
「そう。擬」
「…………よくよく考えたらそうなるわな。で、俺とお前の間に
はどんなルールがあるって言つんだ？」
「私の欲を満たすこと」
「…………^{ゴシック・イーター}は？」
「神々の超越者には、食欲・睡眠欲・性欲に続く四番目の欲…第四の本能のようなものがあるの。それを契約者が満たし続けてくれることが契約の延長に繋がるというわけ」
「契約の延長…。ってことは、契約つて破棄できるのか！？」
「え。で、できなくてはいけないよ…。私の第四の本能を満たし続けてく

れなければいいんだから

「ナルホド。では、契約の破棄を

「でも、契約が破棄されたら死ぬよ？」

「……………」

「契約が破棄されればアナタの身体から偽魂レブリカが消失するの。でもそうしたら偽者とは言え魂の無くなつた身体が生き続けられるとでも？」

「デスヨネー」

「啓介の魂は私が持つていて。啓介が私との契約を破棄したり、私の欲を満たしてくれなかつたら啓介の魂は自壊して輪廻転生のループにも入れずに永遠に幽靈になつて世界中を彷徨うしかなくなるからね」

「……ちなみに、アナタ様の第四の本能つて？」

「『好奇心』」

「…………」

「それじゃ、死なないように頑張つてね。こればっかりはどうしようもできないし」

なんという暴虐。先に言えと啓介は怒つてやりたがつたがあの時にアリエルの静止や話を跳ね除けて契約を迫つたのは啓介自身である。

まあ、背中に毒を塗られたクナイが刺さつて生命が風前の灯なんていふ状況で悠長に話しを聞ける奴がいるわけはないのだが。

「（つまり、俺はアリエルを“樂しませ続ける”必要があるって事かよ…）」

本来のアリエルは人間の取る行動に潜む潜在意識や人間の生き方に興味を抱いていた存在であり、数百年以上もの時間を使って人間界を観察し続けていた。

なので彼女は普通の人間の普通な生き方をあまり好みない傾向にあるのかもしれない。

平凡な一生よりもデンジャラスでエキサイティングな一生を選ぶ

タイプだ。

つまり、啓介はアリエルにとつて面白くない行動（＝普通の人間と同じ行動）を取つてしまえば、機嫌を損ねてアリエル持つ啓介の魂はapoトーシスを組み込まれた細胞の如く自ら崩壊することとなる。

「なんという無理ゲー。辞退したくなつてきた…」

「辞退してもいいけど、その時もバッドエンドだから氣をつけてね…勿論、啓介はまだ生き延びたいのでアリエルとの契約に渋々付き合つこととなつた。

とは言つてもやる事は超能力を得る以前と変わりがなかつた。

そもそもあの超能力は対超能力者専用というどこぞの右手で幻想を殺す主人公と同じ日常に全く生かせない能力だつたので不良に絡まれたからつて超能力で一撃必殺！というわけではなかつた。

もう少しマシな物はなかつたのか、と啓介は思つたりもした。

まあ、動体視力の強化は対人戦ではこの上なく役立つた点、神経の強化も以前までの自分の限界以上の力を出せるという事で学校での体育も楽になつたといつ点では大いに感謝していたのだが。

それに、アリエルに「啓介の自然体を観察したいから私の機嫌を伺う為に生きるのはナシね」と言われてしまつた事もこの平凡な生活が続いている理由の一つにもなつている。

「（…まるで主従関係だな。俺が主だつたら危険過ぎて即刻警察行
きなんだろうけど）」

このように主従関係的な関係を結ぶことになつてしまつた啓介であつたが、別にアリエルから命令されたりアリエルのご機嫌を伺つ

たりせずに地位は対等として過ごしていた。

四月二十日。

土曜日なので学校はない。

啓介は長期休暇時はアウトドア派であるが、普通の土曜日や日曜日はゲームしたり本を読んだりネットサーフィンしたりして過ごすインドア派という大変中途半端な人間であり、その通りに今日は自宅に引きこもっていた。

そして何もやる気が起こらなかつた啓介は自室でテレビゲームをして遊んでいた。

「（暇だな）」

やる気がいまいち感じられない表情で壁に張り付けられた薄型テレビの画面を見ていた啓介だったが、ゲーム内で操作しているキャラクターは無駄のない動きで敵を撃破していた。

アリエルも同室しており、彼女はベットに寝転んで啓介の後姿を眺めていた。

傍から見ればまさに同棲状態。

「ねえ、啓介」

「なんだ？」

しかし会話からはラブコメの匂いも雰囲気も全く感じられない。むしろ友人同士の会話のような雰囲気だった。

「身体、痛くない？」

「大丈夫だろ。あの超再生って後遺症とかあんの？」

数日前の校内での戦闘によって負った傷のことを言つてゐるのだ

るつ。

確かに背中を銃撃された啓介だったが傷は完全に塞がっており、銃弾を受けたなんて言つても一蹴されそうなくらいに傷跡も残っていない。

「なあけど…」

「だったら大丈夫だろ。俺の身体に異変は生じてないと思ひど?」

身長は百七十四cm。

体重は五一kg

体格も髪型もなに一つ変わっていない。

「…そうだね」「

「心配しすぎだよ」

ゲーム内では啓介の操作するキャラクターが無傷で最難関のステージのボスを葬っていた。

相当な腕を持つているようだ。

「…でも痛かつたでしょ?」

「当たり前だ。俺は撃たれ慣れてる訳でもないし、喧嘩なんて小学生の頃までだ」

喧嘩や争いをあまり好まなかつたというよりは力が無かつたので刃向かえなかつた、という表現の方が正しい。

「超能力者になつて動体視力や反射神経が一流アスリートですら敵わないレベルになつていなかつたらあいつらには普通に負けていただろうよ」

勿論、相手側も超能力者があるので同等クラスの身体能力は持つていたのだが。

「今日は、奇跡だつたんだるつよ」

本来起こるはずのない奇跡。

アリエルに視えた啓介の本来の運命では一度たりとも彼の前に現われなかつたモノ。

「（…俺の運命がどうだつたかなんてアリエルにしかもうわからなすことだ）」

今更だが、アリエルが嘘をついていただけの可能性だってなくはなかつたのだ。

だが、それでも啓介はアリエルを信じた。

人見知りする啓介が、出会って数日にも満たなかつた存在を信用したのだ。

「（あの信用がアリエルによって操作されたものだつていうのなら今俺がこう考えていることだつて存在しないはずだし…。アレは、間違いなく俺の本心…つてことでいいんだよな）」

啓介はアリエルを信じた。

それは間違いなく運命とやらに大幅な軌道修正を仕掛けたと啓介は今、直感で感じていた。

「（運命が捻じ曲がつて神の加護を受けられなくなつたとしても、俺は俺だけのものだ）」

だから啓介は改めて誓つた。

神ではなく自分自身に。

「（俺の世界を…自分で守つていくんだ）」

同時刻 日本のとある場所にて

「たあ！」

人の近寄らない山奥の滝壺の傍の巨大な岩の上に少女がいた。

外見から判断するに年齢は十六・七歳であり、高校の制服を着用しているので職業は高校生であろう。

上半身はカッターシャツだけ着用しており、ブレザーは傍に捨てられていた。

髪型は数センチくらいの小さなポーテールだったが、結び方から察するに普段からの髪形ではないようだ。

「はっ！」

少女の腰には黒を基調としたゴスロリチックな銀装飾がつけられたベルトが装着されており、とても長いので少女の腰を一周半くらいしている。

しかもそのベルトにはゴスロリチックな装飾がされている銃のホルスターの出来損ないのようなものが二つ程左腰のベルト部分に繋がっており、そこに長さ一メートル程の刀を仕舞う鞘が差されていた。

靴も黒色の厚さ一センチくらいの厚底レザーブーツでパンクとゴスロリが入り混じったような装飾がされていた。

「てあっ！」

剣道に熱心な少女と捉える事ができるかもしれないが、彼女の服装が剣道とはかけ離れすぎて彼女を剣道少女だと捉えることが出来る人間は少ないだろう。

むしろ、“殺し屋家業の女剣士”的ほうが似合いくらいだ。

「……ふう」

少女は左手と右手に持っていた日本の真剣を鞘に仕舞うと肩からぶら下がっていたタオルで顔の汗を拭つた。

時刻は昼間で人めったに近寄らない山奥。

刑事ドラマで殺人事件の舞台に使われそうなくらいに立派な滝だ。土曜日の昼間に高校生の少女が一人で滝つぼにいるなんていうこと自体が異質すぎるのだが、彼女はそういう他人からの目を一々気にするような性格をしているわけではないのでそのことを異質と感じる者は誰一人としていなかつた。

「……」

少女はブレザーを持ち上げると埃や砂を払つて左手の人差し指と中指にかけて背中に垂らした。

そして二メートルも下の地上へと軽く跳躍して降り立つ。

厚底ブーツじゅう只では済まないような地形なのだが、少女は怪我もせずに麓へと向かつて歩き始める。

「……」

少女は右手でベルトについでいた携帯電話専用のホルスターから携帯電話を取り出す。

そして片手で携帯電話を操作し、とあるインターネットのページを開く。

「……」

そこは、インターネットの辺境の地。

誰も見向きもしないくらいに寂れた場所にひつそりと存在する場所。

この世全ての超能力者の動向が書き記されている場所。

『第十七位、異常なし』

「相変わらず、何処から覗えてるんだか……」

少女は恥々しそうに文面を眺める。

しばらく文面を眺めていたが急に画面が切り替わり、音楽が携帯電話から流れてくる。

着信だ。

「……」

少女は少しの間だけ出るべきか悩んだが、やがて小さな溜息をついて電話に出た。

「もしもし」

『御機嫌よう。体調はいかがですかね?』

『セクハラなら他所の女に言つて貰いたいんだけど』

『失礼な。社交辞令ですよ』

『黙れ。私達の世界に社交辞令なんてものがあるとでも?』

少女はイライラしながら電話の相手と話す。

『まあ社交辞令なんてございませんけどね』

「……用件をさつせと話せ。一体何?」

内容はわかってるくせに、と少女の心に誰かが囁く。

『……わかつてゐるでしょ?』

「ううさい。私はアンタたちのお遊戯けんりょくあらそいの駒として働くほど躍おどじやないし、駒になるなんてイヤよ」

少女の口調が徐々に苛立つてくる。

『全く……仮にも貴女の上司なんですが、私って「だったら上司らしくしろ。あと、用件だけを話せ。アンタと話してるとイライラしてしちゃうがない』

『やれやれ……まあ私も忙しいですし要件だけ言つてしまいましょうか』

「……」

『アナタに上から緊急任務が届いています』

「知るか。なんで私が上の為に血塗れにならないといけないのよ」

少女の歩く速度が少しだけ速まる。

小石をジャリジャリ踏み鳴らして進んでいく。

『いくら我々とて駒として十分に機能しない玩具を雇い続けるのは不可能なのですが』

「……」

『アナタの正体が世間に露見せず、アナタの世界が保たれ続けるのは我々のおかげでしょ?』

「私の世界なんてとっくに壊れてるわよ。：五年前に」

『まあ、貴女は立っているだけでも十分にパワーバランスを我々にとって良い方に傾けさせてくれる要因なので他の下つ端よりは使い物になるんですがね』

『だったらそれでいいじゃない』

『ダメですよ。たまには動いているところを見せなければいけませんし』

つまり、デモンストレーションだ。

『……イヤよ。やる気出ない』

『相変わらずですね。自分に関係の無いことには一切の興味も関心も持たないそのスタイル…』

「知るか。他人の目に構うなんてこと、もう疲れただっての」少女は電話の相手のお願いを一方的に断り続ける。

しかし、電話の相手の機嫌が悪くなることは一切なかつた。

『では、やる気が出るような情報を教えていたしましようか』

「はあ？」

少女は怪訝な声で聞き返す。

『貴女の“世界”とやらに残る最後の希望の命が狙われているようですよ』

少女は歩みを止める。

『貴女がこの世界に足を踏み入れた理由は“あなたの世界を構成する要素の大半が壊されてしまったから”でしたね』

「……」

『復讐の為にこの世界に入った貴女が“残った自分の世界”を大事にしているのはよく理解しています』

少女の携帯電話を持つ手に力が入る。

『“貴女が貴女でいられる最後の希望”。その者の命を狙っている輩がいるのです』

「…………誰？」

『それを知りたいのなら任務、受けてくれますね？』

「言え」

『……受けてくれますね？』

「…………チツ！」

少女は殺意を込めた舌打ちをする。

誰に向けたものは彼女だけが知っていた。

『……ありがとうございます。知恵のリンクによれば作戦決行日は五月五日だそうです。それまでは足取りが不明確で掴めません』

「…」

『ですので、作戦決行日に襲撃地点に貴女が赴いて直接保護するという形に』

バキッ、と音が少女の手元から聞こえた。

「（……餌にするってコト？）」「

少女は怒りに任せて握り潰した携帯電話を重要なチップだけ抜いてその場に捨てる。

そして少女は再び歩き出す。

「（私に怨みを持つ奴等の計画？それにしては知恵のリンクに作戦が筒抜けにされているコトを考慮できていない。私を狙った犯行なら上の奴等が私を寄越さずに勝手に対処しやがるハズ）」

少女は山道に到着する。

ここからは登山者の通行が多いので人がよく通る場所だ。

「（つまり、私を狙つた犯行というよりは“あの人”を狙つた犯行？）」

彼女の記憶の底に眠るあの人とは、自分の大切な親友だ。

自分とは違つてこのような世界に足を踏み入れるようなバカではなかつたはずだ、と彼女は考える。

「（……あの人には“何らかの価値がある”からあの人命を狙うということになる。……価値？何の？）」

少女はバス停の前に立つ。

人は他に誰もない。

「（……調べてみる必要はありそうね）」

少女の決意は誰にも知られること無く少女の底に沈んでいった。

「ふむ……」

「どうしたの？」

夜、啓介はテレビを見ながら唸つた。

隣で黄色のパジャマに着替えてアリエルは尋ねる。

「いやあー……俺ってホントに変わったんだな、と」

テレビでは宇宙人やらUFOやらの特番がやっていた。

こういった特番から超能力という言葉が消えて世界はもう随分と経過した。

「超能力者……かあ」

「……その、御免ね」

「謝らなくていいっての。……俺が決めたことなんだし」

啓介はアリエルを見ずにテレビを見ながら答えた。

「……ただ、どうやって生きていくべきなのか迷つてただけだよ」

「……」

「超能力者は世界に少ないってことはわかってる」

「そんなことないよ。この世界に超能力者ってザコ含めて一千万はあるし」

「…………えつ？」

今更暴かれた衝撃の真実。

「だからこそ、己の保身や世界征服みたいな野望のために巨大な組織が出来たりしているんだよ？」

「…………そういえばそうだな」

啓介は溜息をついてソファの背にもたれる。
何かショックだったらしい。

「……とは言つても、世界中に数十億もいるうちのたつた二千万。」

異端であることに変わりないと思つけど

「……だろうな」

アリエルは微笑む。

「啓介は、異端になつてどう思つた？」

「別に。… ただ、『自称・性格思考以外普通の高校生』っていう看板は降ろさないとなと思つていただけだ」

「これからはどう名乗るの？」

「……他の奴に比べて比較的普通でありたい高校生”ドビウス”」

「…相変わらずネーミングセンスがないね」

アリエルは残念そうな目で啓介を見る。

「うるせえ！」

啓介はふて腐れて頭をソファの背もたれに置いて視線を天井へと移した。

「まあ…私はそんな啓介が大好きだからいいんだけどね」

アリエルの言葉が隣から聞こえてきた。

「…あつそ」

「顔真っ赤だよ

「やかましい！」

人間を辞めても、目の前に化け物が現われても、命を狙われても。日常はそんな簡単には変わらないものなのだ、と啓介は改めて実感したのだつた。

【1-7】 愚者（後書き）

追記（2012年1月5日）

一部の文章を修正したり追加したりしました。
物語の流れは変わっていないので絶対に読み返す必要は特にないと
思います。

【2 1】 通行禁止（前書き）

この物語は、ある程度の史実を織り交ぜながらも完全にこの現実世界とは完全に別の未来を歩んでいる別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家とかその他の固有名称で特定される全てのものとは、何の関係もありません。何も関係ありません。

つまり、この物語はフィクションです。

【2 1】 通行禁止

五月四日。

非日常はひょんなどから舞い降りてきた。

「中華料理が食べてみたい」

自宅のリビングで学校生活の疲れを癒すために思う存分だらけていた自称・性格以外はマトモな高校生である梅村啓介（めいむら けいすけ）に彼のパートナー（決して恋愛的な意味ではない）のアリエルはこう言つた。

「…はあ？」

突然何を言い出すのだろうかと啓介は隣に座っていた外見超絶美少女のアリエルを眺める。

今、テレビの番組で中華料理が特集されているが…それに影響されたのだろうか？

「いきなりどうしたんだよ？」

「中華料理とやらが食べてみたい」

「いや、それはわかつた。俺が聞きたいのは理由だ」

「テレビで特集されていたから」

「…短絡的過ぎる」

啓介はここ一ヶ月の間の食事を思い出す。

超能力者になつたことで脳の性能と回転率が人間時代に比べて大きく飛躍したこともありてか全部思い出せた。

確かに、和食と洋食ばかりで中華料理は一度も食べてはいないな「デスヨネー。だから私は食べてみたいの。ドゥーコーアンダスタン？」

地味にイラつと来る英語の発音だったが、啓介は何も言わなかつ

た。

「じゃ、明日中華料理でも食べに行くか」

十年以上独りで暮らしてきた啓介であったが、料理は得意ではない。

人に振舞えるレベルのものを作ることが出来るだけであり、料理に対するこだわりも興味もいまいち存在しない。

決してよくアニメやマンガの主人公などが持つているような家事スキルを有しているわけではないのだ。

だから啓介は自身があまり食べたいと思わない料理は作ることが出来ない。

中華料理はその部類に当てはまる。

「えー…明日あー？」

アリエルが不満そうな声をあげるが啓介は溜息を突いて状況を説明する。

「あのなあ…。今の時間を考えてみるバカ。現在の時間は午後八時三十七分。さつき夕食も風呂も終わってあとは寝るだけだ。…今から店に行くつもりか？」

ぐつ、つと声を詰まらせるアリエルに啓介は追い討ちをかける。

「だいたい食つてばかりだと太るぞ。俺のパートナーがピザだと勘弁願いたい。だから中華料理は明日な。Do you understand？」

アリエルに比べて無駄に綺麗な発音かつドヤ顔で啓介は言い返す。

中学時代の三年間、英語を専攻していただけのこととはあった。

アリエルはう一つと不満そうに唸るがハツとすると左手を頸に当てて何かを考え込む。

「そうだね…そうだねそうだね」

「？」

「明日、啓介はこのテレビに出でる場所に中華料理を食べに連れて行つてくれると」

「は？」

啓介が口を開けて唖然とする。

「今からこの場所に行くには距離があるし、何よりもお店が閉まつてるからね。うん、啓介って相変わらず優しいね」

何というポジティブな思考回路。

啓介は嬉しそうなアリエルの笑みに一瞬だけ詰まるが直ぐに反論を開始する。

「待て待て待て！ テレビに映ってる場所がどこだかわかつてんのか！ ？ 神戸だぞ神戸！ 日本国の近畿地方にある兵庫県の県庁所在地だぞ！ ？ そして俺達の住んでいるここが何処だかわかつてんのか！ ？」
「日本国の四国地方にある徳島県の県庁所在地である徳島市だよね？」

「わかつてんじゃねーか！ わかつて言うとかお前マジ鬼畜！」

「大丈夫だよー。距離にして百キロメートルだよ？ 全然大丈夫。一時間とちょっとで着くでしょ」

「距離なんざどーでもいいんだよ！ 金だよ金！ 」

「大丈夫なんぢゃないの？ 数日前にお兄さんからお金が振り込まれたんでしょ？」

「バカか！ ？ 一ヶ月分の生活費だよ！」

「でも一昨日お兄さんから『ゴールデンウィークに友達や彼女と思う存分に遊べる分のお金振り込んでおいた』って電話来てたよね？」

？

「なんで知つてやがる！ ？ あの時、俺は一階のリビングについてお前は一階の俺の部屋にいただろ！ ？」

神々の超越者は地獄耳がデフォなのかと啓介は戦慄する。

アリエルは嬉しさを隠さずに言い続ける。

「啓介って日頃から友達いないじやない？」

「何で知つてんの！ ？ 俺言つたっけ？」

「いや、私が千里眼で啓介の学校生活覗いてるの」

「ストーカーかよ！ ？ いくらパートナーでもやつて良いコトとダメなコトつてあると思うよ！ ？」

確かにアリエルくらい美少女なストーカーだつたら大歓迎だが、と啓介は思う（ただし人間限定で）。

「だつて他にすることないし」

「イヤイヤイヤ！この前ゲーム買つてあげたじやん？」

「クリアした。主人公達のレベルも限界まで上げて道具も全部ゲットして裏ダンのラスボスも撃破した」

「すげえ！とんでもないゲーマーだよこの子…」

「まあ、とにかく啓介は友達いないんだからさ…」

「……（アリエルに友達いないって言われるのもツライな）」

ちなみに啓介は友達が出来ないんじゃなくて友達を作らないだけだと考えている（本当かどうかはわからない）。

「か、彼女といけばいいじゃない？」

アリエルが両手の指でもじもじとしながら恥ずかしそうに啓介に言う。

「お前、数刻前に俺に『彼女いない』って発言したよね？俺をそんなに苛めて楽しい？」

彼女が出来ないという懸案に関しては啓介は『彼女を作らないんじゃなくて彼女が出来る程のツラではない』と考えているので既に半分諦めている。

「（なんで不細工なのに生きてるのかだつて？そりやお前…配られたカードで勝負するしかねえだろが！）

誰に言つてるのかわからないが啓介は心中で吼えた。

まあ『整形』というイカサマもあるので彼女を作ることは可能といえば可能なのだが。

「け、啓介は何を言つてるのかな？私、そんなコト言つたつけ？」

「言つたよ！」

アリエルは頬を少し赤く染めて啓介に尋ね返す。

「で、でもさほら…か、彼女つてパートナーと同義じやん？パートナーといえば二人組で、彼氏彼女の関係も二人組！パートナーも力ツブルも同義だし、大丈夫じゃない？勿論、私は恋愛感情的な意味

で啓介が好きだと言つていい訳ではないからね？変な勘違いはダメだよ？私達は清く美しく正しいパートナーとして付き合っていくんだから！」

「（何を言つているんだろうかこの人は）」「彼氏彼女の関係をカッブルと言つてしまよ？カッブルつて元々はフランス語の『結びつき』つていう意味の言葉から来てるじゃない？それで『結びつき』といえば同義語で『繋がり』『絆』『腐れ縁』『相関』『関係』とかあるじゃん？パートナーつていう関係だつて十分に意味は同じだよ！？だ、だから…私が彼女になつてもいいんじゃないんでしょうか！？」

最後の方は敬語かつヤケクソ氣味に言い放つていた。

「ちょっと待て。お前は俺をどうしたいと？」

「だ、だからわ、わ、わ、私の彼氏になりませんかね！？」

アリエルは赤面で叫ぶ。

「仮に俺とお前が彼氏彼女の関係になつたとしても神戸に中華料理を食べに行くということに関して何のつながりも無い気がするんですけどけれど」

「か、か、か、彼女連れで神戸に行けますよ！？」

「イヤ、お前の姿…他人に見えないじゃん」

傍から見れば只の妄想彼女と歩いているだけである。

うわ、痛々しい。

まだ最近売れている恋愛シミュレーションゲームを持ち歩くほうがマシである。

…いや、そつちも同じくらいに痛々しい。

「言つてなかつたけど、契約後の神々の超越者つて自在に姿のオン

オフが可能になるんですよ？」

「マジで！？」

確かにそれならアリエルは外見だけは今世紀トップクラスの美少女（しかし中身は怪物かつ精神年齢は憶測だが數千歳）なので連れて歩くとこの世の我が同胞や永遠の怨敵の心に再起不能レベルの傷

モテないおとこたち イケメンども

を「えることが出来そうだが、多分ムリだろ」と啓介は思った。

「（俺達ってそういう雰囲気出せそうにないだろ）」

当事者にはそう感じ取れるらしいが傍観者の目にまづ映るのやら。

「だ、だから如何でしょうか！？」

アリエルが聞いてくる。

「そうだな…」

「う、うん」

「ん…」

「うん」

「わかった」

「本当に！？」

驚くアリエル。

喜びよりも驚愕のほうが少し大きいようにも見える。

「明日、神戸に一人で食いに行くか」

啓介はアリエルに向かつて言い放った。

「……どうか、そうですよね。私つて何やつてるんだろ。バカ。私つてホントバカ…。冷静に考えたら私達つてそういう関係になつたらダメだもんね。別に捷で禁止されているわけじゃないけど、異類婚姻譚なんてゴメンだつて啓介言つてたし…。アレ、だったら私が人間になれば解決するんじゃ…いやいや、啓介と私はプラトニックな関係であつて……」

「何をボソボソ言つてんの？オマエ」

待望の中華料理食べに行くつてのに何を落ち込んでいるんだと啓介は疑問を抱く。

「いや、食べに行くのは嬉しいんだけどね…。何ていうかちょっと

自分の理性の脆さに落ち込んでいただけ

「ふーん（そういうやコイツ、あの学校での戦闘時も理性を失つてた
し…結構理論派に見えて実は感情に流れやすいのかもね）」

啓介は立ち上るとテレビを消す。

「それじゃ、俺は寝るけど…どうする？」

「ふえつ…? い、これはまさかの『シャワー浴びてくるから』的な
発言の類語！？ い、いやでも… 私達はプラトニック・ラブな関係で
あり… あれ、プラトニック・ラブってどういう意味だっけ？ つて
か私達は友情を築く関係であつて… いやでも正直求められたら断
れる自信がないというかなんていふか…。 いやいや確かにそいつ
た行為は可能といえば可能ですけれど…」

「（一度テンパると連鎖してテンパリ続けるみたいだな。しかし何
て言つてるかよく聞こえん）

「いやいやいや。 こういう時つてどうするんだっけ？ えーっと『不
束者ですがよろしくお願ひします』だけ？ いやいやアレは嫁入り
する時の… つて私達結婚も婚約もしてないってば。 落ち着け、落ち
着け私。 私達は健全なお付き合い… ジャンクで健全なパートナー付
き合いをしている訳であつて…」

「どうすんの？ 一緒に寝るのか？」

啓介の自宅に空き部屋は存在していない。

妹の部屋を勝手にアリエルに使わせるとどうなるのかわかつたも
のではないし、兄や姉の部屋なんてとつこの昔に物置になつていて
目を背けたくなるような物量がそこには存在している。

だから啓介は自分の部屋のベットにアリエルを寝かせて自身は床
に布団を敷いて寝るような生活を送っている。

「い、一緒に寝る！？」 これはやつぱり誘つているとしか… いや
でもアレだよね… アレ？ アレってなんだっけ？

「いい加減、話聞いてくれない？」

翌日。

五月五日。

啓介とアリエルは神戸へと向かう高速バスに乗車していた。
ちなみにアリエルが数刻前に車内で「よくよく考えると初めてだ
よね。一人で遠いところにお出かけするの」なんて無邪気な顔で啓
介に言つたものだから啓介の顔が真っ赤になつたりもしたのだが、
啓介の赤面も時間が経つたのでだいぶ収まつたようだ。

アリエルは窓側の席で外の景色を楽しそうに眺めている。

啓介は通路側の席で背もたれに倒れながらアリエルを眺めていた。
「（まあ、こんなに楽しんでくれるなら浪費しても構わないかもな）

「啓介はそんなことをぼんやりと考えながら行き先について持つて
いるだけの記憶を掘り起こそうとする。

元々、県外から出ることなんて数えるくらいしか経験の無い啓介
にとって神戸は未開の地だ。

歴史や地理の授業で何度か名前を聞いたことがあるくらいである。
「ねえ、啓介。神戸ってどんな場所？」

記憶の採掘作業がアリエルの質問で中断され、啓介は意識をアリ
エルへと戻す。

「何て言ったんだ？ 聞いてなかつた」

「だから、神戸ってどんな場所？」

「（調べてなかつたのかよ）」

啓介のパートナーとなつて以来、人間界の常識について色々と熱
心に調べていたアリエルだったが、未だに土地に関する情報にまで
は十分に手が回つていらないらしい。

勿論、啓介も実際に行つたことなんてないのでネットやテレビで
得た情報しか知らないのだが。

「神戸」。日本国の大本営の兵庫県の県庁所在地として機能する大都市であり、日本全国に十一箇所しかない『帝都』の一つだな」

地理の授業で教師が言つていたことをそのままアリエルに伝える。

「『帝都』？」

「えーっとな…確かに一〇〇七年に新日本政府が始動させた『不死鳥計画』ってヤツで生み出された日本を代表する巨大都市のことをそう言つんだ」

「日本を代表するくらいに大きいの？」

「第三次世界大戦の末期に日本で革命が起こったこともあって終戦後かなりゴタゴタしたらしい。それで新日本政府が東京に集約されていた政治機能や他の機能を全て分散させたんだ。その分散先が十二箇所の帝都」

「ふーん」

アリエルは熱心に啓介の話に耳を傾ける。

「帝都ってのはそれ何かに特化されているんだ。例えば、今から向かう神戸は『学問・研究』に特化された都市だから別称で『学園都市』って呼ばれていたりする」

「つまり、勉強に特化されているって訳だね？」

「そういうこと。他の帝都も…仙台だと『工業』に特化された『工業都市』だし、福岡だと『経済』に特化された『経済都市』だ。那覇だと『観光』に特化された観光都市、広島だと『軍事』に特化された『軍事都市』ってな」

「ほうほう…。でも神戸に中華料理の町があつたよね？」

「そりや、学問に特化されているだけであつて他の機能もある程度はちゃんと充実しているさ。神戸は帝都になる前から観光地として有名だつたらしいし」

啓介はアリエルの質問に答えていく。

「ふーん…。で、気になつたんだけどなんで、日本政府はそうやつて何かに特化された街を作つて他の街をほつたらかしにしたの？」

「それはだな…ん？」

啓介はアリエルより向こう側の窓に目を向ける。
アリエルもつられて窓へと視線を向ける。

「おおっ……」

「綺麗だね」

海だ。

二人の乗っているバスは淡路島から神戸の間に架かる橋を渡つて
いた。

徳島と淡路島を結ぶ橋の時はアリエルがバスに対してはしゃいで
いたこと啓介自身も車酔いに耐えていたのでお目にかかる機会を逃
したので一人ともその景色に見惚れていた。

「（年に合わないんだろうけど…）こういう『カイ橋から見る海つて
初めてだから少し興奮するな）」

啓介もアリエルも黙つて景色を眺めていた。
他の乗客たちも景色を見ているようだ。

「（なんかこうこうの見ると今日、『コイツ』と来て良かつたなって
思うな）」

啓介は気が抜けていた。

仕方が無いだろう。

アリエルは超絶美少女だし、今日は『ホールテンウイーク』であった
し、休日であつたし、初めて見た景色であつたし
あの日のようなことがあつたのもあの日だけだ。

彼の頭からは完全に超能力のことが消え去つていた。

それはアリエルも同じであり、彼女も完全に油断していた。
だから

「ピンポンパンボーン、只今より当車両は行き先を神戸から“地獄
”へと変更します」

忍び寄る魔の手に逃げられないとができなかつた。

【2 1】 通行禁止（後書き）

追記（2012年1月5日）

一部の文章を修正したり追加したりしました。
物語の流れは変わっていないので絶対に読み返す必要は特にないと
思います。

【2 2】 天罰少女（前書き）

この物語は、ある程度の史実を織り交ぜながらも完全にこの現実世界とは完全に別の未来を歩んでいる別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家とかその他の固有名称で特定される全てのものとは、何の関係もありません。何も関係ありません。

つまり、この物語はフィクションです。

【2 2】 天罰少女

啓介は何が起こったのか理解できなかつた。

海に見惚れているといきなり自分達の前の座席に座つていた男が立ち上がって

「よお、元気にしてたかな？新人クン」

赤色の髪に唇につけられたピアス。

身長は百八十センチくらいで、年齢は…大学生くらいだろうか。

服装はパンクな雰囲気を感じさせる。

そして服装や雰囲気に似合う凶暴そうな顔つきだった。

「（まさか）」

啓介は心に溢れていた幸せな感情が急速に冷えていくのを感じた。そして、すぐさま目の前の男を排除することを決めた。

「平和ボケしすぎたなア…オメエ」

啓介は右手で顔面をガツと掴まれるとそのまま後ろに押された。アリエルが何かを言おうとした瞬間、男は楽しそうな叫び声を発しながら啓介の頭で窓ガラスを突き破つた。

最後尾座席にいた啓介は後ろの窓ガラスごと男によつて外へと押し出される。

「（ガッ）！！」

啓介はバスから叩き落され、コンクリートの地面に叩きつけられてゴロゴロと転がっていく。

「さアて、楽しいお遊戯の時間だ！」

男もバスから飛び降りて床に伏せている啓介の前に降り立つ。

「いやいやいや…超能力者一人相手に善戦した新人だつて聞いてたから…ちつとは期待したんですけどねエ」

啓介はフラフラと立ち上がる。

窓ガラスに叩きつけられた際にガラスで切つたのか左耳と後頭部が切れて出血していた。

「いッてえ……」

袖を捲くっていたので両手の腕の部分の皮膚はボロボロに破れており、痛々しかつたが啓介はチラリとだけ見ると慌てもせずに放つておく。

額を右手で押さえながら啓介は男の顔を見る。

「いきなりのこと過ぎて脳の処理が追いつかないってか？」

「つるせえ…。十分に目の前の現実を直視してるつづーの」

刺客が現われた、という現実に啓介は最悪な気分へと変わる。

あの時、あの八坂が再び刺客が現われる的な発言をして了一ことを啓介は思い出していた。

「お前、あの時の二人組みの仲間か？」

「まっさかア！俺とアイツ共は完全に敵対組織！敵討ちする義理なんざねえよ！ギヤハハ！」

啓介は去つていったバスのことを思い出す。

今頃お騒ぎになつてゐるかもしだれないが、こんな超非現実な戦いに一般市民を巻き込むわけにはいかないので放つておいてもらいたい。

むしろ、アリエルのことが心配だつた。

「…まあいいさ。刺客だか何だか知らないけど…俺の幸せになる予定だつた休暇を邪魔したつてことで地獄送りで許してやる」

「オイオイ…お前、俺が誰だかわかつてんの…？上位能力者だぜ

！？」

「知るか」

また新しい単語が出てきたが啓介は氣にも留めない。

恐らく強さのレベルを表してゐるのだろうが、啓介はどうでもよかつた。

「（邪魔するならぶつ飛ばす）」

啓介は左手の指をワキワキと動かす。

「（残つてゐる超能力はある時のゴシイ男の風の能力が四回。これをアイツの超能力の解析及びコピーリードして回りに回りにある物を使いな

がらアイツの能力と残った風の能力で倒すしかない）」

ほぼ一月ぶりになる超能力の発動なので無事に発動できるか少し心配だつたが、啓介は左手で拳を作ると男に向かつて走り出す。

「うおおおおー！」

「おッ、やる気か？」

交通量が多い橋の上で戦闘だ。

車には十分に気をつける必要がある。

啓介は男が右手を挙げたのを見て右足を前に押し出して急ブレーキで止まり、その勢いを使って身体を右に回転させて左足を使って風の能力を発動させる。

「だああつーー！」

啓介の蹴りから生み出された暴風の塊は男の身体を両掛けで突進する。

「悪いな。俺にそんなものは通じねえ」

男は向かつてくる暴風の塊に向かつて右手を振り下ろす。すると暴風の塊は真ん中でスパッと綺麗に真つ二つになつて男の左右を通り過ぎていく。

そして橋のガードレールを突き破つて消滅した。

「…なんか恐ろしいものを見た気がするな」

啓介はポツリと呟き、後ろから走ってきた車をかわす。

クラクションを鳴らされたがそんな心配をしている暇は無いと啓介は頭を切り替えた。

そもそも、あの暴風に反応できるなんて人間の動体視力を超えている。

いや、超能力者なので確かに人間以上の動体視力は有するのだが、あの二人組みでさえ反応できなかつた暴風をあっさりと対処してしまうとは。

「…で、オマエはこんなもんで俺を倒せるとでも？舐められたモンだぜ！この不知火紅蓮様もよおー！」

「ソウデスネー」

適当に返事を相槌を打つて啓介は考える。

「（憶測だが“斬る能力”か？あと、指定した物を斬るというよりは…腕自体が剣みたいな物であつて…それを使って斬つているだけみたいだな。でも、“かまいたち”的な能力にも見えなくも無いんだよな）」

啓介は右手で目の前のもをなぎ払うような動作をして風の能力を発動させる。

右掌から放たれた風の弾丸は周りの風や空気を取り込むように回転しながら大きくカーブして不知火の左側面へと突っ込んでいく。しかし、不知火は左腕でガードするように風の弾丸を受ける。すると、風の弾丸は真つ二つに裂けて消滅した。

「ハツ！同じ手をちょっとばかり変えたからって俺に敵うとでも

「思っていますよ」

啓介は不知火が弾丸を斬つた瞬間に風に乗つて凄まじいスピードで不知火の懷へと潜り込んでいた。

「テメエがどんな能力を持つてのかイマイチわからんねえけど…どうやら勝てなくはなさそうだな！」

「ぐつ…ああ…！」

啓介は左ストレートを不知火の腹に風の勢いを利用して打ち込む。何かを潰した様な感触がしたが啓介は気にせずに右ストレートを続けて叩き込む。

風に乗ったままの状態で啓介は身体を捻らせて左肘を不知火の顎に打ち込んでトドメに右足の踵で不知火の首を狩り飛ばした。

不知火は橋のガードレールを巻き込んで橋の外へと吹き飛ばされて落ちていった。

「思つてたより、身體が無茶な戦闘に馴染んできたな…」

啓介は自分の左手を見る。

最初の時の皮膚が破れた傷の修復が始まっていた。

ハイスピードカメラで皮膚の再生を見ているような気分だと啓介

は気味悪くなつて目を背ける。

「（アイツの能力に関しては色々と推測があり過ぎて使用できるかどうか微妙だな）」

風の能力も後一回しか使用することが出来ない。

刺客がどれくらいの頻度で來るのか、刺客がどんな強さを持つているのかは知らないが少しでも手数を増やすためにもアイツの能力を知つておきたいというのが啓介の考えだつた。

啓介は橋の隅に移動して車との事故を防ぐ。

「色々と考えたけど…やっぱり一番有力なのは…」

「“身体が刃になる能力”って知つてるか？」

今度の啓介の対応は早かつた。

風の能力を使って自分のいた場所から慌てて緊急回避をする。その瞬間、啓介が先程まで立つていた地面が斬られた豆腐のように崩れ落ちていつた。

「ツ…！」

「油断してやがるなあ…。俺の死を確認するまで油断するんじゃねえよ…！」

不知火が崩落した地面の部分から這い上がつてくる。

口から血を吐いていたが、不知火本人はまだピンピンとしていた。「オマエが表の世界の住人だつてことはわかってる。だから人殺しも出来ない。する勇気がない」

不知火は自身の左手の指全てを刃に変形させながら啓介に近づく。「だがな、俺達裏世界じゃそんな甘つたれたルールが通じねえんだよ…！」

「……」

「オマエはもう表世界の住人じゃねえ…！」

「……」「……

「俺に勝とうが負けようが、オマエはどのみち裏世界に落ちていく！」

「超能力者の世界つてのはそういうものなんだよ！！」

不知火はニヤリと口角をあげると啓介を見つめる。

「かかってこいよ。本気で俺を殺してみる。じゃなきゃ、死ぬぜ？？」

不知火は奇声をあげながら啓介へと走り出す。

啓介は不知火の左手振り回しを身体を捻つてかわすとバックステップで距離をとる。

不知火はそれでも直ぐに距離を詰めて啓介に対して腕を振り回す。啓介は必死に全ての攻撃をかわしていく。

「オラオラオラオラア！！どうすんだオマエー？死ぬぞオ！」

「（ヤバッ……）」

近接戦は喧嘩慣れしていないこともあってか啓介はかなり苦手だからこうやって敵の攻撃をかわすだけでもかなり精神力と体力と集中力を浪費させる。相手に触れるなんて不可能過ぎる。

「ハツ！」

不知火は啓介の首目掛けて右手を伸ばす。

啓介は首を刃にして攻撃を受け止めた。

「成程成程オ…。『ピー能力かあ？』

「（使つちまつた…。でも仕方ねえ！）」

これで使える能力は後一回。

啓介は迫ってきた車をよけるためにもバックステップで再び距離をとる。

「（とにかく）いや不利だ！場所を変えないと…）」

「逃がすか！」

不知火は自身の左足を刃に変形させるとサッカーボールを蹴るよう地面を斬った。

不知火から放たれた斬撃は啓介へと向かつて突き進む。

一
べ
せ
二
！

啓介は全力で身体を動かして斬撃を回避した。

「まだまだア！」

不知火は左手で地面に突っ込んで五本の指で斬撃を放つ。
しかし五つの斬撃は啓介を狙つたものではなく、地面を抉り取つ

ていぐ

不知火が下で唇を舐め回した。

次の瞬間、コンクリートの地面がガラガラと音を立てて崩れていく。

啓介は全速力で走つて崩れていく。ポイントから離れようとする。

しかし、崩落のスピードは早い。

急ブレーキで停車していた車や反対車線の道路まで巻き込んで海と沈んでいく。

そして啓介も

き、恐怖を覚える。

啓介が手を慌てて伸ばすが橋には届かない。

一
七
清

学校の授業で水泳を取つていたくらいの水泳経験しかない啓介では泳ぐことは出来ても岸にたどり着くのは不可能に近い。

それに橋の下の潮の流れは非常に複雑であり、人間が泳げるような場所ではない。

「死んだ！」

啓介の心に絶望が浮かび上がる。

やはり神の加護を捨てた存在に奇跡は起こらないのだろうか。

しかし、新たな運命は啓介を見捨てなかつた。
ドサリッと啓介の身体が何か堅い物の上に落ちる。

「いつ……たあっ……！」

いきなりの予想だにしなかつた苦痛に耐える啓介はひっくり返つて背中を摩る。

そこで啓介はあることに気付く。

「（…水じゃない？）」

啓介は目を見開いて起き上がる。

そこには妙な光景が広がっていた。

啓介と共に落ちた車や瓦礫が宙に浮いていた。

否、橋へと向かつて上昇していた。

「（一体…何が…！？）」

啓介の乗つていた瓦礫も橋へと引き寄せられ、瓦礫が橋の地面にくつつく。

まるで最初から何も無かつたかのように元通りになつていった。

啓介は遠くにいる不知火の姿を見る。

彼の顔は驚愕に溢れており、それは彼の仕業ではないといつことを示すと同時に彼の計算外の事態でもあるようだつた。

啓介は呆然と目の前の光景を見ていた。

「な、何が起こつたつてんだよ！？」

不知火が狼狽しながら吼えた。

「誰の仕業だアアアアツ！？」

「私よ」

啓介の頭上から声が聞こえた。

啓介は上を向くが太陽の光でよく見えない。

ただ、啓介の記憶を刺激させるような声だった。

「誰だテメエッ！あのクソガキに仲間がいるなんて聞いてねえぞ！」
「仲間じゃない。私は上からの命令を遂行するためにやつて来ただけ」

橋の命ともいえるケーブルが少し揺れる。

そして啓介の前に何者が降り立つ。

「大体、任務以前に困るのよ。四国と近畿を結ぶ重要なラインを断絶させるなんて日本政府どころか超能力の存在の漏洩を嫌う組織から総スカン喰らつても文句言えないわよ」

少女だ。

年齢は十六・七くらいで啓介と同世代に見える。

「それにアンタ見てるとすつごくイライラする。あのムカツク女を思い出させるツラね」

「あアー！？」

ハイヒールのレディースブーツに似たゴスロリとパンクが入り混じった底の厚さ五センチ位のレザーブーツが啓介の目に映る。

最低限の肉がついたスラリと伸びている美脚、黒を基調としたゴスロリ的な装飾がつけられたとても長いベルトと短いスカート、銃のホルスターのようなものに差されている一本の物騒な得物。

「ま、アンタの事情なんて知ったこっちゃないし、それ以前に私は上からの任務もアンタの所のボスの思惑にも興味は無い。私は私を守る為にここに来た」

「訳のわからねえことをべちゃくちや喋つてんじゃねえぞ！」

茶色のショートカットに両手に装着された銀装飾の黒色の指なしの手袋、鎖骨が見えるくらいにボタンが外されたカッターシャツ。

少女の格好はどう見ても一般人ではなかつた。

異様な雰囲気を纏つた少女は溜息をつくと鋭い目つきで不知火を見つめる。

「……ま、いいわ。私も済ませたいことが沢山あるのよ。だからとつとここで」

そして少女は左腰のホルスターに差されている日本刀に左肘を乗

せて宣言する。

「消える」

不知火が何かを言い返す前の行動だった。

少女は超能力者でも簡単には再現できないようなスピードで不知火の懷へ飛び込む。

そして、左手で得物を抜いて全てを終わらせるための動作を行う。少女が抜いた惚れ惚れするような美しさを持つた日本刀は不知火の胸に赤い線を作る。

そして、少女は右手で不知火の首を掴みあげ、左足を地面に固定して右手を思い切り振る。

不知火は悲鳴を上げることもなく橋から落ち、海へと消えていった。

僅か十秒。

たったの十秒で啓介が苦戦した相手は瞬殺されてしまった。

啓介が驚愕で声を出せずにいると少女は啓介のほうを振り返り、啓介の元へと歩いてくる。

姿が近づくに連れて啓介の昔の記憶が強く刺激される。

こんな服装の知り合いなどいないと啓介は思つたが、脳は強く思い出せと命令する。

後姿ばかりで見えなかつた顔が見える。

とても美人だ。

アリエルとはまた別の美しさを感じさせる。

というよりはアリエルとは真逆のベクトルを進んでいると言えるような美しさだ。

何もかもがアリエルとは違う。

アリエルを竹取物語のかぐや姫のような儂さと美しさを持つた美

人と表現するのなら、こちらはキリッとして芯の強い大和撫子のような美人だ。

守られるというより守る そのような表現が良く似合つ。それと同時に啓介は思い出した。

「（……マジかよ）」

その記憶は啓介がまだ子供だった時の記憶。
自分が小学生になり始めたころの記憶。
自分の手を引っ張つて常に遊んでいた存在。

「まさか……」

背は大きく伸びた。

顔つきもあの頃と比べてとても変わった。

雰囲気も服装も全てが変わった。

声も変わった。

だが、何かが啓介を確信させたのだった。

「理奈……か？」

「久しぶり……啓介」

十年前に別れた梅村啓介の幼馴染、梅理奈^{かこいりな}は突然の再会に戸惑いながらも歓迎するような微笑を見せた。

【2 2】 天罰少女（後書き）

追記（2012年1月5日）

一部の文章を修正したり追加したりしました。
物語の流れは変わっていないので絶対に読み返す必要は特にないと
思います。

【2 3】 底辺の抱いたバラノイア（前書き）

この物語は、ある程度の史実を織り交ぜながらも完全にこの現実世界とは完全に別の未来を歩んでいる別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家とかその他の固有名称で特定される全てのものとは、何の関係もありません。何も関係ありません。

つまり、この物語はフィクションです。

【2 3】 底辺の抱いたバラノイア

啓介は田の前の美少女の再会を意味する言葉を聞いて唖然としていた。

田の前にいるのは彼の幼馴染であつた梅理奈。

理奈は右手を啓介に差し出す。

「あ、ああ……」

啓介は理奈の手をとつて立ち上がる。

立ち上がった啓介は自身の服をパンパンと叩く。

埃や砂といった「ミは落ちたものの、最初のバスから叩き出されてローリングした際の服の傷ばかりはどうしようもなかつた。

皮膚のように再生するわけではないので啓介は自身のみすぼらしい格好を見て溜息をはぐ。

「大丈夫？」

「ああー…何とかな」

啓介は自身の右腕を見る。

ぐしゃぐしゃに裂けた皮膚の再生が始まっていた。

理奈はそれを見ると顔を強張らせて啓介の右手をガツと掴む。

「お、おいー?」

「…………啓介、なんで皮膚が再生してるので？」

理奈は啓介の皮膚の再生を見ながら尋ねる。

「え、い、いや……」

どう答えたらいいか迷う啓介に理奈は核心をつくような言葉を出す。

「まさか……契約した？」

「…………ああ」

理奈の顔が恐ろしいような気がして見れない。

啓介は変わった幼馴染に少しだけ恐怖を覚える。

「…………とにかく、ここはまずいわ」

啓介は辺りを見回す。

炎上する車やひび割れた地面。

人は逃げてしまつたのか放置された車だけが残つている。

「何が？」

「こんな異変を警察が放つておくわけが無い。私達も直ぐに離脱しましよう」

「…そうだな」

「私の能力で一時的に地面を復活させているだけで私が能力を解除したら直ぐにこの場所は崩落するわ」

理奈は啓介から手を離すと歩き出す。

そして捨てられた赤色のスポーツカーに乗り込み、啓介に手招きをする。

「（奪うのかよ！？）」

啓介の驚きを含めた視線に理奈は平然と言い返す。

「非常時よ。津波や地震の際に運転手がキーをつけたまま逃げるのと同じこと。非常時だから使えるものは何でも使わせてもらひう。ほら、乗つて」

理奈はキーを回して車のハンドルを握る。

啓介は隣の座席に座る。

「…もう兵庫警察が既に動き出しているはずよ」

「どうするんだよ、逃げ道ねーぞ！？」

「とにかく警察が到着するまでの時間を考へると淡路へと向かうべきね」

理奈は車をJターンさせる。

「ちよ、ちよちよちよっと待つてくれ！」

啓介は慌てて理奈の提案に不満を告げようとする。

「分かつてゐる。啓介の墮天使のことでしょう？あの子は無事に神戸に入つてゐる。だから少し遠回りになるかもしれないけど、一旦淡路に戻つて連絡船で神戸へ向かうか、四国まで戻つて徳島～和歌山の近畿経由ルートなり瀬戸大橋を渡る中国地方経由ルートなりで神戸

へと向かつたほうがいいの」

理奈はアクセルを思い切り踏み込んで発進させる。

それと同時に理奈の能力が解除されたのか崩落が再開する。

完全に規定の速度を超えたスピードでスポーツカーは崩落する橋を逆走かつ爆走する。

「…ところで、理奈」

「やつと名前呼んでくれたね。…で、何？」

「ダメ元で聞くけど免許持つてるの？」

「忘れたの？私の誕生日と年齢」

「……デスヨネー」

同日。

午後五時二十二分。

梅村啓介と桜理奈の二人は帝都・神戸へと到着していた。

「計算外だつたわ。…橋の崩落によつて淡路からの連絡船は休航。徳島から和歌山への連絡船も日本政府の命令により休航。大鳴門橋だつて通行禁止にされるギリギリのところで通行成功。瀬戸大橋も封鎖される寸前に無理矢理強行突破。警察に追われながら岡山に入つてどうにか警察を巻いて戻つてきたのね」

「完全に俺達犯罪者だよね。乗つている車は盗難車。しかも警察の静止振り切つて規定以上のスピードで爆走。あと無免許顔を見られなかつたのは奇跡としか言いよつが無い。」

理奈はスポーツカーを道路の脇に停車させるとキーを差したまま降りる。

「いいのかよ…カギ」

「乗り捨てるのが車強盗の基本よ

数年も見ない間にすっかりと変わってしまった幼馴染にショックを受ける啓介だった。

そして数分ほど理奈に案内されて啓介は中華街へと到着する。

「ホントにここなの？」

「多分、アイツのことだ。テレビに映つてた中華料理専門店の前で待つてるだろ」

明石海峡大橋の前で待つてくれている可能性もあつたが聰明なアリエルのことだ、恐らくここで待つてくれているはずだと啓介は信じたかった。

「（姿は目立つからオフにしている可能性が高い…。だから名前を叫べない。つてか人多いなオイ！）」

啓介は一分ほど人ごみを押し分けた進み、目的の場所へ到着する。そこに、彼女はいた。

アリエルはポツンと片隅で体育座りをして寂しそうに待っていたが、啓介を見るとぱあっと表情を明るくして走つてくる。

「良かつた！ 啓介ホントに良かつたよお…」

アリエルが涙声で啓介に抱きつきながら喋る。

ちなみに姿はオンに切り替わっている。

「悪いな。ボロボロになつちまつたし、こんなナリージャ店には入れないな」

「いいよ…。啓介が無事ならそれでいい…」

啓介は少し恥ずかしそうにアリエルの抱擁を受け続けていた。

「（相手が人間じゃないと分かつていてもこの姿だし…相当ヤバイなあ。いや、恋愛感情とか性的対象つて言つて見てないから…）

「誰に言い訳をしているのか分からぬ啓介だったがとりあえず心中で叫んでおく。

「啓介、一緒に帰ろうう？」

「あ、ああ…」

涙目のアリエルの上目遣いに啓介がドキッとする。

頭では必死に人外の怪物だと否定していくもやはり限界はあるらしい。

「（ヤバイ。この雰囲気はなんか非常にむずむずする！誰かHello p m e !）」

SOSを発進する啓介に救いの手は舞い降りた。

「啓介！置いていくつてどういうこと…？」

理奈が人ごみから少し怒りながら現われた。

アリエルは理奈の姿を見て呆然とする。

理奈はアリエルを見ても何も思わなかつた。

「…ソイツが、啓介の墮天使？」

「あ、ああ…アリエルっていう名前だ。本名か偽名かは知らないけど」

「ふーん」

理奈は興味なさそうにアリエルをチラッと見るが、すぐに視線を啓介に戻す。

啓介はその反応に意外性を感じた。

「…珍しいな。普通、アリエルの姿見たら綺麗とか言いそうな気はするんだが」

「別に。神々の超越者って人外レベルの美男美女ばっかりだから見飽きた」

少し機嫌が悪そうに理奈は答える。

「（成程）」

啓介は納得し、アリエルの方に視線を向けた。

「……アレ？」

「啓介、誰あの女」

「あの…どうしたの？」

「まさか、女をナンパしてイチャついてたの？」

「な、何言つてるんですかね？ちゃんと刺客とランバーグーしてましたよ？」

何だか「このキャバクラのカードが妻に見つかって問い合わせられている時のような背筋の寒さは。

「それは信じてあげる。だけど、どうしてこんなに時間かかったたの？」

「橋が崩落して神戸に行けなくなっちゃったから迂回してたんだよ」

「ウソだ」

なんか怖い。

助けて記憶に残つていないお父さんお母さん。

「あんな美人、啓介の知り合いにいる訳が無い。同級生でも近所の人でもないじやん」

「俺の幼馴染」

「そんなエロゲーチックな設定があつてたまるかつて話だよ」「何処でそんな言葉覚えた！？」

「啓介のパソコン」

「畜生！」

色々とやばいものを見られたかもしれない、と啓介はショックを受ける。

アリエルは無表情で啓介に問い詰める。

「真実話してよ」

「いやマジで幼馴染」

「啓介みたいな冴えない普通の男子高校生に一次元みたいな美少女幼馴染がいるわけないよ。現実見ようよ」

なんかスゴく酷いことを言われている気がする、と啓介は思った。「そんなんに女に食えてたの？」

「はあ！？い、いや…確かに食えているといえば食えていましたけど…別にそこまで食えていたわけでも」

「私、言つたよね。彼女になつてあげてもいいって」

「…パートナーの話だろ?」

アリエルが黙る。

理奈は困っている啓介を助けるためにアリエルに声をかけることとした。

「ねえ、そこの堕天使。私は別に啓介とはアンタが考えているような関係じゃないから。なるつもりなんてないし」

「（酷い言い様ですね！幼稚園児のときは結婚の約束までしていたつてのに！）」

やはリアーメによくある幼稚園児や小学生の時に結婚を約束してずっと覚えていてくれるような幼馴染はいないらしい。

「キミ、超能力者だね？誰の奴隸？」

「（奴隸って言いやがった。俺には散々パートナーだと対等とか言つてた割には奴隸とか言いやがった）」

「奴隸じゃない。あと、契約相手はラミエルつていうヤツ」

「…………あのイヤな男か」

アリエルは苦虫を噛み潰したような表情をする。

どうやら知り合いらしい。

「ま、ラミエル如きの奴隸が私のパートナーである啓介と仲良くするなんてお・こ・が・ま・し・いんですけど」

「（何この修羅場。いや、アリエルが勝手に修羅場やつてるだけか？）」

「アラ、捷はいいの？神々の超越者ゴッド・イーターつて人間と結ばれることは重大な捷違^反だと聞いたけど？」

「子供が出来たら捷違反なだけですうー。あと、私は啓介とそういう関係じゃないです。何よりも固い信頼で結ばれた生涯のパートナーなだけでだから」

「ふーん。でも、啓介信じてあげられないんでしょう？ソレ程度の信頼で生涯だなんて笑わせてくれるわね。あと私達って子供の頃に結婚の誓いましたから」

「（覚えていたーツ！我が世の春が来たツ――！）」

「まあ、そんな気は毛頭無いんだけどね」

「（我が世の冬が来たツー……！）」

理奈は溜息をつく。

「…………」

「ま、本音は隠しておるのが私のスタンスなんだけどね」

「どつちなの！？」

「（売り言葉に買い言葉だな）」

啓介としても人混みの中から野次馬が形成されてこの修羅場を見物されているのは居心地が悪い。

なので啓介はまだ文句を言いそうなアリエルの口を両手で塞ぐ。

「どつちでもいいから修羅場はこれで終わりにしてほしいんですけど」

「修羅場じやない。私の一方的勝利よ。…ま、啓介がイヤなら別に良いけどね」

アリエルは啓介の両手をバシバシと叩いて不満を表現する。

「…何がそんなに不満なんだよ」

啓介は両手を離す。

アリエルは怒った。

「だつてえ！ 啓介が私を捨てると思つたんだもん！」

「……は？」

「身長は私より高いし！」

理奈の身長は百七十センチ。

日本人の女子高校生の平均身長より高い。

アリエルの身長は百五十五センチ。

ちなみに啓介は百七十四センチである。

「脚が私より長い！」

「（そりや……身長の時点でビリビリもならねえよ）」

「服のセンスが良い！」

「（俺からしたらゴスロリ+パンクってセンスは好きじゃないな。

まあ似合つてるから問題はないんですけど）」

「私より実用的そうだし！」

「（実用的？どういう意味？アレか？家事とかそういう感じのか？）

「徐々に褒め言葉になってきている気がする。

言つてゐるうちに悲しくなつたのかアリエルは再び涙目になり、次の一言を叫んだ。

「あ、あと私より胸が大きい！」

「（…公共施設のど真ん中で“胸が大きい”なんて叫ぶなーあああ……）」

啓介は心の中で頭を抱え込んで大いに凹む。

「……」

理奈も唖然としていた。

アリエルは気付いていないようだ。

ちなみにこれは啓介の目測なのでホントかどうかは疑わしいが、両者の胸囲部分の差はデカい。

アリエルの効果音が“ちょーん”なら理奈の効果音は“ボイーン！”というくらいの差である。

普通に女子高生の平均を超えている気がする、といつのが啓介の感想だ。

「（……どうしよう）」

野次馬がザワザワと騒ぐ中、啓介は涙目での状況を開拓する方法についてずっと考えていた。

野次馬からは「二股かよ」とか「男サイテー」なんて言葉が聞こえてくる。

アリエルはともかく理奈は元より他人の目を気にしない性格などで他人事のようにしていた。

「（……今日は厄日だつたな）」

理奈との再会がプラスだったとしても刺客との戦闘・この修羅場だけで普通にマイナスだった。

午後七時三十分。

啓介・アリエル・理奈の三人は市内のホテルに宿泊していた。市内のまあまあ高級なホテルを本日の宿泊先に選んだ理奈の神経を疑つた啓介だが、宿泊費は全部理奈が出してくれたので何も言わなかつた。

というよりも一介の女子高生の何処にそんなお金があるのかが疑問だつた。

「はあ……疲れた」

啓介はイスにどかつと座り込む。

入浴はしたが、替えの服もバスローブもないのにボロボロの服をもう一度着ていた。

理奈が服を適当に買つてくると言つてくれたのだが、プライド的な意味で丁重にお断りしたのだった。

啓介は奥のベットを眺める。

そこにはアリエルが既に眠つていた。

「（アリエルつて睡眠時間結構早い方だよな…。家でも十時くらいには寝てたし）」

などとぼんやりとアリエルについて考えていると啓介の頬に冷たいものが当たられた。

「うおつ！？」

啓介はびっくりして飛び上がる。

「なーにそんなに驚いてるのよ。ほら、差し入れ」

「あ、ああ……ありがとつ

理奈がコンビニでコーヒーと夜食を買つてきてくれたようだ。

理奈は日本刀をベットに放り投げると啓介の対面のイスに座り込む。

「コンビニで買つたものを田の前のテーブルに並べていく。

「結構買つたな」

「そりや、私と啓介で夜通しで会話するわけだし

「え？」

「再会したんだし…積もる話も色々あるでしょ？それに…超能力とお互いについても話さないといけないしさ」

理奈の言つとおりだ。

啓介は理奈を見つめた。

「私は啓介がどうして超能力者になつたのかつていう理由と啓介の環境の変化についても色々と聞きたい。啓介だつて…私に関することとか超能力のことについて聞きたいんじゃないの？」

「そうだな…」

啓介はシャケ弁当を開けて食べ始める。

理奈はペットボトルのお茶を飲む。

「…それで、何から話したほうがいいの？」

理奈は啓介に尋ねる。

「理奈は、どうして超能力者になつたんだ？」

【2 3】 底辺の抱いたパラノイア（後書き）

追記（2012年1月5日）

一部の文章を修正したり追加したりしました。
物語の流れは変わっていないので絶対に読み返す必要は特にないと
思います。

【2 4】 間からの手招き（前書き）

この物語は、ある程度の史実を織り交ぜながらも完全にこの現実世界とは完全に別の未来を歩んでいる別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家とかその他の固有名称で特定される全てのものとは、何の関係もありません。何も関係ありません。

つまり、この物語はフィクションです。

【2 4】闇からの手招き

「理奈は、どうして超能力者になつたんだ？」

啓介は目の前の幼馴染に質問をぶつけた。
話し合いの一一番最初のネタとしては重たいような気もするが、啓介は気になっていた。

勿論、自分以外の人間がどういう理由で契約したのかと言つ点も気になるが、あの善人の塊とも言えるような性格だった少女が何故こんな闇にまで墮ちていたのかが啓介は一番気になっていた。

「…ま、啓介も私の幼馴染だし…知る権利くらいはあるか」

理奈はふうと軽く息を吐くと悟ったような表情で口を開いた。両肘を膝の上に乗せ、顔の前で両指を組む。

「…啓介、私の家族構成覚えてくれてるかな？」「えつと…両親と弟とお前だつたよな」

「正解」

啓介はそこまで話して一つの可能性を導いてしまった。

啓介としてはハズレであつてほしかったのだが。

「五年前。それが私がこんな場所で生きている全ての根源よ」

世界は、神は、彼女に甘くなかったらしい。

「…」

「五年前、私の家族は私を除いて全員が殺された」

「（……クソが）」

啓介は神を恨んだ。

「五年前に姫路で起こつたテロ事件知ってる？」

「確か、日本で初めて起きた自爆テロ…だつたっけか？」

五年前、日本で初めて自爆テロが発生したことは歴史の教科書に

も記されている。

あの事件は世界中の先進国に大きな衝撃を与えた、その傷は今も残されている。

「同時多発の自爆テロ。…そりや、アメリカのあの事件よりは犠牲者数は少なかつたかもしけないけど、あの事件は沢山の人的心に傷を刻んだ」

理奈もそのうちの一人だ。

「犠牲者数は六百七人。その中に私の家族もいた。…そして私は負傷者九百三十一人の方よ」

「……」

啓介は自分を殴りたい衝動に駆られていた。

理奈にとつてもそんな凄惨な事件を思い出したくない筈に決まつているのに啓介は尋ねてしまった。

啓介は唇を噛んだ。

「私は全身を大火傷つていう重傷を負った。女性機能だつて死んだ」
家族を失うという苦痛だけでなく、女性として生きることができなくなつた苦痛。

病院のベットで呆然と過ごす日々を理奈は思い出していた。
「全てを失つて死にたくなつた。だけど、私は死ねなかつた。
…後は分かるでしょ？」

「…ああ」

理奈は求めたのだ。

復讐するための力を。

犯人を殺してから出ないと死ねないという思いが彼女を延命させた。

「そんな時、私の前にアイツが現われた。…私は迷わず契約した。自分の身体も元に戻せて、復讐することの出来る力を得ることが出来るんだもの」

復讐心が彼女をここまで醜くさせたのだ。

「（復讐心が悪いとは言わない。だけど…それが理由だったんだな）

「でも私はすぐに絶望したわ。だって、犯人が組織という存在だったのだから」

犯人の元に辿り着くには、権力や地位といったものが必要となることに理奈は気付いてしまったのだ。

それは彼女を絶望へと追い込んだ。

「それからしばらくして、私の前にとある超能力者たちが現われた」

啓介は黙つて話を聞く。

「その超能力者たちは私にこう言つたのよ」

『その復讐心、成就させたくないか?』

「私はすぐにその組織に入つた。私の復讐のための必要な地位と権力をその組織が用意してくれるつて分かつたから」

「…でも、おかしいと思わなかつたのかよ。たかが小娘の復讐に組織つて言う巨大な連中がタダで手を貸してくれるなんていうこと」

啓介は気になつた部分を質問する。

「そうね。…私も思つてたけど、その答えは簡単だつたわ」

理奈はその台詞の後に一拍置いてとある単語を口に出す

『知恵のリンクゴ』

「！」

その言葉は啓介にも聞き覚えがあつた。

「それは世界中の超能力者の所在や能力、未来を把握する存在。だから今、私達がここで会合していることも知恵のリンクゴには全てお見通し」

「…」

「人なのか機械なのかすらわからない謎の存在。それがこう予言していたらしいわ」

「梅理奈は最上位能力者の素質を秘めた存在である、つてね」

理奈は自嘲的な笑みを漏らす。

「全ての超能力者には知恵のリングが能力階級^{LEVEL}というモノをつけているの。言つてしまえば、強さの度合いね。…それは全部で七段階存在しているの。数字が大きければ大きいほど、その超能力者は強い」

つまり、理奈は能力階級^{LEVEL}の中における最高位のランクである『⁷』の超能力者だということになる。

啓介は目の前の少女の強さを信じることが出来なかつた。

「（確かにあの橋での戦闘はただならぬ強さを感じさせたけど…世界中の超能力者の中でもトップクラスの強さなのかよ…？）」

「一度も戦闘経験の無かつた素人にそんな予言が出るなんて普通は信じられないかもしだれだけど、その組織は信じて私を仲間に引き入れた」

「……他の組織よりも強い力を得ることによって組織の強大さを武器にしようとしたわけか」

「正解。私は道具にされたのよ。まあ、復讐さえ達成できればよかつたんだけどね。…最上位能力者は世界中に二十四人しか存在しない希少な存在。そうねえ…アフリカの巨星やグレート・ムガル、リージェント以上の価値があるんじゃない？」

最上位能力者は世界的に有名なダイヤモンド以上の価値を誇るらしい。

「…」

「最上位能力者の定義は“惑星規模の災害レベルの力を持つ”ことらしいからダイヤモンドなんぞと比較するのはそもそも間違いなんだけどね」

「惑星規模…」

スケールの大きい話だ、と啓介は思つ。

惑星規模の災害など隕石衝突くらいしか啓介には思いつかない。

「理奈の身体には、そんなに凄い力が眠つてるって言うのか…？」

勿論、目の前の少女の能力が“隕石を引き寄せる能力”ではないことくらい、啓介にも分かる。

では、それ以外で惑星規模の災害を引き起こせるほどの力とは一体何なのだろうか。

「私の持つ能力は【電光刹華】^{（ディエナーレ）}。電荷や電子を生み出す能力ね」

つまり、電気を操る能力ということになる。

「啓介の能力は組織からの報告によれば、【現実逃避】^{（ファンタジースタ）}っていう“触れた能力をコピーする能力”なんでしょう？」

「まあ そういうな」

啓介は自身の左手を見ながら話す。

「でも、同じカテゴリーの能力はコピーできないらしいし、左手以外じゃ能力を行使できない。しかも相手の能力を知覚していることが前提条件だからかなり不便な能力だな」

「そんなに制限がかかっているにも関わらず、二十四番目になつている辺り… その能力の本当の力が垣間見れるわね」

「……なあ、前からずっと気になつていたんだが… 二十四番目ってどういう意味だ？」

あの二人組からも不知火からも言われた言葉。

二十四番目が啓介の何を示しているのかが未だにわからないのだ。

「“二十四番目に最上位能力者になつた” っていう意味よ」

啓介は呆然とする。

理奈はそれを無視して知識だけを啓介の脳に送り込む。

「さつ キも言つたけど、最上位能力者は世界に二十四人しかいない。啓介はその二十四番目になつたっていうことよ」

「え…いや…でも」

「私、だつて疑問よ。戦闘経験が一回しかないド素人がどうして最上

LEVEL^{（レベル）}

位能力者なのか」

戦闘経験が一回、ということは先程の戦闘は含まれていないことになる。

「どの能力者も最初は全員が最下LEVEL1位能力者から始まる。最高位に引き上げるには血の滲む様な努力が必要なのよ？」

「理奈も努力したのか？」

「私は五回目の戦闘で最高位になつたけどね」

理奈の戦闘センスが良かつたからなのか能力の成長速度が速かつたからなのかはわからないが、それでも十分に異常と呼べる速度である。

「ともかく、一回の戦闘で最高位に引き上げられた存在は過去にもいない。だから啓介は注目されているのよ」

「……」

「さつきの話と繋がるけど、私だつて組織に入つた頃には注目されていた」

子供に戦略兵器以上の価値を見出すなんてこと、普通はあり得ないのだ。

「私は組織の有益になるように随分教育されたわ」

「教育？」

啓介はその言葉に不安を覚える。

「人を殺すための特訓だつたり、破壊工作するために必要な知識の勉強とか…色々ね」

「……」

「失望した？再会した幼馴染が大量殺人者で失望した？」

理奈が俯く。

「失望したでしょ？……私はもう、啓介の知っていた私じゃないのよ」

「……」

「そりや人を殺し始めていた頃は毎日うなされて食事も喉を通らないくらいに苦しんだ。殺人の重みを知った。けどね、今じゃ私は人

を殺しても何とも思わないのよ。復讐の時だってそうだった。私が一人で犯人達の組織に特攻して一人残らず血祭りに挙げてやつた時もそうだった。むしろ楽しいとさえ感じた。家族を奪つた奴らをこの手で殺せて嬉しかった」

「……」

啓介は理奈の姿を見ている。

「……復讐が終わつた後、私は罪の重さに耐え切れずに死のうとした。でもムリだった。死のうとすれば脳裏に殺していくつた奴等の最期の断末魔が響くのよ。それで私はあいつ等みたいになりたくないって、死にたくないって思つて踏みどどまるの。人の命奪つておいて随分と身勝手よね」

啓介に糾弾してほしい、という意味が込められていたかも知れないその吐露に啓介はしばらく黙つていた。

一人の人間として、理奈の友人として、幼馴染としてどういう風に声をかけてやればいいのかが彼にはわからないのだ。

下手すれば

だが、啓介はそれでも言葉を口に出す。

「俺になんて言つてほしいんだよ」

「え…？」

「俺に糾弾されたいのかよ？でも悪かったな。俺も既に人殺しなんだよ」

「え」

啓介は理奈に何も言わせないために休まずに台詞を言う。

「俺が四月に戦つたあの二人組だつて生きてるかどうかすら分からないんだぜ？任務失敗で始末されてるかもしれない。それにさつきの戦闘だつてそうだ。確かにトドメを刺したのはお前かも知れない。だけど、あの野郎をそこまで追い詰めたのは間違いなく俺だ。実行犯ではないにしろ、殺人に加担してるんだよ俺も」

「……」

「そりや、お前の罪とやらに比べたらちっぽけかもしけないけどよ

…人殺しは人殺し。…お前が糾弾されたいって言うのなら、善人に懺悔を聞いてもらひつつたな。同類に何を求めてんだよ」

「……」

「正当防衛だつていえればそれでお終いだけどな、俺達は高校生だぜ？正当防衛でも罪悪感は残るつづーの」

「……」

「…あと、お前の家族が亡くなつていたつていう事については俺も悲しい」

自分に仲良くしてくれていた人間を失うとどれだけ疎遠になつてもやはり悲しいという感情は生まれる。

「けど、俺はお前に後追い自殺されるともつと悲しい。多分、泣いて泣いて泣きまくると思つ。一度と社會に復帰できないくらいに泣くと思づ」

「…」

「お前は俺の一番の親友であると同時に一番俺のことを理解してくれている“他人”だ。だから俺はお前にじつやつて悲しまれていると辛くなる」

自分が最も信頼を置いている“他人”といえば、間違いなく理奈であると啓介は胸を張つて言える。

アリエルとも信頼関係を築いているが、やはり理奈との関係はもつと濃密なものだと啓介は思つてゐる。

理奈が初めて自分を理解してくれた存在であると同時に自分を正しく導き続けてくれた存在であることは啓介の心に強く残されている。

「だから、理奈には死んで欲しくない。俺を、悲しませないために他人を殺しても、生き続けていて欲しい」

「…」

「…俺がお前にいたいのはそれくらい」

啓介は理奈の顔を両手で掴んで自分に向かせる。

「……ありがとう」

「はいはい」

啓介はしばらく理奈の姿を見て黙っていたが、空気に耐えられなくなつたのか次の話題について口を開くことにした。

「…とにかくだな、理奈の経緯と最上位能力者についてはわかつた。ただ、聞きたいことがまだある」

「……何?」

「…理奈は、どうやって強くなつた?」

「…え?」

「放つておいてよろしいのですか?」

「何をだね?」

「…最上位能力者ですよ。しかも片方は未だにこの世界に堕ちてきていらない若者」

「大丈夫だ。放つておけ」

「しかし、二十四番目を巡る争いは既に起きています。我が陣営も他の組織との争奪戦で犠牲者を少なからず出していますし…」

「大丈夫だ。柏理奈が接触した以上、我々の陣営にあの少年は組み込まれることとなるだろう」

「……」

「柏理奈は間違ひなく、我々に反発してあの少年を逃がそうとするだろう」

「…彼女が離^リ反^{スル}ると?」

「その点はどうだろ? な。…まあ彼女も闇を知り過ぎているからこそ、逃げてもムダだという」とは理解しているかもしかんが「離^リ反^{スル}されて別組織に置われたら…」

「それはない。柏理奈は理解している。我々以外の組織に今更協力

を求めても無駄なことくらい」

「……」

「緊急クエストだ。告知しておけ」

「はい」

LEVEL7

「二人とも最上位能力者だ。^{LEVEL7}片方は素人だが、有している力は絶大だ。少年のほうは凡人で隊を組んで捕獲。梅理奈に関してはそうだな。超能力者を適当に集めて取り押さえろ」

「かしこまりました……」

【2 4】 間からの手招き（後書き）

追記（2012年1月5日）

一部の文章を修正したり追加したりしました。
物語の流れは変わっていないので絶対に読み返す必要は特にないと
思います。

【2 5】 注がれた毒（前書き）

この物語は、ある程度の史実を織り交ぜながらも完全にこの現実世界とは完全に別の未来を歩んでいる別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家とかその他の固有名称で特定される全てのものとは、何の関係もありません。何も関係ありません。

つまり、この物語はフィクションです。

【2 5】 注がれた毒

五月六日。

啓介は窓から入り込む朝日をぼんやりと皿の端に捉えながら朝食を食べていた。

「ぼーっとしてないで早く食べないと間に合わないわよ」

啓介の対面に座る理奈は箸で焼き魚をほぐしながら啓介に注意を促す。

「ああ…いや…悪いな」

「啓介が言い出したんだからね」

啓介と理奈のやり取りを啓介の隣で見つめるアリエルは不満げな顔をしていた。

ちなみに彼女はパンにバターを塗っている。

「いやー…今日の学校はサボり確定だな、と思つていただけだ」

「学校?…ああ、そういうや今日つて月曜日ね」

本日は月曜日。

啓介の本来の予定には明石海峡大橋で刺客とランデヴーしたり、旧友と再会したり、警察相手にカーチェイスしたりする予定など全く組み込まれていなかつたので啓介は不本意ながらにも学校をサボることとなつてしまつたのだ。

「風邪引いたとでも適当に言い訳して学校に連絡すれば?」

「あー…別にいいわ。今まで発売日にゲーム買うためにサボつたりとかしてたからどうせ言い訳しても通用しないと思つ」

啓介は茶碗を持ち上げてご飯を食べる。

「ふーん…」

ホテルの一階にあるレストランで三人は朝食を摂つてゐるのだが、平日の朝と言つこともあってかレストランに客はそれほどいない。チラホラとスース姿のサラリーマンや学生服姿の学生が見えるく

らいこである。

「さつすがは学生の街なだけはある」

啓介は友人同士で楽しそうに食事している学生を見て呟く。

「この街じや、親が共働きだから子供は外食で済ませることが多いのよ」

「自分で作ったほうが安く済むとは思つんだがな」

「甘やかされて育った学生も多いから出来ないやつも結構いるの。啓介とは違うんだってば」

「そーいうお前は?」

「……最低限は」

アリエルが啓介の隣で無言でパンを食べているが、啓介は田もくれない。

「今の日本政府の教育指針の問題点か……」

「そう言つけど、今の日本政府は旧日本政府に比べたらマシだと思つわよ?」

「俺達が生まれていない時代の政府なんてどうでも良いんだよ」

理奈は緑茶を飲む。

そして理奈は自分の腰に差している刀を見る。

「今の時代、一般市民でも真剣や銃を持つことが出来る。……どうしてだと思う?」

「知つてて俺に尋ねるのはどうかと思つぜ?」

武器所持法。

一〇〇八年に日本政府が作った法律であり、厳しい審査を潜り抜けた者だけが真剣や銃といった武器を持つ事が出来るという法律である。

当時、日本では第三次世界大戦後で物資が不足していたことと滅んだ国や土地から数多くの人間が不法入国同然に流れ込んできたこともあってか、治安は最低クラスにまで下がった。

外国から流れ込んだ人間たちは武器を有しており、日本の一般市民を襲つた。

戦後と言つこともあつて自衛隊もとい日本軍は壊滅状態、米軍の協力も得れない状態であつたので日本政府は刑法がある程度理解していること、絶対に犯罪には使用しないことを条件として一般市民にも武器を持たせることで一時的な治安維持を図つたのだ。

その後、新しい日本政府が軌道に乗り始めると自衛隊や在日米軍の力を借りて治安を大きく取り戻していったのでこの法律は徐々に不要となつていった。

しかし、現在の日本は世界で一番の大國であり、昔の日本と違つてほぼ単一民族ではなく、アメリカのように多様な人種が増えたので何が起ころかわからないという意味もあつてか現在でもこの法律は残されている。

「確かに、武器を持てるのって相当賢くないとダメだつたんじゃないのか？」

「刑法がある程度勉強すれば良いだけよ。まあ、私はそのテストに受かつたから……というよりも別の方で武器を持つているようなものだけど」

「……色々と大変だな。……それで、本題に入りたいんだけどよ」
啓介は味噌汁を音を立てて飲む。

「お前が俺に会わせたい人つて誰だ？」

「……こんな所に目的の人がいるのかよ？」

「そうね」

「……坂がしんどいよぉー……」

三人は神戸市中央区のある場所に来ていた。

この辺りは日本らしくない西洋風の建物が多く立ち並ぶ場所であり、観光客とおぼしき人間もチラホラ見られる。

三人は坂道を登る。

「啓介が言つたんでしょ？強くなりたいって

「いや…そりゃそうだが…」

「だから私を強くしてくれた人の元に向かってるんじゃないの」

「…師匠的存在？」

「そうね」

理奈は日本らしくない街並みを通り過ぎる。

啓介とアリエルは辺りを珍しそうに見回しながら理奈の後を追いかける。

五分ほどだらうか、しばらく歩き続けると西洋風の街並みから一転して日本風の街並みが現われ始める。

「なんでここいら辺はこうも「こちやんちやんなセンスなの、啓介？」

「確かに、さつきの西洋風の街並みは昔の日本が作つたもので、こつちの日本風の街並みは第二次世界大戦後に作られたものだつては聞いたことがある」

「ふーん…」

さらに坂を上り続けると理奈は急に止まる。

「人も理奈に追いつき、理奈のとなりで立ち止まる。すると理奈は右をむいて指差した。

大きな日本風の建物がそこにはあつた。

「ここよ」

「……道場？」

「まあ…そんなもんね」

理奈はそういうと門をくぐつて入る。

「人もその後に続く。

理奈の後に続いて啓介は石畳を通り抜ける。

そして理奈は縁側のほうへと進んでいく。

「おい、玄関から入らないのかよ？」

「いいのよ

理奈は砂利を踏みながら縁側のある場所へ向かうために角を曲がる。

そして、理奈は縁側に座る男性を見つけると声を出して自分の存在をアピールする。

「師匠！」

師匠と呼ばれた男性はゆっくりと理奈の方を向くとニカッと笑って手を振ってくれた。

そして口に咥えていたタバコを携帯灰皿に入れる。

「師匠、お久しぶりです」

「おー、久しぶりだな。何か用か？」

緑色の紐のように細い帯で薄い橙色の腰布を止めており、右肩部分だけはだけた青黒い着物を使った着流しスタイルという和風に自分がセンスを取り入れたかのような格好をした黒髪の男性は理奈の後ろにいる啓介を見てキヨトンとする。

「お前さんの彼氏か？」

「違います。幼馴染です」

即答で理奈は動搖せずに答える。

啓介はちょっとだけ凹んだ。

男性は少し笑うと啓介に右手を差し出した。

「俺は藤原信綱っていうただのしがない男さ。お前さんは？」

「あ、梅村啓介って言います」

啓介も右手を出して握手に応じる。

すると理奈は男性 信綱に向かつて言葉を並べ始める。

「師匠、早速ですがお願ひがあるんです」

「おーなんだなんだ？ 可愛い子の頼みなら聞くよ？」

「私の幼馴染を、強くしてやつてくれませんか？」

信綱は理奈に問いかける。

「どうして俺なんだ？この子を強くする理由がよくわからんが
…私達と同じ存在なんです」

「そりやわかつてゐる。後ろにいるあの女の子を見れば誰でもわかる
だ」

信綱はアリエルのことを顎で指差す。

「最近、契約したばかりなんです。それでまだどの組織にも捕まつ
ていません」

「つまり、お前さんの言い分としては“自分と同じような世界に墮
ちてほしくないから刺客を撃退し続けるために必要な力を身につけ
てもらいたい”ってか？」

「そうなります」

話を飲み込むのが早い男性だと啓介は感心する。

「まあ…お前の幼馴染だつてんなら稽古はつけてやつてもかまわん
が…俺の稽古は厳しいぞ？」

「…良いんですか？…なんか話がすんなり通り過ぎて怖いくらいな
んですけど」

啓介は信綱に確認を取る。

「大丈夫大丈夫。まあ、とにかく中に入れ」

信綱は部屋にあがると二人にも入室を促した。

「大変です！」
「どうした？」
「梅理奈が想定外の行動に！」
「なんだね？」

「梅理奈が梅村啓介を連れて藤原信綱の元を訪れたようです」

「ほう……」

「どうしますか？いくら我々とて藤原信綱を敵に回す」とは……」

「……いや、計画に問題は無い」

「しかし……」

「藤原信綱を敵に回すのは確かに拙い。しかしだな、あの男は利口だ。それに、一日かけて修行したところでどうにかなるみづな世界ではないのだぞ？」これは

「……」

「藤原邸を出た所を強襲しろ。梅理奈と梅村啓介を引き剥がせば簡単だ」

「しかし…もう一人はどうしますか？」

「梅村啓介が捕まれば抵抗しないだろう」

「…わかりました」

梅村啓介はブツブツ呟く。

「剣道なんですよねコレ？」

「いや、ウチは道場じゃないし、俺は剣道なんてできませんぞ？」

「…道理で防具が無いわけか

啓介は剣道着を着ていた。

しかし、その格好には小手や垂といった防具は全く装着されていない。

単に着物剣道着と袴を着けているだけである。

「床には何も無いし……」

床にマットとかひいてくれないの?と啓介は思つた。

「俺はただのならず者だぞ?剣道の師範でも何でもないからなー」

「…不安になつてきた」

「大丈夫だつてば。頑張りなさい」

理奈は啓介の背中を叩く。

アニメとかマンガとかでよく見られる剣道場のよつた部屋で四人はいた。

壁際にアリエルがちょこんと座つており、理奈はアリエルの隣で腕を組んで壁にもたれている。

信綱は先程と変わらない格好で啓介の対面に立つていた。

「とりあえず、お前の能力は聞いたとおり“触れた相手をコピーする能力”で良い訳だな?」

「は、はい。でも…なんでそれがこういう稽古に?」

「このスットコドッコイ。頭を使えー。お前の弱点は何だ?」

信綱は怒る気の無い声で啓介を罵る。

「えー…左手でしか能力を使えない?」

「他あー!」

「えー…持ち合わせている能力がないと一般人レベルの強さになつてしまふ?」

「そこだー!」

信綱は右手に持つた竹刀をブンと振つて右肩に乗せる。

「お前の弱点はズバリ“能力を持たない相手に弱い”ことだ」

全員が信綱を見ながら話を聞く。

「お前は能力を何一つコピーしていない状態だと一般人に毛が生えたレベルの強さだということだ。言つてしまえば、特殊部隊の隊員や軍隊の精銳軍人とかが相手だと負けるレベルだ

「確かに…」

ヤンキーやDQN程度ならば啓介でも簡単に打ちのめせるだろう。

弾丸に反応する反射神経なら不良の集団なんか敵ではない。

だが、戦闘のプロに集団で襲われると一溜まりも無いだろう。

「精銳軍人と一対一なら勝てる。だけど集団で襲われたらあつとう間にお前は死ぬ。…刺客が一人や二人組、超能力者だとは限らんぞ？」

「……」

「つまり、お前は能力に頼りきりなんだよ」

「確かにそうだよね…」

アリエルは信綱の話に感心したのかボソリと呟く。

「だから今から武器の使い方を教える」

「…え、でも武器って法律で…」

「いきなり素人に真剣を持たせるわけ無いだろー？最初は竹刀だよ

竹刀」

信綱は啓介の持つ竹刀を指差す。

「能力の力が弱い能力者でもそつやつて武器を持つたり鍛えたりして裏世界を生き残っている。お前もそうしないと刺客は討てないぞ？」

「？」

「でも…」

「別に殺すわけじゃない…。っていうか、お前も殺人に加担した罪がある。…今更人殺しなんて出来ませんなんていうなよ？」

「……」

「心配ないさ。たとえ、お前が超能力者を殺しても色々な組織が裏で手を回して公表はされない。組織側も困るからな。…だからお前が人を殺そうと罪は組織によつてもみ消される」

「……」

「それに、大切な存在を守るために血でも何でも被つてみせろ」

「…………はい」

啓介は両手で竹刀を握り締める。

「そんじゃまあー……最初は…“俺を動かしてみる”」

「？」

啓介は頭にはてなを浮かばせる。

信綱はニヤリと笑いながら説明を始める。

「俺をこの場から一ミリでも動かしてみろ。超能力を使わないのならどんな方法でもいいぞ？」

信綱はそういうと右肩から竹刀を降ろす。

啓介は深呼吸をすると真剣な目つきで信綱を見据える。

「（あの理奈を鍛え上げた人だ。絶対に強い。っていうか滅茶苦茶強いバズ）」

あの橋での理奈の剣術を見ていれば啓介にだってそれくらいは理解できる。

啓介は剣道のやり方を知らない。

だから竹刀を正しく振る方法を知らない。

完全にアニメやマンガの見様見真似だ。

「…ッ！」

啓介は脚に力を入れて全力で信綱に接近する。

そして最短の動きで両手の力を使って信綱の左脇に竹刀を叩き込もうとした。

「はい失敗ー」

信綱の暢気な声が聞こえてきた時には遅かった。

啓介の左頬に信綱の竹刀が叩き込まれていた。

啓介は竹刀の威力で大きく吹き飛ばされ、壁に叩きつけられる。というか壁を突き破つて吹き飛ばされた。

「啓介！？」

アリエルの驚きが含まれた叫び声が聞こえる。

信綱はぶんやりと啓介が突き抜けた壁を眺める。

「（流石は師匠…）」

理奈は信綱の足元を見る。

全く足を使わずに右手の力だけで啓介をそこまで吹き飛ばすと

いう芸当に理奈は恐れと尊敬を抱いた。

「ぐつ……」

啓介が苦痛に顔を歪めながら壁から現われる。

頭から血が流れ、左手は変な方向に曲がっていた。
左頬は青くなっている。

「痛つてえ

「スジマセン。ナメ

「スンマセン。せめて普通の剣道レベルに手加減してほしいんですけど…」

殺し合ひの練習だそ……これからいせんとお前も才覚出せないと

10

啓介は右手だけで竹刀を構える

「シシ二二一」

第一回

「おおあら」

右手を使つて

「はい残念」

今度は顎を打ち上げられ、天井に叩きつけられて床に落ちる

皆介が瘤のもの三つはのがれを回る

「ツ
ウウ！
痛ツ

今のは顎だつたから流石に手加減したんだがな」

(この木に三加添の力があるが、どうか……)

「左手が」

先程折れた左手の骨が再生を始めているのだ。

普通の攻撃だからな。ある程度の怪我や痛みは事故修復しちまう

「痛みが消えるなら良かつたんですけどね」

痛みが消えるなら良かつたんですけどね……

啓介は右手を使って立ち上がる。

「ほらほら、もつと来い」

「ツ…つおおおおおお…」

啓介は再び信綱の元へ接近する。

「はいはい頑張れー」

啓介は右手で竹刀を使って信綱の脚を狙う。

「はいはい頑張れー」

左から信綱の竹刀が飛んでくる。

しかし、啓介は修復中の左手を使って竹刀の攻撃を受け止める。

「（ぐッ…！…）」

間違いなく繋がりかけていた骨が折れた。

しかも今度は半分くらい粉々に砕けたに違いない。

しかし啓介は痛みに耐えて右手に全力を込めて信綱の脚を狙った。

「惜しかつたぞー」

次の瞬間、啓介は右の壁に吹き飛んでいた。
壁を突き破っている。

アリエルと理奈に当たらなかつたのは信綱の配慮か。

「（マジ…かよ…）」

何時の間に竹刀を左手に持ち替えた？

啓介はボンヤリと痛みに耐えながら考えた。

頭を強く打ち付けてしまつたのか首が上手く動かない。

首の骨が折れたかもしれないというのに神経は正常に動いている。

「（本当に人間じゃなくなつたんだな…）」

「ほらほらー、早くしろよ？」

「ぐつ…！」

啓介は再び立ち上がる。

そして信綱を睨む。

「…いい田してゐじやないか」

「つおおおおおお…！」

「…それで、私に何を頼みたいのかしら？」

月明かりのような光が差し込む暗い部屋に、その少女はいた。
少女は月明かりの見える窓を眺めている。

「…緊急クエストです」

「内容は？」

「柏理奈の足止めをお願いしたい」

「…」

「勿論、タダとは言いません」

「…まあ、別に報酬云々はどうでもいいのだけれど」

少女はクスリと笑う。

「あの女とは一度戦つてみたいと思つてたし、別に構わないわよ」

「啓介！もうやめてよ！」

アリエルは理奈に押さえつけられながら叫んだ。

「やめなさい！啓介は自分の意志で戦つてるのよ！？」

理奈は羽交い絞めでアリエルを止めながら啓介と信綱を見た。

「午前中に三時間。休憩に一時間。午後に五時間か…。そろそろ終わりにするか」

「ぜえー……はあー…………」

啓介は膝と右肘を突いて床に跪いていた。

「（つよ…し…）」

体全身がボロボロで啓介の着ている剣道着は既に血で赤く染まっていた。

「超能力者は通常攻撃じゃ簡単に死はない。逆に言えば、苦しまないと死ねないっていう事だ」

信綱は息を吐くと啓介を見る。

「今日はコレでお終いな。……まあ、そう落ち込むなよ。理奈だつてこれクリアするのに三回はかかったし」

「（マジ…かよ）」

信綱は竹刀を壁に放り投げると倒れている啓介に肩を貸す。

「よいしょっと…。ところで理奈よ、今日はどうするんだ？」

「あー……今日は帰ります。とりあえず、ホテルにまた泊まって…また明日来ます」

「そつかー。じゃーおつかれん」

信綱は啓介を理奈に預けると部屋の奥へと去っていく。

啓介はしばらく死にそうな声を出しながら呼吸していたが、やがて傷が修復してきているのか正常に戻り始めた。

「…啓介、大丈夫？」

「あー…今にも死にそうだ」

アリエルの心配そうな声に啓介は呟くような声で答える。

「ただ…反射神経はすっげー良くなつたと思う」

「そうね。最後らへんは師匠の攻撃かわしたり竹刀でガードしたりしてたし」

「けどよ…竹刀で竹刀をへし折るとかマジねえわ…」

啓介は理奈の持っていたタオルで汗と血を拭ぐ。

そしてアリエルのそばに置いていた服を取る。

理奈とアリエルはくるりと回って後ろを向く。

理奈は庭にあるしおどしを眺めながら啓介に質問をする。

「啓介さ、今日一日殺し合ひの模擬練習して…どう思つた?」

「俺は命を狙われているんだなってより一層感じた」

「世界に二十四人しかいない最上位能力者の一人だし…放つておくには危険すぎる存在だと認知されている。しかも、世界で十三体しか確認されていない暗黒種の一つ…」

「俺だけを守るならともかく、俺の周りの人間を守るためにも…も

つと強くならないとなつて思つたよ」

「そう…」

啓介の「もういいぞ」という声に一人は振り返る。

「…それじゃ、今日はもう帰ろつか」

「そうだな。…しばらく学校はサボりかあ…」

「」の稽古が終われば少なくとも刺客には対抗できると思つからそれまでは我慢して

「うげえー…」

三人は縁側に置いていた靴を履くと砂利を踏んで門へと向かう。時刻は既に夜。

夕日も完全に沈んだ午後七時。
辺りを照らすのは街灯だけ。

「そういう理奈つて学校どうしてんの?」

「書類上は市内の高校に通つてるんだけどねえ…」
「行つてないのかよ」

「まあね」

三人は何も知らずに外に出る。

「まあ、しばらくは私がお金出しし、ホテル暮らしね
「げえー…服とかどうすんだよ」

「お金出してあげるから」

「ううー…」

「プライドとか捨てなよ」

「アリエルまでそんなこと言うか!」

三人は楽しそうに話しながら坂道を降りる。

周りに人は誰もない。

静かな街を三人は降りる。

「今日の晩御飯は何がいい?」

「寿司!寿司がいい!」

「アレ、お前この前中華料理とか言つてなかつたっけ?」

「今は寿司が良いです!」

「変わるの早いなオイ」

「回転寿司にでも行く?」

「ソウデスネ…」

「アレ、啓介つて魚苦手だつたつけ?」

「いや、理奈…。俺は崩壊しつつあるプライドに関して

「

「ちょっとそここの少年少女、良いかな?」

悪魔の手は何も知らない幸せな人間にまで及んだ。

梅村啓介は、後悔するだろう。

自分が超能力者になつたことを。

自分が大切な人を守れなかつたことを。

自分が強くなれなかつたことを。

【2 6】 そして誰もいなくなるのか？（前書き）

この物語は、ある程度の史実を織り交ぜながらも完全にこの現実世界とは完全に別の未来を歩んでいる別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家とかその他固有名称で特定される全てのものとは、何の関係もありません。何も関係ありません。

つまり、この物語はフィクションです。

【2 6】 そして誰もいなくなるのか？

昔、啓介はアリエルに聞いたことがあった。

「アリエル、お前はかつて俺に新しい運命は自分で造つていくものだと言つたよな」

「…言つたけど？」

「じゃ、超能力つて…俺に何をもたらしてくれるんだ？」

「運命を作るための道具…みたいなものかな。ゲームとかで言うその主人公の武器みたいな？運命をリセットさせる能力と運命を創造する力を持っているけど、あくまでも主体はその人間であつてその人間次第で超能力も変わる…というか何というか」

「超能力は言つてしまえば、俺が運命を塗り替える際に発生した副産物…みたいなものだつてことか？」

「そうとも言えるし言えないね…超能力を身に宿した時点で運命はリセットされる。そこから超能力を使って運命を創つていくか、使わざして運命を創つていくかはその人次第だから」

「…」

「超能力は、その人が運命を切り開きたいと願えば期待に応えてくれる。だけど、世界には敵わないものがある」

「？」

「どれだけ啓介が運命を切り開きたいと願つてもまだ啓介の超能力は発展途上。…暗黒種ダクラタだと言つても力はまだ弱いわけ」

「そうだな」

「…世界にはね、神が作ったプログラムという物が存在するんだ」「プログラム？」

「神を冒涜した者を吊るし上げるプログラムが存在するわけだよ」

「…」

「つまり、世界は、神は、超能力を持った人間に対しては容赦しな

い。常に厳しい現実を突きつけられ続けることになる

「…」

「でも、神の人形である」と止めた先には何があると想つ。」

「…自由か？」

「そう、自由だよ。…自分で自分の未来を作る」とはまわしく自由の極みじやないか

「確かに一理あるな」

「啓介は悪魔の誘惑に溺れた。だからといってそれが悪とは限らないんだよ。悪魔との契約でも使い様によつては幸せをもたらすでしょ？」

「まあ、そうだな」

「…よつには、考え方だよ。…神の下僕であるつが、悪魔の僕であろうが…その人が正しいと思つたことを信じて自分の信じた道を進んでいけば…その人にとつての幸せが訪れるつてワケ

「…なんか胡散臭いな」

「そういうモノだよ。悪魔は何時でも煙を纏つてゐるからね

「…やれやれ

「…」

「…どちらまで？」

啓介は田の前の男性に尋ねる。

「いやいや。ただのしがない警察だよ

「…」

アリエルは啓介の腕にしがみ付いている。理奈は左手で日本刀の柄の部分に触れる。

「明石海峡大橋の爆破事件の件と無免許運転、公務執行妨害などの罪で署にご同行を願いたいのですが？」

男が啓介の右手を掴む。

۱۵۹

「わあ、ついで来たから、おやじ！」

「ま、待て！」

「さあ！」

男は啓介の腕をぐいっと引っ張つた。

「待ちなさい」

男はべしゃりと尻餅をつく。

「…は？」

男は自身の左手を見な

手首から先が無かった

卷之二

瑪麗口占詩一

支外用屬は

スケルトン

...回し者ね

いや待ってくれ！！

理奈は男の顔面を掴む

目的は大方分かるけど…やつぱり啓介の回収?』

۱۰

ま、待つてくれ！！俺は

「つるさー。喋るな

理奈は手から放つた電撃で男性の身体を焼く。

男は一瞬で髪の毛が総毛立ち、目、鼻と言わず体中の穴と言つ穴から青白い光を

吹いて瞬時に黒こげになる。

理奈は黒焦げの死体から手を離すと啓介の方を向く。

「啓介、逃げるわよ！」

「え？ いや、でも」

「いいから！－」

理奈は啓介の左手を握ると引っ張つて走り出す。

アリエルも慌てて走り出す。

啓介は遠ざかっていく黒焦げの死体を見ながら理奈に尋ねる。

「い、いいのかよ！？ 後始末とか！」

「そんなもん、どうにでもなるわよ！ それよりも今は逃げることに集中して！」

三人は坂道を走つて降りる。

すると路地裏や建物の屋根の上から武装した人間が次々と現われ、集団が形成されていく。

「ちっ、全員が武装兵士か！」

理奈は刀を一本抜くと右手で持つ。

「啓介！ 離れるんじゃないわよ！ アイツの狙いはアンタだから！－！」

「え、えええええええ！？」

理奈は啓介の前に飛び出ると集団の先頭部分へと突っ込んでいく。斧を持った屈強な男の腕を斬り落として腹を蹴り飛ばす。そして男の後ろにいる武装兵士達をまとめて吹き飛ばす。

「ちいっ！」

理奈は上半身を後ろに退けて横から降つてきた日本刀をかわすと日本刀で攻撃してきた男に左指を指差す。

「くたばれオラアツ！－！」

人間を一瞬で葬る電撃が槍のように放たれ、男は感電しながら吹き飛ばされる。

そして上から降つてきたハンマーを理奈は右に転がつてよけようと飛ばされる。

刀に電撃を溜めて集団へ向かって電撃を放つ。

「どきなさい！」

集団は抵抗も出来ずに電撃のソードビームに飲み込まれ、黒焦げになっていく。

しかしそれでも武装兵士は次から次に湧いて来て三人の行く手を阻む。

「啓介、後ろ！」

理奈は応戦しながら後ろを振り返つて啓介に注意する。

啓介はその声で後ろを振り向く。

「やつべえ！－！」

啓介はアリエルを突き飛ばして自身も尻餅をつくよにして後ろからきた斧をかわす。

そしてすぐに立ち上がると男に向かって突っ込む。

「クソがあ！－！」

右手の指に刃を生やすと斧を振つた男の顔面に掌で殴るようにを叩き込む。

「ぐあああ！－！」

男は顔を左手で押さえながら右手で斧を使って啓介の首を狙掛け攻撃してくる。

啓介は身体を屈めて回避すると左手と右足を軸にして伸ばした左足を使って男の足を払う。

啓介は倒れた男の首を能力を発動した状態の右手で掴んで力を入れて握つた。

男はしばらく抵抗していたがやがて力が失われていったように動かなくなつた。

「アリエル！攻撃に当たらないように逃げる－！」

「どうしてだ！」

「アリエルだけを逃がしたら間違いなく別働部隊に捕獲され

啓介は理奈に怒鳴る。

「ここでアリエルだけを逃がしたら間違いなく別働部隊に捕獲され

る！ そうなつたらゲームオーバー！」

「チツ！」

理奈も啓介も攻撃をかわしながら話し合つ。理奈は目の前にいた女の胸を切り裂くとバツクステップで啓介の元へ戻る。

二人とも息が乱れている。

「こんだけの大群に、能力を持たない武装兵士。…あきらかに啓介の弱点を狙つてきてるわね」

「でもお前がいるんだし、問題はなくね？」

「そうかもね」

理奈は刀を構える。

啓介はファイティングポーズを取る。

すると武装兵士達は少しだけ後ずさる。

「アンタたち、私の存在を忘れてたのかしら？」

「……」

「答えなさい！」

「……」

武装兵士達は何も答えない。

理奈は苛立ちを覚える。

しかし、彼女の苛立ちは聞いたことも無い声にかき消された。

『勿論、覚えていますよ』

啓介は辺りを見回す。

女性： 同年代くらいの女性の声が何処からか聞こえる。

理奈は武装兵士の集団を睨み続ける。

『 柏理奈。我々「スレイヤーズギルド」に所属する世界で一十四人しか存在しない最上位能力者にして、電撃系能力の中で最強と呼ばれる【電光剝華】を宿す者』

「……誰？ 私はアンタの声なんて聞いたこないんだけど」

少女の声は武装兵士の中から聞こえる。

すると武装兵士が道を開けるようにして奥から来る何者かを三人の前に通す。

その者は普通の武装兵士に見えた。

バイクのヘルメットのように強固な頭部防具を装着し、肩にはマシンガンをかけた国連軍のような武装をした男だった。

その男は両手に收まる程度の小さなスピーカーを持っていた。

この声は、ここから聞こえているようだつた。

『初めまして、椿理奈。私が声を他者に聞かせるということ自体、滅多に無いことですので…アナタが私を知らないのも無理はないでしょ』

「引きこもりか。…誰？」

『名前など言わなくともすぐに理解すると思いますよ』

「あ？」

『…梅村啓介さん』

「ちょっと私の話を聞きなさいよ…」

スピーカーからの声は理奈から啓介に話し相手を変える。

『アナタは野放しにするには非常に危険な存在なのです。確かにアナタの大切な人をも守りたいという意志は非常に素晴らしいものだと思います。しかし、世界は子供の我慢を容認するほど甘くもないのですよ』

「…同じ年齢くらいのガキに言われてもな」

啓介は警戒心を露にして声の相手と会話を繰り広げる。

『そうですね。私もアナタ達と同じ年です。…しかし、私とアナタでは知っている世界の闇が違います。アナタがのほほんと平和に暮らしている間、私は世界の裏で数多くの闇を見てきました。生きた時間は同じでも密度は違う。…精神年齢が違うのですよ』

「つるせえ、ババア」

『…全くですわ。…まあ、話はここまでにしましょ。我々としてもこれ以上駒が減るのは見過ごせませんので、私が直接お相手しよ

うと思います』

理奈は左手で電撃を溜める。

『それでは梅村啓介さん、アリエルさん、生きていたらまた後で会いましょう。武装兵士達には梅村啓介さんの相手をしていただきますね』

スピーカーから音がプツツといつて消える。

それと同時だった。

刀が地面上にカシャンと音を立てて落ちた。

「理奈！－！」

啓介の叫び声と同時に武装兵士達は動き出す。

「ツ！－！」

全員が武器を構え、啓介に向かつて突撃していく。

「啓介え！－！」

「畜生オオオオオオオオオオオオ！－！－！」

「…は？」

理奈は目の前の光景が突然切り替わったことに反応できなかつた。

「え？あ？…ええ？」

理奈は目を大きく見開いて混乱する。

先程まで自分は啓介やアリエルと共にいたハズだったのに

「どう?...」

「お気に召しましたか?」

「...」

理奈は後ろから聞こえた声に反応して大きく声のした方向とは逆の方向に飛び跳ねる。

ここには山の中の森に囲まれた月の良く見える何処か。
声は暗い森の中から聞こえてきた。

「...やつきの声の」

「言つたでしょ?私が直々にお相手すると」

草を踏む音が聞こえる。

理奈は自分の右手を見る。

先程まで持っていた日本刀が無くなっていた。
代わりにもう一本の日本刀を抜く。

「綺麗な場所でしょ?私のお気に入りの場所なんです」

「...」

「まあ、美的センスの無いアナタには理解できないでしょ?が
「チツ!」

理奈は声の方向に向かつて電撃で形成した槍を打ち込む。
電撃が青白い光を伴つてバチバチツ!と音を立てて森に吸い込まれる。

「全く...森が火事になつたらどうするんですか?」

「!?」

理奈の後ろから声が聞こえた。

理奈は慌てて後ろを振り向く。

「アナタは確かに強いです。圧倒的火力と驚異的な応用性を持ち合
わせた存在。...私よりは十分に強いです。市内での戦闘といった人

工物に囲まれたエリアでの戦闘ならば一国の軍隊相手でも余裕で勝利を収めることが出来るでしょう。しかし…」

少女の声はそこで溜めた。

「アナタに最適の場所があるよつこ、私にも最適の場所があるのです」

理奈の左頬に誰かの手が触れる。

「ツー！？？」

理奈はその手を掻きむしとするが手はすぐに消える。

「…？」

理奈は辺りを見回して警戒する。

「私は臆病なものとして…姿を見せたくないのですよ」

「幽霊…？」

「まさか…私はちゃんと生きていますよ？」

「…」

「まあ、話はここまでです。これもクエストですからね。全力でいかせてもらいますよ」

「！」

理奈は刀を構える。

そして風の音しか聞こえなくなつた辺りを警戒する。

「…………」

「残念」

理奈は急に左手がガクンと下がつたことに驚き、左手を見る。

「鉄球…？」

鉄球のつけられた拘束具が理奈の左手に装着されていた。理奈が左手を上げようとするが、鉄球はびくともしない。(私の力で持ち上げられないってコトは…数百キロぐらいことはある

つてこと?」

超能力者である理奈と言えども、このクラスの重さは持ち上げられないらしい。

「フフフ… 気に入つてもらえましたか?」

「私はマゾヒストじゃないからこんなことされても喜ばないわよ?」

「残念です」

次の瞬間、右手が重たくなる。

「チイツ!!」

理奈は舌打ちをする。

右手にも同じ拘束具が装着されていた。

「…アンタ、テレポーターね?」

薄々感づいていたのか、理奈は呟く。

「ご名答。私はテレポート能力を持つた臆病な超能力者です」

「嘘つけ。… これだけデカイ質量のモノを目視外からテレポートさせるなんて強大な能力じゃないとムリに決まってるでしょーが…」
理奈は動こうともがく。

「（早く啓介の元に向かわないと… …）」

「そうですね。確かに私も世間では“世界最強の空間移動能力者”とは呼ばれています」

「世界最強の空間移動……」

理奈には心当たりがあつた。

理奈はハッと気がつくと声のする方向を赤子なら視線だけで射殺せそうなくらいの殺気を込めて睨む。

「アナタの考えるとおりですよ」

理奈は自分の運命を激しく呪つた。

「私の名前は双風 瑞希。^{ふたかぜ}^{みずき}アナタと同じ最上位能力者の化け物です」

理奈は歯噛みして悔しがつた。

「（上層部^{じょうじゆぶ}！私と同クラスのヤツを莫大な金額で動員させてまで…

啓介が欲しい訳！？」

最上位能力者を緊急クエストで動員させる際、前払いとして数千万、後払いで数億という莫大な金が動く。

それを知っている理奈からすれば目の前の状況はあり得ないとしか思えなかつた。

「（たかが最上位能力者一人を回収するだけに数億もの金を動かすの！？あり得ない…。過去の記録でもそんな莫大な金が動いたことは無いのに…）」

理奈の両足に拘束具が装着される。

「残念ですが、アナタがいくら拘束具に電気を送つても意味はありませんよ」

ギルドの用意したものが、理奈の対策をしていないはずが無いのだ。

「畜生……！」

理奈は涙を流して絶望する。

「（啓介…！…）」

「大丈夫です。ギルドはまだアナタに使用価値が残っていると思っていますし、ギルドは彼も手懐けたいのですよ。…アナタはこのまま回収させてもらいますが、自殺してはいけませんよ？」

「……」

「アナタという防波堤がなくなれば、彼は裏の世界で誰にも守つてもらえずにすぐに死んでしまいます。…アナタの最後の希望を見捨てるのですか？」

「ツ！」

何も知らない間に、と理奈は叫びたかつた。

「アナタがギルドの言つとおりに動かない限り、彼は死んでしまうでしょう。その逆もです。…彼も賢いですから、自分が従わなければ、アナタが死ぬと理解するでしょう」

「ツ！」

瑞希は理奈の背中の上に現われ、理奈の背中に腰掛ける。

理奈の頭は地面に擦り付けられる。

「ここで、電撃を使って私を殺しても…ムダですよ。私を殺せば、アナタと彼の命の保障はありませんよ?」

「言つことを聞かない兵器は壊すに限る。」

理奈はその言葉を思い出した。

「アナタと彼を組織から放り出して別組織に奪われるくらいなら、殺して解体してしまったほうが楽でしょう」

理奈は抵抗をやめる。

屈辱的な敗北だった。

「…すぐにでもこの女の命を奪つてやりたかったが、啓介のことを考えると理奈は出来なかつた。」

瑞希は満月を見上げる。

「…そろそろ、あちらも回収が完了した頃でしょう。…武装兵士の死者数に応じて私の報酬が減つてしまつのであまり殺してもらいたくは無かつたんですけど…」

「…………」

理奈は音を殺して泣き続ける。

「アナタは第十七位。私は第十一位。…序列が全てとはいいませんが、力の差は歴然です」

「…………」

「さあ、絶望しなさい。そして、自分の運命を呪いなさい」

五月六日。

平和な世界に生きる一般人からすれば、いつもと代わりの無い一日だった。

しかし、今日は一人の少女が絶望した日であり、一人の少年が光の当たらない世界へと墮ちた日であった。

【2 7】 瓦礫の上のダンス（前書き）

この物語は、ある程度の史実を織り交ぜながらも完全にこの現実世界とは完全に別の未来を歩んでいる別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家とかその他の固有名称で特定される全てのものとは、何の関係もありません。何も関係ありません。

つまり、この物語はフィクションです。

【2 7】 瓦礫の上のダンス

五月十一日。

梅村葵は、学生寮の自室のベットに寝転がっていた。

過度な装飾を禁じられているので、部屋自体は少し装飾を着けただけの西洋風の部屋だった。

「……」

葵は天井を眺めるようにして左手の携帯電話の画面を見る。着信履歴は自身の兄である啓介の携帯電話と自宅の電話番号で占められていた。

「…何処行つたの?」

四日前に自分の出身地の中学校に進学した友人からメールが着た。

「(『葵のお兄さん、なんで退学したの?』…か)」

葵の友人の兄は啓介と同じ高校に通つており、現在のクラスが同じだ。

いくら交流が無いといつても、いきなり退学すれば話題になる。「(携帯電話にかけても解約されている…。自宅には昨日行つたけど誰もいない。兄さんや姉さんと連絡取ろうとも、いつも非通知であつちから一方的にかけて来るだけだからムリ)」

葵は独りになってしまった。

そう考えると少しだけ涙が出た。

「(…置いていかないつて約束してくれたのに)」

両親に逝かれ、兄や姉は出稼ぎのために出て行つてしまつた。自分を世話をしてくれたのは啓介だけ。

苛められ続けて友達もいない兄だったが、葵は尊敬していた。

「(ずっと一緒にいてくれる…か)」

葵は涙腺が緩むのを感じた。

梅村葵は普通の中学生一年生である。

いや、容姿が美しいことと頭脳明晰運動神経抜群で社交性も十分
といつ神様に愛されたとでも言つべき才能を多く持つといつ点は普
通の中学生と大いに違うかも知れないが。

とにかく彼女は普通の中学生のつもりだった。

彼女は友人を作り、平和に普通の中学生として暮らしたかった。

しかし、両親がいないという家庭の事情も見方を変えれば、悲劇
のヒロインとして人気を集め、兄や姉が自分を育てるために出稼ぎ
に出ているので会えないという事情も『流石は葵さんのお兄様とお
姉様、素晴らしいですね』といつ風に変換されてもではやされる。

自身の所属するテニス部でも実力で一年の時から部長の職について
ている。

テストの点数も学年で常に十番以内。

絵画や書道で賞を貰つたことだつて小学生時代から何度もあり、
それらも彼女が特別だということを周りに強く意識させることとな
つた。

それらのプレッシャーは彼女を特別のままにしようとする。

だから彼女は周囲の期待に応えるためにも自身の才能を磨き続けたし、努力もした。

そうすれば、自分の心の渴きを満たしてくれる存在が現われるかもしれないと思って

しかし、それでも彼女の心は満たされなかつた。

普通でありたい、対等に見てくれる存在がほしい、等身大の私を見てほしいという心の飢えは誰も満たしてくれなかつた。

そんな彼女の努力を一番理解してくれていたのは兄である啓介だつた。

だから葵は啓介が好きだつた。

家族と言つ、兄妹と言つ枠を超えているのかは不明確だつたが、葵は啓介を尊敬していたし、自分を守ってくれる存在だと信じて疑わなかつた。

葵は兄に褒めて貰うためにより一層努力するよつになつた。

自分のためではなく、兄の誇れる妹となるために今は努力をしていりのだ。

自身の心の渴きを満たしてくれる存在など、兄以外にはいない。

彼女はそう結論付けていた。

しかし、今回のこの結末は彼女の心の渴きを再発させた。

何故、兄が急に消えてしまったのか。

もしかして自分に愛想を尽かしてしまったのではないか。

彼女は悩みに悩んだ。

どうすれば、兄は戻ってきてくれるのか必死に考えた。

しかし、彼女を救えるもの何処にも存在しなかった。

彼女の敬愛していた兄、梅村啓介は

「…そう。それで？」

双風瑞希は左指の爪にマニキュアを塗りながら目の前の巨大な薄型テレビに返事する。

画面には『SOUND ONLY』の文字。

テレビ電話の意味が無いような気もするが、向こういつもちらりも顔は晒したくないらしい。

『あの後、梅村啓介も桜理奈も無事に収容完了しました。桜理奈には鎮静剤を、梅村啓介には麻酔を打つて一人とも昏睡状態にさせていました』

「ふうん…」

興味なさげに瑞希は返事する。

『梅理奈は現在も牢獄で拘束中ですが、梅村啓介とはベットに拘束したまま既に接触を始めています』

「大変ねえー」

『墮天使も梅村啓介の返答が出るまでは牢獄に軟禁しています』

「悪魔にしちゃ、中々人懐っこそうな子だつたわねー」

『あと、梅村啓介に関する証拠の隠滅も既に終了しており、彼の家族に関しては…』

「可哀想じやない。記憶ぐらい残しておいてあげたら?』

『上層部から“保留”扱いとなりました』

「彼を引き込むための枷にするつもりか…。相変わらず、やる事えげつないわね」

瑞希はちつともそつ思つていかない口調でテレビの向こう側を批難する。

『仕事ですので』

「相変わらず老紳士たちの玩具か…。神の人形から逃れたら今度は老人たちの玩具…。人生つて最低ね」

男性は瑞希の咳きに対しても言わなかつた。

『契約通り、貴女の口座には報酬を振り込んでおきました』

「はいはいー。お金なんて使い道あまりないんだけどなー…」

瑞希は壁に設置している鏡を見る。

西洋風の高級ホテルのスイートルームのような暖色に包まれた部屋と彼女の姿がそこには映つている。

自身の長い茶色のフワフワとした髪を見る。

次にイスに座つて足をテーブルの上に乗せている自分の身体を見

る。

「…」

『……どうかなさいましたか?』

画面の向こう側から二十代前半の青年のような声が聞こえてくる。

「ねえ、アナタって最上位能力者についてどう思つかしら?」

『はあ……・?』

「ああ、別に私のこと気にしなくとも構わないわ。アナタの思つて
いる通りに言つてちょうだいな」

瑞希は鏡を見ながら返事する。

画面の向こうの男性はしばらく黙っていたが、答えを出したのか
声が聞こえてきた。

『……人間の身でありますながら人間以上の力を求めた化け物……でし
ょうか』

「中々の回答ね」

『はあ……』

『……最上位能力者は、“人外魔境の住人”……核兵器以上の戦略価
値があるとされる存在。惑星規模の自然災害に匹敵するレベル。世
界中の軍隊を相手にしても生き残るレベル。……どうしてそこまでの
過ぎた力を求めるのか知つてるかしら?』

『……いえ』

男性は遠慮がちに返答する。

『答えは簡単。……最上位能力者となつた人物は契約前はほとんどが
力の弱い社会的弱者だったからよ』

『?』

「憎しみは、力への渴望は、神への冒涜は超能力に力を与え、人間
を成長させるのよ?……勿論、他のランク下の超能力者たちも憎しみ
は持つてゐるでしようけど……」

瑞希はふうと息を吐いて指にマニキュアを塗り終える。

そしてテーブルに置いてある赤ワインのボトルを取る。

『私達は、神なんて信じていない。信じるのは自分の信念だけ。
自分が正しいと思つたことをやり遂げる。その為に力を求め続けた
結果が最上位能力者であるというだけ』

『……他の超能力者たちも自分の信念を信じていると思いますが
「目標が違うのよ」』

『？』

瑞希はテーブルに置いていたグラスにワインを注ぐ。

「大切な人を守りたい、家族を守りたい、自分が幸せになりたい、お金持ちになりたいなんていうレベルの目標を達成させるための信念じゃ、超能力は成長しない」

『目標が大きい程、それを達成させようととして力が成長するというわけですか？』

「…まあ、そんなところでしょうね。まあ、もつとも目標が小さくても信念がしつかりしていれば、高位能力者になるパターンも極稀にあるのだけれど」

『成程。…では、アナタは何を目標として、生きてきたのですか？』

「……忘れたわ。もう十年近くも前のことだし」

そう言つと瑞希はワインを飲む。

『スマセン…』

「いや、別に謝る必要はないわよ？触れてはいけない話題だとそういうこ^うう意味じゃないから。本当に忘れただけ」

瑞希は窓の外を眺める。

真つ暗闇。

街のネオンだけが暗闇の中で輝いている。

「……収容された彼はどういう反応をしているのかしら？」

瑞希は好奇心で聞いてみた。

『は、はい。だいぶ落ち着いているといいますか…』

「なーんだ」

『しかし、加入する条件として「家族には手を出さない」「梅理奈の解放」「契約対象の解放」を要求しており』

「こんな悪の親玉のアジトみたいな場所に連れてこられて尚も引かない…か。良いんじやない？それくらい許してあげれば」

『…上層部は現在、その交渉を飲むかどうか悩んでいるそうで』

『堅いわね。核兵器以上の戦略兵器が仲間になるんだから良いじや

ない。もう一つの化け物の手綱も握り直せるんだから

瑞希は溜息をついて文句を言つ。

「もしかして武装兵士の死者数とか？超能力を持たない武装兵士なんて替えは幾らでも効くでしょ？…表の世界で犯罪を犯した一般人を引っ張つてこればいいだけだし、コストなんてあつてないようなものよ」

『私見ですが、私もそう思っています』

「証拠隠滅にかかった費用や今回の回収騒動の被害なんか全然、痛くもないでしょ」

『確かにそういうますが、表向きは仲間を殺した桜理奈をそのまま釈放するのでは示しがつかないと考えているのだと思います』

「それでもつて少しでも罰を下せたら彼は仲間にならずに自殺するか…暴走するか」

流石に多額の費用を使って回収したのに死なれてしまつては困るので、どうするか迷つていてるといった所か、と瑞希は考える。

『まあ、結局は知恵のリングに仰ぐか…賢者に答えを委ねることになるかと』

「でしょーねー。アナタも覚えておきなさい。何時の時代もジジイやババアが支配する組織はクズなのよ」

『…覚えておきます』

『はいはーい』

『あと、先程の講釈ですが…タメになりました』

「それはそれは」

『……では、私は後始末があるのでコレで失礼します』

実は暇つぶしのために適当な講釈を垂れただけだけど、と瑞希は思った。

テレビ画面から『SOUND ONLY』の文字が消えると、普通のテレビ番組に戻る。

しかし瑞希は見向きもせず、リモコンを手元にテレポートで寄せて電源を切る。

暖色を基調とした服装に身を包んだ瑞希は何も映っていない。テレビに向かって呟いた。

「地獄の味はどうかしら、哀れな子羊さん」

【3-1】 サブタレイニアン（前書き）

この物語は、ある程度の史実を織り交ぜながらも完全にこの現実世界とは完全に別の未来を歩んでいる別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家とかその他の固有名称で特定される全てのものとは、何の関係もありません。何も関係ありません。

つまり、この物語はフィクションです。

【3-1】 サブタレイニア

五月八日。

「ん……？」

啓介は目を覚ました。

隔離された病室の様に真っ白な天井。

それが啓介の視界に最初に入り込んだものだった。

「……」には

啓介は何もない真っ白な部屋にポツンと設置されたベッドで眠つていたようだ。

啓介は上半身だけ起こして辺りを見回す。

鏡も水道も窓も何もない。

横に引っ張るスロープ式の扉くらいしかない。

「（……………そうか、俺は……）」

啓介は思い出した。

生死の境をさ迷うほど重傷を負つた後、武装兵士達に回収されて……それで

「クッソ……」

啓介は右手を握り締める。

「（俺はあいつ等に負けたんだ。……守れなかつたんだ）」

回収された後の治療時、啓介に意識に語りかけてきた存在の声を
啓介は思い出す。

「（眠っている俺の意識にテレパシーか夢催眠みたいなもので潜り込んでも来て……）」

暗部の一員として生きることを余儀なくされてしまった。

「…………」

啓介は自身の髪を触る。

まるで何年も眠りについていた様に髪がボサボサに伸び生えてい

る。

「…埋め込まれた強化細胞の影響か」

啓介は現実を認めたくない気分だった。

「身体が痛い……」

全身が筋肉痛になつたかのような痛みに啓介は耐えていた。
身体に強化細胞を埋め込まれた影響か、戦闘の後遺症かは啓介には分からぬ。

だが、その痛みは啓介は確実に苦しめていた。

啓介は上半身を元に戻すと天井をぼんやりとした目で見る。

「（……もう一眠りするか）」

啓介の瞼は少しずつ下がっていく。

「（みんな無事かな）」

梅村啓介は生きていた。

傍から見れば、生きていたという事実は幸せに聞こえるかもしれない。

しかし、彼はこれから地獄の苦しみを味わうこととなる。

死んだほうがマシだったと思えるような地獄を

五月十三日。

「んん……」

午前八時に梅村啓介は目を覚ました。

啓介は地中海辺りにあるホテルのスイートルームの様な部屋で目を覚ました。

「……」

一人で眠るには大きすぎるフカフカのベットから啓介は起き上がり田を擦つてぼんやりと部屋を見回す。

隣にあるもう一つの同じベットにはアリエルが眠っていた。

「……」

黒色のジャージを着ている啓介は布団をどけて、ベットから降り立つとすぐそばの壁に設置されているスイッチを押して部屋の電気をつけた。

天井と壁の間にある間接照明にオレンジ色の灯りがつく。
啓介は自分の髪を搔く。

そこには女性よりも長かつた髪はなかつた。

しかし、以前と髪形は違つており、首の後ろでダークブランの髪を束ねていた。

女性ほどの長さは全くなく、わずか十センチくらいの長さだったが今までの啓介とは別の雰囲気を感じさせた。

「……」

啓介は黒色のカーペットの上をペタペタと歩いてカーテンがされている窓へと向かつ。

そしてカーテンを掴むと窓の端へと引っ張つた。

「……相変わらず、不気味な街だな」

啓介の目に移つたのは太陽の明かりも月の明かりもない真っ暗闇

の都市。

街を彩るネオンだけが辺りを照らす世界。

「……ジオフロント」

「ここはジオフロント。通称、“常夜の街”」

啓介は理奈の隣を歩いていた。

時刻は朝だというのに空は真つ暗である。

「第三次世界大戦後の経済的に弱つた状態かつ革命後に発足された新政府だった日本にスレイヤーズ、ギルドは擦り寄つた。『資金や世界中の国情勢を操作して日本を有利にするから土地をくれ』ってね。その結果、新日本政府は旧日本政府がバブル経済期に極秘裏に進めて開発失敗したここ 帝都・神戸の地下にある巨大ジオフロントをスレイヤーズ、ギルドに譲渡したの」

つまり、この街は帝都・神戸の地下に存在する巨大な空間だということになる。

「ギルドは構成員の七割をこの都市に住まわせている。残りの三割も地上の帝都・神戸で暮らしている。つまり、ギルドの構成員は必ず神戸に集められるわけ」

二人はネオン街を歩いて通り過ぎる。

「それにしちゃ…暗部の構成員っぽくないものもチラホラ見るが」「この都市は自給自足で生きていけるように作られている。だから地上に赴かなくてもこの都市だけで全てが揃うの。…その為には、構成員以外も必要でしょ？」

「…マジかよ」

「…ええ。でも心配は無用よ。この都市にいる暗部のヤツら以外も地上では生きていけないようなやつ等ばかりだから同情の余地は無いわ」

理奈はナンパをスルーしながら通り抜ける。

啓介は後ろから聞こえてくる怒鳴り声に怯えながら理奈の後に続く。

「「」の町のヤツってほとんどが武器持つてんな」

「暗部の一員として武器もないようじゃ…死ぬわよ」

「うへえー…俺丸腰だぞ」

啓介は空を見上げる。

そこには雲も月も星も無かつた。

「そのうち、武器屋で買えばいいわ。…あとで案内してあげる。それよりも今は…」

理奈は踏み切りの前で止まる。

踏み切りを電車が通過する。

理奈は電車が通り過ぎるまで喋らなかつた。

啓介はそんな理奈を見つめていた。

「案内するべきところがあるわ」

理奈は電車が通過すると同時に開いた踏み切りをスタッタと歩き出す。

啓介は慌ててついていく。

「…それにしても、相変わらず真っ暗だよな」

「」、ジオフロントは帝都・神戸の地上部分から地下に百八メートル潜った部分を天井とした巨大な地底都市であり、空間内部は直径三十八キロメートル・高さは約一キロメートルの巨大なドーム状空間である。

裏世界でも巨大勢力として霸権候補に数えられる組織『スレイヤーズ・ギルド』の本拠地であり、人工は約一百万人で、全員がギルドの構成員か関係者または太陽の光を浴びられない様な存在である。これが啓介の理奈から受けた説明だ。

「地上からの光が一切射さず、常に闇の中。しかも私達が今いる層よりも更に下にも居住空間があるの」

「デカいな……」

啓介の印象としては東京のような大都市の夜の喧騒や雰囲気が常に続いている場所だつた。

「ずーっと夜なんだな…。太陽の光をしばらく浴びてないと死ぬかも」

銀座や歌舞伎町、渋谷、秋葉原といった大都市の派手っぷりが混ざったような街並みに啓介は目の奥がチカチカした感じの痛みを覚える。

「…これから私達は、ギルドの命令に従つて外の世界へと出て行かなくちゃならなくなる。…忙しいヤツの場合だとこの町に滞在している時間より外で工作している時間のほうが長かつたりするわ」

「破壊工作…。オレ、何も出来ないぞ?」

啓介はこれといって特徴的な能力を持たない人間だ。

ハッキングができる程にパソコンの扱いが上手なわけではないし、爆弾や銃器を取り扱えるほど軍事知識に長けてているわけでもない。「これからイヤでも覚えていくことになるわ。生きるためにね」理奈は町の中心地に向かつて歩いているようだ。人の数が徐々に多くなっている。

「…何処に向かつてるんだ?」

「酒場」

「はあ?」

啓介は理奈の言葉が理解できずに聞き返す。

「ああ、言い方が悪かつたわね。…酒場って言つてもそれはただの俗称。正式名称を言えば、“クエスト受注所”かしら」

「クエスト…?」

「着いたら説明するわ。もうすぐだし」

理奈は進路方向に向かつて指を差す。

理奈の指先には白い建物が見えた。

「…宮殿？」

それは巨大な白い宮殿のような建物だった。

中世の強大な帝国が建築したような印象を啓介は感じた。
入り口は東洋的な雰囲気を感じさせる門。

そこを抜けた先には数百年前の侍や忍者とかが実在していた時代の日本やアジアの霸者として君臨していたくらいの時代の中国を髪飾りとするような見事な庭園が周りに建物を囲むように配置されており、巨大な迷路として機能しそうなくらいに広い。

「すげえな。この門から続くデカい廊下…まさに中国って感じだな」

啓介はポツリと呟きながら理奈の後を着いて行く。

「勝手にはぐれないでよね。一直線に進めば受注所だけど、分岐している別の橋を渡つたりしたら全く別の場所に着くわよ?」「えー……」

「人が一キロメートルはあつたであろう巨大な中国的な回廊を一直線に進むと、今度はイギリス辺りにありそうな感じの門」が一人を迎える。

「え、今度は西洋風?」「迷子にならないでよ」

啓介は橋を歩いている人間や酔つて騒いでいる人間を見て、観光地に来たかのような錯覚に襲われた。

「（観光地かよ…。全然、暗部つて感じがしないんだけど）すると今度は一人の目の前に巨大な階段が現われた。
「え…これ何段あるの?」

「さあ？数えたことないわ」

緩やかな階段だが、段数がどう考へても異常だとしか思えないくらいに多い。

古代ローマの神殿の階段のよつた色や装飾だ。

「うげえ……」

「超能力者になつた啓介なら大丈夫よ」

ブツブツと文句を言つ啓介を励ましながら理奈も階段を昇る。

そして一分くらい上り続けると例の白い建物の玄関口に辿りついた。

「…………」

「そり。…………」がジオフロントの中心地のクロスト受注所にしてギルド本部と呼ばれている場所

「本部……」

啓介はファンタジーに出てくる王宮を連想した。

ファンタジーチックな神殿と中東の宮殿を合体させたよつた幻想的な建物だった。

啓介の第一印象は『RPG要素ムンムンな王宮』だった。

「…………」

「大丈夫よ。豪華なのは外だけで中は凄いから」

「どういう意味で？」

「庶民的な意味で」

理奈は木製の扉を左手で押して開く。

そして啓介は中を見た。

理奈の言つとおりだった。

「…………」

啓介は酒や食事を摑つている騒がしい集団を眺めながら呟く。

西部劇のバーとかでよく見られる風景をもつと広く、治安を悪くした感じの印象を啓介は受けた。

「…………」

理奈が啓介に話しかける。

「全然知らないぞ。自室を『えられて以来、上層部のクソ共の顔なんか見てないし」

「そりやね。…私が仲介役だから」

理奈は啓介の右手を掴むと引っ張つて奥へと進み出す。

騒ぎながら食事したり酒盛りしている集団をよけながら一人は奥へと進んでいく。

「啓介は最強の超能力者候補の一人だけ、実戦経験はほぼゼロの素人。使うに使えない。…そんな啓介を使える人材にするために私が相棒として選ばれたのよ」

「…よく上層部に従い続けれるな」

「そうしないと生きていけない。…でも私は何時までもこんな生活を続ける気は無いわ。何時かは絶対に反逆してみせる。…その時が来るまでは命令を聞き続けておくわ」

勝てるはずのないゲームに勝つ。

理奈はそう言っているのだ。

「…それで、オレを理奈が育てると」

「相手を殺さないと生きていけないわ。…私は啓介に死んでほしくないから、相手を殺すための方法を教えることにしたの」

「そりやどうも…」

二人は一番奥にあるバーにつく。

騒がしい後ろと違つてここは静かに食事や酒をとっている人ばかりだ。

理奈はキヨロキヨロと辺りを見回すと目的の物を見つけたのか近寄つて静かに飲んでいる人物の肩を叩いた。

「アンタ…よね?上層部が言つていたサポートしてくれるヤツっていうのは」

理奈の台詞に肩を叩かれた人物は振り返る。

男性だ。

「ああ。確かにボクは君たちと組むように命令された者だよ」

藍色の髪色に上着を脱いだ執事服姿。

啓介に並ぶ身長の細い青年は一人の顔を見て喋る。

「噂は聞いているよ。初めまして。ボクは長門 水晶。年齢は君たちと同じだ。以後、よしなに頼むよ」

青年 長門水晶は啓介に手を伸ばす。

啓介は右手で握手する。

「いやはや…滅多に姿を見せない最上位能力者の格理奈をお目にかかるとはね。僕はラツキーだよ」

「そうかしら?…私達なんて人見知りの激しい「コミュ障ばかりよ」

「（その人見知りの激しいコミュ障には俺も含まれているのか?）」

水晶は自身の左隣の一いつの席に一人を座らせる。

啓介が水晶の隣で理奈が啓介の隣だ。

「最近、この裏社会に堕ちてきたそうだね。…まあ胸糞悪い気分かもしれないが、友人として接してくれると嬉しいよ」

「あ、は、はあ…」

啓介には目の前の青年が暗部の一員とは全く思えなかつた。

啓介が外見と職業の差に戸惑つていると理奈が水晶に声をかける。

「仲良くなるのも良いけど、残りの一人は一体何処にいるの?」

「二人?」

理奈の台詞に啓介が尋ねる。

「ギルドから参り込んでくる任務を僕達、暗部は“クエスト”と呼んでいるんだ。クエストには詳細な分類があるんだが…今は置いておこう。とにかくクエストを受注する際は、一人~五人で行うことなるんだ」

理奈ではなく水晶が啓介の問いに答えてくれた。

「何故、五人かというとだね…それくらいの人数が一番破壊工作や隠密行動に向いているからなんだよ。それより多すぎると見つかりやすいし、それより少ないと不利になる」

「成程な…」

全員が破壊工作や戦闘の技術を備えているわけではないと水晶は啓介に説明する。

「お互いに能力を補い合ってパーティを形成するんだ。そうすれば成功率は高くなるし死亡率も下がる」

「成程」

「ちなみに、四人が実地に赴いて破壊工作や戦闘をして、一人がバツクでサポートする役割となっているんだ」

水晶は自分を指差す。

「今回のクエストだが、長門水晶と梅村啓介と梅理奈に後から来的一人が現場で作業。もう一人が僕達をサポートしてくれる手筈になつていてる」

「はあ……」

啓介は理奈がいつの間にか頼んでいた炭酸飲料を口につける。

水晶はワインを、理奈は炭酸飲料を飲んでいる。

「…つて流されて飲んだけど、いいの？」

「問題ないわ。ここは暗部限定で安いから」

理奈はメニューを見ながら啓介に説明する。

「ちなみに何が食べたい？」

「…おまかせで」

「じゃ…すいませーん。シーフのおすすめを三つ下さい」

理奈が水晶の分も注文する。

その姿を見ながら水晶は言つ。

「基本的にクエスト内容は全員が揃つてから説明するけど…梅さんともう一人の子は前線でボクとキミで彼女達の逃した敵を始末したり、彼女達を囮にして破壊工作を行う役割になると思う」

「…理奈たちを？」

「大丈夫。彼女に並ぶ高火力な能力は中々存在しないし、^{LEVEL}彼女は都市部での戦闘なら無敵クラスだ。もう一人の子も…まあ小上位能力者だけど、十分に強いし役に立つてくれると思うよ？」

「…心配だなあ」

不安そうな顔を見せる啓介に水晶は笑つて啓介の右肩を叩く。

「大丈夫だつて。…まあ、今回集まる全員がソロの経験しかない個

性的な面子だつて言つたつことは心配だけどもね

「もつと心配だよ！」

ますます不安そうになる啓介であった。

【3-2】 U·N·Owenからの招待状（前書き）

この物語は、ある程度の史実を織り交ぜながらも完全にこの現実世界とは完全に別の未来を歩んでいる別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家とかその他の固有名称で特定される全てのものとは、何の関係もありません。何も関係ありません。

つまり、この物語はフィクションです。

【3 2】 U·N·O wenからの招待状

「そういえば、気になつたんだが…」

「質問かい？」

啓介は左肘を突きながら水晶の方を向いて尋ねる。

先程、届いたシェフのおすすめは既に食べ終えている。

「俺つてさ、強化細胞とかいうヤツを注射されたんだ。…それってどういうモノなんだ？」

「強化細胞とは、ギルドが独自開発した技術でね…“身体の修復要素早く行う細胞”なんだよ。効力は三日間。その三日間で瀕死の重傷を負つていようとも意識が回復する程度には良くなるし、通常攻撃以外の攻撃…超能力による攻撃の傷も治癒がある程度早くなったりするんだ」

啓介が武装兵士達に瀕死の重傷を負わされたにも拘らず、このようないにピンピンしている理由はそういう理由のようだ。

「治りが早い超能力者の治癒速度を更に加速させる細胞。…だけど、勿論激痛は伴うし、睡魔は酷い程に襲つてくる。三日間の間は感情の制御が出来なくなる。あと寿命も縮める。…いいことはないね」

「俺の許可なく注射されるつて…どういうことだよ」

「何言つてるんだい？ここは暗部。世界の闇が集まつた光の射さない世界だよ？人権なんてあつたものじゃない」

水晶は啓介の咳きを笑い飛ばす。

啓介は溜息をつくと頭をガシガシと搔く。

「…心配になつてきた」

「初めてのクエストだからそんなに厳しいものじゃないと思うよ？上層部だって大枚叩いてキミを拘束したんだ。…いきなり無茶なクエストは来ない筈だよ」

「それはどうかしら？」

長門の台詞に啓介でも理奈でもない人物が返事をする。
啓介と水晶は後ろを振り向く。

少女だ。

「…上層部が言つてた“新人さん”つてのはこの男？…冴えないわ
ね」

少女は座つている啓介の顔を見下ろす。

理奈がその人物の顔を見て「ゲエッ…」と露骨に嫌な顔をする。
少女も理奈を見ると拒絶反応を示す。

「なんでアンタがここにいんのよ」

「こいつの台詞。…まさかアンタと組まなくちゃならないわけ？」

少女は理奈と組むことを嫌がつてゐるようだ。

険悪なムードのせいで啓介は腹痛が起つてした。

「（理奈とこの女の人が知り合いなのか？）」

憂い章は溜息をつくと少女のほうに左手を出して理奈と啓介に紹介するように説明する。

「梅さんはご存知みたいだけどね。一応、紹介はしておくよ。彼女
は不知火 紗音瑠。僕達と同じ暗部の一員で、今回組むメンバーの
一人だよ」

「不知火紗音瑠よ。…まあ、足は引っ張らないようにしてくれれば
良いわ」

燃え盛る炎のような色をしたロングボーネールの少女 紗音
瑠は啓介にそつまつと長門の隣に座つた。

理奈が殺意満々の視線で紗音瑠を睨む。

「あーあ、なんであのバカと組まなきゃらないわけ？」

理奈はわざと紗音瑠に届くように大きな声で言つ。

「こいつの台詞よ。クエスト中は背中に気をつけなさいよ。」

「その台詞、そのまんま返してあげるわ」

「覚えてなさいよ…」

「（「）の一人が先陣切るんだろ？うわあー…もうイヤな予感しかしない」

啓介が深い溜息を吐くと同時に水晶が啓介のほうを見て何かに気が付く。

すると水晶は手をパンパンと叩いて三人の注目を自身へと向けた。
「はいはい。喧嘩は後でヨロシクね？全員集まつたようだし、そろそろクエストに出発したいんだけれど」

「は？…あと一人が来れないわよ？」

理奈が水晶の言葉の意味を理解できずに尋ねる。

「もう来てるよ？そこに、ホラ」

水晶が指を差した方向を見る理奈と紗音瑠。

「…うわ！なんじゃこりや！？」

啓介が自分の頭の上に何か乗っているのに気付き、驚く。

「……何コレ」

理奈が驚きながら啓介の頭の上にあるものを指差す。

『初めまして』

「……喋ってる」

紗音瑠がポツリと呟く。

「最後のメンバーだが…彼は階段が苦手なモノでね、中々この受注所には足を運ばないんだ。今頃は現地で待っていてくれているだろう」

水晶は三人に説明する。

『遅れてしまい、申し訳』^{せんせん}。長門様『

「いやいや。大丈夫だよ」

「あの…会話中悪いんだけど、コレは何ですか？」

水晶とソレの会話を見ていた啓介が自身の頭の上に立っているものを指差しながら尋ねる。

「ああ、それは最後のメンバーである真鍋凌の創造した情報生命体『アリスト』だよ。詳しい事は彼女に聞くといい」

水晶に紹介された高さ五センチくらいの小さな情報生命体は啓介

まなべりょう

の頭の上から飛び降りると啓介の前に着地し、啓介に頭をペコリと下げる。

『初めまして。私はマスター“真鍋凌”様によつて創造された人工知能を入力された情報生命体です。正式名称は長いので省略させていただきます。どうぞ、私のことは「アリス」とお呼びください』ロングスカートのメイド服を着た妖精：のような人工知能情報生命体を見て啓介は呆然とする。

「……こんな技術、あるの？」

マスター

『真鍋凌の超能力は“情報を質量化する能力”です。私はそこから作り上げられ、人工知能をインプットされた存在なのです』

「……」

啓介は目の前の現象が現実なのかどうか疑わしく感じていた。

理奈は指でアリスの頭を撫でる。

紗音瑠はアリスの背中にある四枚の薄い羽を見つめている。

理奈はアリスの頭を触りながら呟く。

「触れるんだ。流石は“情報を質量にする能力”だけのことはあるわ…」

『マスターは私以外にも数十体の情報生命体を創造して使役されています』

「真鍋凌は“人形遣い”と呼ばれているんだ。情報生命体を使役して戦闘したりするし、日常でもこのように情報生命体を使っているからね」

水晶はそう言つとイスから立ち上がる。

「さあ、今からクエストへと出発しようじゃないか。既に受注は済ませている」

紗音瑠と理奈も立ち上がる。

啓介も立ち上がる。

アリスは啓介の右肩に乗る。

左肩は啓介の能力の範囲内なので乗つてしまつと吸収されて消滅してしまうかもしれないから乗れないのだ。

「私達、ソロで生き残つてきたヤツらをまとめて当たりせぬほゞの
クエストねえ…。どんなものかしり?」

紗音瑠は呟く。

理奈は何も言わず、啓介はげんなりとした顔をしていた。
水晶は啓介の心情など知らないように鼻歌を歌うような気軽さで
歩きながら答えた。

「ただの殺し合いだよ」

梅村啓介、桜理奈、長門水晶、不知火紗音瑠の四人は電車に乗つ
ていた。

「ジオフロントに入れる唯一の方法が鉄道ねえ…」

啓介は自分達以外誰も乗つていない電車の中で窓の外の暗闇を見
ながら呟いた。

「この近畿地方…詳しく言えば、阪神区間を走る鉄道の会社とギル
ドは密約を結んでいいんだよ。…暗部の人間は終点でもないのに途
中で止まる“回送列車”に乗つてジオフロントへと降りるんだ」
ジオフロントの天井から吊り下げられた橋を電車は進む。

徐々に高度が上がつていき、街並みが見えなくなる。

「つていうかよ、俺たち四人とも私服…だけどいいの?軍服みたい
の着なくていいの?」

「何を期待してたの?」

紗音瑠がバカを見るような目で啓介を見る。

「隠密行動が前提なのよ?…一般人に見える服装じゃないと意味な

いじやないの」

「……俺の目にほお前らの服装は全然一般人に見えない」

啓介はボソッと呟く。

理奈は学校の制服であろう袖を肘の部分まで折った白と水色の混ざったカツターシャツと赤色のネクタイに短い黒のスカート。

それに加えて銀で出来ている骸骨などの装飾がジャラジャラとついた銃のホルスターみたいな剣の鞘入れつきベルトを一つを腰にピチリと巻き、もう一つをやや緩めた状態で斜めに巻いている。

それに黒色の靴底の厚さ一センチのパンクチックなレザーブーツというコスプレでも中々お目にかかるない様な異常な服装だ。

『私見ですが、確かに桙様の服装は一般人との適合率が著しく低いように思われますね』

「あつはっは！情報生命体にまで言われてやんの！」

「はあ！？」

「（不知火…。そういうお前はどうなんだよ）」

紗音瑠の服装も色んな意味で普通じゃない。

ふくらはぎくらいまでの長さがあるピッヂリとした加工済みの穴あきジーパンに黒色のお腹まで届いていないやや短いタンクトップのような服。

その上に白の大きな袖の短いワイシャツを羽織っている。

「（夏場なら全然大丈夫そうなファッショングなんだうけれど…今は春だぜ？）」

啓介は水晶をチラリと見る。

執事服から過剰な装飾を取つ払い、黒色をやや薄めた感じの服：としか啓介には表現できない。

「（俺だけかよ。マトモなの）」

啓介は青を基調とした普通の服装だった。
とにかく見所なし。

「…………はあ」

啓介は溜息をついて明かりのついていない電車の屋根を見る。

車内は暗い。

「…ところで、今回のクエストを説明して欲しいんだけど？」

理奈との口喧嘩を済ませた紗音瑠は先程駅で購入したコーヒーで唇を潤らせると水晶に尋ねた。

「今回の舞台は帝都・京都だ」

「京都…？」

啓介は神戸と同じように閉鎖された超巨大閉鎖都市を頭に浮かべる。

「京都で今、何が開催されているかわかるか？」

「…個展？」

「違う。日本国と中華民国の首脳対談だ」

啓介のボケを水晶は軽くあしらつて説明を始める。

「中華民国は約三十年前の第三次世界大戦後に中華人民共和国から独立した新しい国だというの」「存知だよね？」「誰でも知ってるわ」

啓介がイラッとしながら答える。

「その日台首脳会談を行うために中華民国首相が日本入りしている。俺たちのクエストはそれを……」

「暗殺すればいいの？」

理奈の質問に水晶が溜息をつく。

「微妙に違う。中華民国首相と日本国首相が集まるチャンスだ。…東アジアにおける各国の情勢を知つていればすぐに解けるはずだ」

啓介は考える。

「……つまり、俺たちは一人の首相の暗殺を防げば良い訳だな？」

「正解」

約三十年前の第二次世界大戦時、東アジアは世界最大の激戦区となつた。

中国・朝鮮半島・ロシアといった大陸側に攻め込まれた日本はヨーロッパやアメリカの力を借りて侵略を防いだ歴史がある。

それから今日に至るまで、日本と東アジアの大島側に位置する国

家は仲が良くない。

「中国にはまだに台湾の独立を認めていない右翼派だつて存在している。それらが日本にやつて来て憎き一本のトップと中華民国の首相を暗殺しようとしているわけだ」

「ふーん…。中国政府はとつくに台湾を諦めたのに?」

「のに、だ…民間人は納得し切れていないんだろうな」

水晶は紗音瑠に返答する。

アリスは啓介の頭の上にちょこんと正座すると長門に尋ねた。
『つまり、我々は帝都・京都に潜むテロリストを殲滅すればよろしいのですね?』

「そういうこと…君のご主人様は?」

『既にテロリストの潜伏先を洗い始めています』

「流石は元・国際指名手配されていたハッカーなだけはあるね」

水晶が口笛を吹いて賞賛する。

「テロリストか…。武装とか人数とかは?」

理奈が水晶に尋ねる。

「武装は不明。小さな組織だから超能力者がいるとしても数名程度だろうな。…人数は中国政府の報告によれば、三千人弱」

「三千…人?」

啓介が絶句する。

「つてか…中国?」

紗音瑠が尋ねる。

「この依頼者は中国政府の外務省だ。中国軍は今、簡単に動かせない状況らしいから、日本の方で対応願いたい…つてね。依頼者からは全員殺してしまつても問題ないと言わわれている」

「ふうん。…まあ、そっちの方が楽でいいや」

紗音瑠は「一ヒーを飲む。

「お前ら…三千人つて大人數だぞ?怖くないの?」

「何で?…相手はただの銃を持った一般人。…超能力者もほぼゼロばかりでしょうね。どこに怖がる要素が?」

「いや…もういい」

テメエらに聞いた俺がバカだつたと啓介は心の中で呟いた。
列車は既に帝都・神戸の地下鉄に入っていた。

「大丈夫だよ。先陣は女性陣が切ってくれるだろ? 僕達は後ろ
で取りこぼしを掃除するだけさ。死亡率はほぼゼロだよ」

水晶は啓介の右肩を叩いて励ます。

「励ましになつてないからね。ソレ」

「待つていたでござるよ。梅村氏!」

帝都・京都。

太陽が昼間に昇った頃、四人は目的地へと到着した。
大阪で乗り換えた電車から降りた四人をホームで待つていた人物
がいた。

「…………」

啓介は絶句していた。

「どこかしましたかな? 梅村氏?」

目の前にいたのは啓介と同じ年くらいの青年だった。

「ああ、自己紹介が遅れたでござるな。拙者は真鍋凌という名前の
者でござる」

「…………」

「?…ああ、もしかして拙者の容姿について絶句しておられるので
すな?」

真鍋凌は笑う。

「……一応聞くけどさ、お前って忍者?」

「そんなわけないで」*じざる*。拙者は生まれも育ちも普通の一般人
だつたで*じざる*よ」

ぐるぐる模様の眼鏡にバンダナを頭に巻いている。

身長は程度で理奈より少し低く感じるので恐らく百六十~百七十センチ。

体重は七十~七十五くらいに見える。

「なんでビームサーべル?」

「これはこれは…梅村氏も拙者と同じ…?」

「いや……うん、もういいわ」

丸めたポスターが入ったリュックサックを背負つている。

「…典型的なアキバファッショーンね」

理奈が咳く。

「これはこれは。お褒めに預かり光榮で*じざる*」

「(褒めてるの!?)」

啓介は心の中で突っ込んだ。

すると水晶は啓介の隣で説明を始めた。

「彼は元々、モデル雑誌とかに載るくらいイケメンだったんだけど、

今ではアキバ系に目覚めて自分からこの体型とファッショーンにした
んだよ」

「……つまり、眼鏡を取るとすっげーイケメンってこと?」

啓介は田の前の元・イケメンを見てげんなりした。

「(つまり、容姿も言葉遣いも全部演技つてことか...)」

「まあ、とにかく今は彼の収集した情報でも聞こいじゃないか。いいかな?」

「勿論で*じざる*。既に場所も確保しているで*じざる*よ」

歩いていく凌と水晶の後に紗音瑠が続き、その後に啓介と理奈が
続く。

「…理奈」

「何?」

「…ホントにアイツらって暗部なの?」

人殺しには見えないんだけど、と啓介は呟く。

理奈は息を吐くと啓介に言った。

「自己防衛みたいなもんよ」

啓介は意味が分からなかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7919y/>

クロス×ドミナンス

2012年1月12日21時57分発行